

文化庁 Japan Cultural Envoy Forum 2015 文化交流使 フォーラム 2015

——— 第12回文化庁文化交流使活動報告会 ———

日本の心を世界に伝える

Conveying the Spirit of Japan

報 告 書

下記のウェブサイトおよび facebook ページにて、
これまで指名された文化交流使のご紹介や、現在活動中の文化交流使の最新情報を発信しています。

<http://culturalenvoy.jp/>
<https://www.facebook.com/JapanCulturalEnvoyForum>

For more information about Japan Cultural Envoys:

<http://culturalenvoy.jp/en/>
<https://www.facebook.com/JapanCulturalEnvoyForum>

文化庁文化交流使フォーラム2015 議事録

目次

文化庁文化交流使フォーラム 2015 議事録	3
活動報告	
レナード 衛藤 Leonard Eto	16
森山 開次 Kaiji Moriyama	18
林田 宏之 Hiroyuki Hayashida	24
中澤 弥子 Hiroko Nakazawa	26
若宮 隆志 Takashi Wakamiya	28
平野 啓子 Keiko Hirano	30
長谷川 祐子 Yuko Hasegawa	36
森山 未来* Mirai Moriyama	40
林 英哲* Eitetsu Hayashi	42
事業概要・文化交流使一覧	47

※今回のフォーラムにはご出席されておりません。





レナード衛藤氏によるオープニング演奏及び森山開次氏による即興パフォーマンス

開会挨拶

青柳 正規 文化庁長官

本日は、政策研究大学院大学を会場に、「文化庁文化交流使フォーラム 2015」を開催できますことを大変喜ばしく思っております。開催に当たり、主催者を代表して一言御挨拶申し上げます。

文化交流使事業は平成 15 年に開始されました。トップレベルの芸術家、文化人を、文化庁文化交流使として指名し、諸外国で活動していただくことを通じて、世界の人々の日本文化への理解を深めることや、海外の芸術家や文化人とのネットワークを形成し、強化することを目的としております。事業開始から本年で 12 年目を迎え、これまでに延べ 115 人と 2 グループ、26 団体に 76 개국で活動していただき、日本の洗練された文化とそれを生んだ心を世界に伝える交流活動に貢献していただいております。

本フォーラムは、平成 25 年度、26 年度にかけて文化交流使としての活動を行っていただいた方々に、その成果をプレゼンテーションにより発表していただくものでございます。平成 25 年度文化交流使としては、ただいま素晴らしい演奏とダンスを披露していただきました和太鼓奏者のレナード衛藤様とダンサー・振付家の森山開次様、キュレーターの長谷川祐子様、そして平成 26 年度文化交流使としては CG アーティストの林田宏之様、食文化研究者の中澤弥子様、「彦十蒔絵」代表の若宮隆志様、語り部・かたりすとの平野啓子様と、各分野の第一線で精力的に活動を行っていらっしゃる 7 人の皆様に御出演いただいております。これから始まる本日の発表の場を、私も心から楽しみにしております。

私の個人的なことではございますが、このような交流使は昔からフランスなどでもやっております、私は大学の 2 年生の時だったと思いますが、まだフランス語を習い始めたばかりの頃に、フランスの交流使としてコメディ・フランセーズが日本に参りました。1964 年のことです。その時、私は



青柳長官による開会挨拶

フランス語が全くできないにもかかわらず、そのコメディ・フランセーズがやったジャン・ラシーヌの『小さなブルジョア』という演目のものを観に行きまして、大変感動をし、そして違う文化ではあるけれどもその素晴らしさに触れることができました。おそらくそのような異なる文化との出会いというもの、そしてそのことによる感動や、それを契機に理解したいと思うこと、それがいわゆる、異なる文化を相対化し、そして理解するということが世界平和につながる一番の原点ではないかと思います。そういった意味でも、この 7 人の方々が様々な地域で御活躍くださり、その異なる文化の中で、こちら側の文化やあるいは相手の文化を理解するというに努めていただいたことに対して、深く感謝しております。本日は駐日大使館の皆様や留学生の方々にも多数御出席いただいております。本フォーラムが皆様にとって日本文化への理解を一層深める機会になると共に、日本と諸外国を結ぶひとつのきっかけとなることを強く願っております。最後に会場を御提供いただきました共催者の政策研究大学院大学にお礼を申し上げますと共に、本日司会の任を取っていただいた NHK 解説委員の中谷日出様に、心から感謝申し上げ、本フォーラムが多くの方々に日本文化の魅力を伝える機会となることを祈念しまして、開会の言葉とさせていただきます。

共催挨拶

大山 達雄 政策研究大学院大学理事

政策研究大学院大学の理事をしております大山と申します。文化庁文化交流使フォーラムは、今回で 12 回目の開催となりますが、私たち政策研究大学院大学では、第 10 回開催時より会場を提供しております。

この政策研究大学院大学は六本木という東京の中心にあり、全国の国立大学の中では一番小さな大学です。ただ、一番小さな大学ではありますが、一番新しい大学でもあります。1997 年に設立以降、まだ 20 年程ですが、実質的にはそれ以前に埼玉大学の大学院の独立研究科として約 20 年間教育研



大山理事による共催挨拶

究を行っていたため、それも入れますと 40 年程の歴史があります。40 年と言いましても、大学の歴史としては非常に浅いものです。ただ、卒業生は全部で埼玉大学時代を入れますと、3,000 人を超えております。ですから、40 年も経っているというところ、ここの卒業生ももう社会の中ではリタイアするくらいの年齢も出ております。また、本学は日本に限らず、諸外国のミッド・キャリアの方々も受け入れており、ほとんどが政府機関、中央政府、地方政府、あるいは銀行などで働かれている方が多く、卒業後はそれぞれの国に戻って活躍されております。私達の大学はそういう意味で、一番小さな大学、それでいて一番新しい大学ではありますが、一番インターナショナルな大学ではないかと自負しております。と言いますのも、本学では全学生の約 3 分の 2 が外国人留学生で構成されており、講義もほぼすべて英語で行われております。日本の国立大学が約 90 校ある中で、このような大学はほとんどありません。そういう点では非常に誇りを持っております。

私達の大学には 15 本程度プログラムがあります。公共政策というプログラムが主となりますが、その中にひとつ文化政策プログラムというのがあり、文化政策が研究・教育の対象になります。内容としては例えばアートマネジメントや文化のまちづくり、文化観光、文化政策、イベントのやり方、予算の配分の仕方などです。本日の「文化庁文化交流使フォー



司会を務めた中谷日出氏

ラム 2015」にも、本学の学生が多く参加しており、大学としてもとても良い機会だと思っております。

本フォーラムのように、トップレベルの方たちのプレゼンテーションを実際に見ることができるということは、海外の方だけでなく日本人にもぜひ観ていただいた方が良く思っております。少なくとも私自身、第10回より拝見している中で、こんなにすごい方たちがいるのかという驚きを毎回感じております。本日も皆さんのプレゼンテーションをぜひ見ていただき、日本文化に対して理解していただき、それが日本、あるいは日本人に対する理解にもつながって、国際交流、国際関係などをもっとスムーズに、積極的にやっていけるようなひとつのきっかけになればと思っています。

文化庁の方々それから大使館関係の方、また、本フォーラムの準備にもいろいろな人たちに御協力していただいております。皆様に感謝いたしますと同時に、実りあるフォーラムになることを期待したいと思います。ありがとうございました。

活動報告

レナード 衛藤 和太鼓奏者

活動期間 平成 25 年 8 月 8 日～平成 26 年 7 月 23 日

活動国 スイス、フランス、イタリア、チュニジア、
ポルトガル、インド、オランダ、ドイツ、ハンガリー

文化交流使としての活動では、9 か国を訪問。多くのダンサーとコラボレーションし、充実した活動ができた。太鼓は元々、人に向けてではなく、自然や神に対する祈りや敬意として演奏するのが原点であるため、一年の活動と日本の無事を祈り、文化交流使の活動をスイスの山とのコラボレーションでスタートした。

私は太鼓奏者、共演するダンサーも同じ表現者ではあるが、日本文化とヨーロッパ文化では共通項が見えづらい。しかし、

無理に共通項を見出すよりも、違いは違いのまま平行線として捉え、出会った私たちで新たなストーリーをクリエイティブと呼びかけた。ダンサーや振付家に提案したストーリーとは以下のようなものだ。

『太鼓から叩き出されるリズムによって1つの生命体=CREATURE が生まれ、CREATURE は自らの鼓動を感じ、肌や髪などに触れるという確認作業をしていく。やがてCREATURE は立ち上がり、歩き出し始めて「踊り」という表現を獲得する。』

このストーリーを振付家やダンサーは楽しみ、いろいろなイメージを持って参加してくれた。日本の伝統、ヨーロッパの伝統を取り払い、ファンタジーに向かって音と肉体を駆使し作品を創っていった。その作業が終わってから、日本とは、太鼓とはというようなディスカッションをした。よって順番としては、まず表現をぶつけあい、それから言葉でいろいろなものを埋めていくということを繰り返した。文化交流使の活動を通じて感じたことは、国による違い、民族による違い以前に、一人ひとりが違うということを創作や日常を通じて、広く深く感じたことだ。

ヨーロッパの国々はお互いが地続きでつながっており、大きなカンパニーであればあるほど、様々な国、言語が混ざりあっている環境にある。そうした国々での文化交流使としての体験を通じ、ものづくりでお互い理解していく上では、違いを乗り越えないと何も始まらなないと学んだ。90 年代までは、和太鼓とロック、和太鼓とジャズのように、対比で文化を見ていく試みが主流だったが、今はいろいろな文化が混ざっていく中で、どういう未来を共同で創っていけるかという時代になってきている。そのためにはテーマを共有し、同じ絵やイメージを描ける環境作りが必要だ。ヨーロッパでは日本でできないことを実践してきた。今はヨーロッパでやり遂げたという達成感と、日本では各国のアーティストが集い、創作し合える環境作りから始めないとならないという非常に厳しい現実を感じる。今後は、表現者として日本でもヨーロッ



森山開次氏

パで得たような体験ができるパフォーマンス、ワークショップを発信していきたい。

中谷（司会） 日本とヨーロッパでは、ヨーロッパのほうが環境は良かったか。

衛藤 日常の表現が違う。ヨーロッパでは日常的に表現するが、日本人は現代においてもあからさまに表現しない文化が基本にあると思う。その意味において受け皿を作っていく必要を感じた。

中谷（司会） 太鼓は日本では神的な意味を持っているとの話だ。

衛藤 特定の宗教という話ではなく、日本でもヨーロッパでも、太鼓は「祈り」が込められているということは理解してもらえたと思うし、音の響きで表現者同士が理解し合えたことで、日本に興味を持ってもらえた。

森山 開次 ダンサー・振付家

活動期間 平成 25 年 10 月 18 日～ 12 月 3 日、

平成 26 年 1 月 4 日～ 19 日

活動国 インドネシア、ベトナム、シンガポール

文化交流使として、3 か国を訪問。現地アーティストとダンス作品の共同制作と発表のほか、デモンストレーションやワークショップを行った。身体表現を通じた現代日本の文化の発信と、お互いの文化に対する理解を目的とした。ベトナムのハノイ、インドネシアのバリ、ジャカルタ、シンガポールなど、主に現地の大学でワークショップを行い、ひらがなをモチーフとした文字ダンスなどを一緒に踊った。バリでは日本語補習校のこどもたちにダンスを教えたが、将来、インドネシアと日本をつなぐ存在へと成長するだろうと実感した。「LIVE BONE」のデモンストレーションツアーでは、観客に囲んでもらうスタイルで、体をモチーフにした衣装を

身に付け、コミュニケーションをとりながら踊ることを目指した。骨や内臓など体の部分を扱うことで、誰もが持つ命への切実な思い、大切さを共有できたかと思う。歌詞は日本語のため、現地の人々は意味が分からないが、反応は非常によく、ダンスがあれば伝わると感じた。訪れたどの都市、どの会場でも一体感のあるパフォーマンスを行うことができ、身体表現の可能性を改めて再確認したツアーであった。各滞在先で言葉・文化の違いなど、様々な壁はあるものの、特にこどもとの関わりにおいては容易に壁を越えることができ、またダンサー同士のコミュニケーションではお互い尊重し合う気持ちを肌で感じる事ができた。文化交流の可能性は無限にある。文化交流においては、一人ひとりが違う、文化が違うことそれ自体を知ることがスタートになる。文化交流を広めるのが目的であったが、今回の文化交流使を通じて一番感じたことは、交流することが、自国の文化そのもの、自分自身のことを知るきっかけになったことだ。自分の心を知るためには人と会うなど、何かと関わるが必要だ。踊りは何かと出会わないと成立しない。今後の創作においても非常に有意義な機会となった。

中谷（司会） 舞踊の本場であるインドネシアで積極的に活動したようだが。

森山 私は踊るときにトランスする。踊るときに我を忘れているのではなく、何らかの意志を持っている。トランスダンスというものがバリにあると知り、それを体感したかった。インドネシアの人々が、昔から生活に根差し、祈りの中で行ってきた舞踊は、私の踊りに通じるものがあった。

中谷（司会） 海外に展開することで言葉の壁を越えて伝えられるというのが森山さんのメッセージか。

森山 予想以上の熱狂を受け、日本の現代ダンスの可能性を強く実感する旅になった。交流はいろいろな方の助けがあつてこそ。独りで渡航すると、交流のありがたみやつながりがダイレクトに見えてくる。交流と同時に自分の中を掘り下げていく作業を持つことで、滞在がより有意義なものになるだろう。



レナード衛藤氏



中谷氏によるインタビューに応じる森山氏



林田宏之氏



林田 宏之 CG アーティスト

活動期間 平成 26 年 11 月 1 日～ 12 月 14 日

活動国 クウェート、ヨルダン、レバノン、サウジアラビア、
バーレーン、ベトナム、タイ

CG を中心に、日本のアニメやゲームというエンターテインメント文化、オタク文化について紹介し日本の伝統的な文化と違う、新しい文化をレクチャーした。

テレビコマーシャルなどの制作以外に、オリジナル作品として、人間の肉体を分割・再構成して、一見グロテスクに見える、人間の持つ肉感を表現する CG を制作、発表している。文化交流使としてこれらの作品を見せていくと面白いと思ったが、中東では人の肌を見せることを好まないこと、女性の目以外の全てを隠す服装として体现されるように、人の肌やエロティックなものを好まず、親からもらった体を変に加工して作品とするのはタブーであることが分かった。タイであればこういう作品は好まれるだろうが、社会主義のベトナムで展示するには政府の許可が必要になる。このような事情から当初の計画を変えて訪問先でのオリジナル作品の発表は止め、普段仕事として携わっている作品をレクチャーした。

訪問した国々で行なった CG のワークショップでは、ハイエンドな 3DCG を使い、自分で考えたキャラクターを使ってアニメーションを制作したり、CG 経験者には古典絵画を参考に、照明（ライティング）を CG に取り入れる手法をレクチャーした。中東地域の大学では CG を制作するための設備が普及していない。そのような環境で行ったグラフィックデザインのワークショップでは、3DCG をそもそも知らない人が多いため、いきなりソフトを使って CG 映像を作るのは難しく、経験がなくても CG の制作を体験できるもの考えた。中東では建築学部はあるが CG を学ぶ学部が少ないため、CG 建築のオペレーションを行った。クウェート大学の建築

学部では、写真などで日本的な建築物を説明し、日本的なものとクウェートのものを融合したデザインを制作してもらった。

レクチャーでは、日本の新旧アニメや特撮映画が世界のエンターテインメント文化に与えた影響、日本の人気テレビコマーシャルに CG がどのように使われているか、現在のオタク文化と古典文化のつながりについて解説した。秋葉原、コミケ、コスプレなどオタク文化のレクチャーでは、明らかに「オタク」な中東の人々が多く集まり、コスプレを行い楽しんだ。中東の人々は日本のアニメにとっても詳しく、スライドでコスプレを見せるとすぐに反応を見せた。一部、日米アニメの違い（製作費の違い、1 秒間に使うコマ数など）、日本アニメ独特の表現についてもレクチャーを行った。「萌えキャラ」という概念は元々アンダーグラウンドだったが、最近では商業広告にも採用されており、民間企業だけではなく選挙や自衛隊募集でも採用されていることを紹介した。イラストそのものを CG で動かしてアニメを制作する技術を紹介すると、来場者はとても興味を持っていた。

中谷（司会） 中東の人々はずいぶん刺激を受けていたようだが。

林田 中東でもファイナルファンタジーは人気で、それに携わっていた人間だと伝えたと神様のような扱いを受けた。日本独自のアニメ表現やプロフェッショナルな CG に興味を持っており、現地でもよく聞かれたのは、英語で日本のアニメや制作方法が理論的・体系的に書かれた本はないのかという質問。文化交流として、ぜひそのような書籍も作ってみたい。

中澤 弥子 食文化研究者、長野県短期大学教授

活動期間 平成 26 年 8 月 10 日～ 10 月 13 日

活動国 フランス、ドイツ、ポーランド、ハンガリー、
イタリア、スロバキア、イギリス

短期大学や幼稚園で農業体験や調理実習を活用した食育活動や、長野県内各地で経験豊富な農家のお年寄りに聞き取り調査を行って郷土料理について研究しており、そこで経験してきた日本食のすばらしさを伝えることを目的として交流活動に努めた。また、ヨーロッパ各国の食文化、特に学校給食と食育について、さらに、日本食がどのような伝わり方をしているのかを知りたいと思い、関係施設の訪問や関係者への聞き取り調査を行い、たくさんのことを吸収することができたと思う。

最初に、フランスとドイツにホームステイして、飲料水や食材、調理設備の違いなど、日本食を紹介する準備を行った。和食が日本人の伝統的な食文化としてユネスコ無形文化遺産に登録されたことを念頭において、日本食についてのワークショップや講演会、試食会を開催した。お節料理に込められた健康長寿を願う気持ち、自然を尊重する精神性、家族や地域を結ぶ社会性、日本各地の風土が生む多様な地域性について、長野県で今なお根付いている事例を示して伝えた。

太巻き祭り寿司の調理デモンストレーションを行った際、参加者が「お寿司は醤油をつけて食べるものだ」という認識からか、祭り寿司に過剰に醤油をつけて食べていたのが印象に残っている。また、太巻き祭り寿司作りを大変楽しく行った。日本食についてもよく知っており、現地の日本食レストランに通ったり、自分でも日本食を調理していたり、知らなくてもこれから習ってみたいという人が多かった。アンケートの結果では、寿司、刺身、天ぷら、味噌汁、ラーメンが人気だった。日本食のどのようなところが好きかと聞くと、健康的であること、目でも楽しめること、繊細であることなどが挙げられた。現地は日本食ブームであると考えていたもの



中澤弥子氏

の、だしや食材が好まれるか非常に心配していたが、皆に喜んでもらえた。海外でも日本食は好まれる、受け入れられていると感じた。

ローマで講演の前に、イタリアの公共放送局「RAI」から発酵食品の取材を受けた。RAI ではこの取材のほか、岐阜県にも発酵食品の取材に行き、報告するとのことで、関心の高さがうかがえる。イタリアはお母さんの味、伝統料理を大事にする食文化で、他の国の食文化は受け入れられないかもしれないと心配していたが、ミラノの日本食紹介のイベントで、若い人が意外にもオシャレという感じで日本食を好み、関心も持っていることがわかった。ローマの講演会にも予想を超える多くの方の参加があった。

中谷（司会） うまく作るコツは。

中澤 心を込めて作ること。心を込めて料理を作ると、その思いが伝わり、皆さんから喜ばれた。

中谷（司会） 食文化の分野においてどういう方を文化交流使として派遣すべきか、選ぶのが難しいものだが、中澤さんは成功した。

中澤 活動後、文化交流使として行った活動について伝えて欲しいと言われる機会が多い。活動をきっかけにいろいろな方との交流の輪が広がっていて、とても感謝している。



中澤氏による太巻祭り寿司のデモンストレーションを交えた発表の様子



若宮 隆志 「彦十蒔絵」代表

活動期間 平成 26 年 11 月 2 日～ 12 月 3 日

活動国 イギリス、フランス、中国

石川県輪島市に生まれ、漆器の制作をしてきた。輪島市は漆器に携わる人が多い町である。現代日本では漆器を日常的に使う機会がなくなってきており、輪島市を含め、職人の数が減っている。漆芸に携わる人がいなくなる中で、どうやって伝統文化を残していこうか真剣に悩んでおり、続けていくために試行錯誤していたところ、文化交流使に指名いただき、海外で活動したことで、将来に明るい希望が湧いてきたということを発表する。

外国の方に漆器はあまり知られていないため漆の木から取れる漆の分量が希少であること、漆の長い歴史、食文化や冠婚葬祭に使う以外に建築や調度品にも幅広く使われていること、イエズス会を最初にフリーメイソンやマリー・アントワネットなど海外の人々の間でも広く普及していたことを、スライドを使って説明した。ロンドンでの講演の翌日に Bonhams でオークションが開催され、明治の漆芸家・柴田是眞（しばた ぜしん）の鉢の木蒔絵に 1 億 5 千万円以上の値が付いたのを目の当たりにし、その後の活動で、このように今でも日本の漆芸が海外で求められていると話した。

現在では各工程で細分化されてしまった技術者たちを個々ではなく技術集団としてまとめ、明治時代まで主流であった「お互いの技術を結集してものづくりできる場」を作りたいと考えている。また、棟梁・親方がいないせいで、作らせる人がいないため職人が減っている。そのため自分はものづくりする側ではなく棟梁の役割を担おうと考えている。そうしたことを踏まえた上で文化交流使としての活動では、サイ、カブトムシなどをモチーフにした我々の作品を、作品が生み

出された日本の文化的背景と合わせて紹介した。

北京では通訳なしの日本語でのセミナーを開いた。海外では壺など「土もの」は分かりにくいので、紅葉したモミジの葉っぱを土ものに当てていろいろな色が出る様子を見せ、良さを伝える工夫も行った。文化交流使としての活動や私的な活動を通じ、日本のものづくりの緻密さ、根気よく続ける日本人の精神、ものづくりの中に込められた家族や隣人へのおもてなしの心について、道具を例に挙げて訴えてきた。それらを通じて、日本人について理解していただき、相互理解につなげるということが今回の活動のまとめになる。

中谷（司会） 漆芸の問題を背負っての海外活動だったが、海外での受け止めは日本とは違っていたか。

若宮 日本では漆器は「使うもの」という考えが一番にあり、傷みやすいため敬遠される傾向だ。しかし海外では漆器が「アート」として捉えられており、反応は日本と海外で違う。

中谷（司会） そこで戦略が違ってくるといえるのか。

若宮 海外で面白い、買ってみたい、置いてみたいという反応があった。制作現場を見てみたいという声があり、実際に 12 月に帰国後、海外から何組か輪島市に見学に来た。コラボレーションしたいと言う作家もあり、今後発展させていきたい。

中谷（司会） 後継者は出てきそうか。

若宮 やってみたいという人をつのっている。そのために取ってユーマアのある漆器を作り、興味を持ってもらえるよう心がけている。

中谷（司会） これからどんな展開をしていく予定か。

若宮 漆器だけでは弱いので他の素材とコラボレーションし、融合した工芸を考えていく必要がある。明治以前は融合が多かったが、以降は漆は漆、ガラスはガラスと分かれてしまったところに限界がある。



平野啓子氏



こうした熱意ある海外の人々を見ると、日本人にきちんとした文章を語ることもしっかり教えていかないと、いずれ海外に追いつかれてしまうのではないかと感じた。

日本語は国境を越えられるだろうかと心配したが、日本語の響きの美しさは、海外の人々に新鮮な驚きを与えることができることを実感した。日本語を使う語り部として、美しい日本語で国際交流していきたい。

中谷（司会） 日本における語り部はどのくらいの人数がいるのか。

平野 名作名文を暗唱する語り部のネットワークも広がっているし、全国各地に民話や伝説などの語り部がたくさんいるので、そういう方を含めれば、1 万人を超えるのではないかなと思う。

中谷（司会） 文化交流使としての経験を通しての感想は。

平野 日本文化の素晴らしさを直接海外の人たちに知っていただくことにより、日本への理解につながる大きな扉を開くことができるように思う。今回、「語り」で予想を超える大きな扉を開くことができたのを実感した。

中谷（司会） 文化交流使として「語り部」を派遣することは、難しい気もするが。



中谷氏によるインタビューに応じる平野氏



若宮隆志氏



長谷川祐子氏

平野 それが杞憂に済んでよかった。音色だけで楽しんだ人もおり、音楽的だという声が多かった。子音と母音で組み合わせられている日本語の美しさを知っていただく上で、「語り」は有効だと思う。

中谷（司会） 語り部はどういう場所で行うのが適しているか。

平野 様々なケースがあるが、普段は100～500人ほどでやる。今回訪問した先はだいたい300人規模だ。海外でも日本語に興味のある人が大勢来ていただけるという発見ができて嬉しい。

長谷川 祐子 キュレーター（学芸員）、大学教授

活動期間 平成26年3月12日～7月14日

活動国 アラブ首長国連邦、ドイツ、モロッコ、フランス、アメリカ合衆国、モナコ公国、アルメニア、グルジア、スウェーデン、ベルギー、イギリス、イタリア、中国、チェコ、ハンガリー、スイス、ロシア、ポルトガル

文化交流使として18か国、約27か所のインスティテューションで講演を、モスクワのV-A-CやロンドンのRCAのキュレトリアルコースで2回のキュレーターワークショップを行った。またフランスでは菅木志雄の個展を開催した。活動を通じて重要視したのはトランスレーションすることだ。つまり日本文化や表現の現状、「現代アート」を翻訳・解釈して説明すること、言葉にすること、ブランディングする方法が大事であるため、文化が違う人にどうやって伝えるかについて考えた。

グルジアやロシア、モロッコなど通常の仕事の範囲では行けないところにも文化交流使の活動で行くことができ、日本とはどういうものか知る機会になった。日本のアートや文化を紹介すると共に、日本のキュレーターがどのようにグローバルを見ているのかという問いにお答えするのが今回の仕事だった。

菅木志雄の「もの」派という理解しにくい芸術をそのまま伝えることを目的に展覧会を構成した。海外では30代や40代では日本のアニメを見て育った人が多い。ストラスブール大学の講演では、日本のポップカルチャーとアートについて取り上げた。アートだけではなく、情報デザインやファッションを勉強している学生も集まったが、キュレーターとしてファッションや建築の展覧会もしているの、そこも織り交ぜてレクチャーを行った。純粋に現代アートだけについての関心はあまり高くないため、ほかのものと合わせての紹介となったが、この経験から、現代アートについてきちんと伝えなければならないとますます思うようになった。アルメニア、エレバンなどでは、きちんとした美術館があまりない。東欧、旧ソビエトの影響が強かったところにおいては、今若い人たちが新しい美術館、インスティテューション、アートを模索しており、政府の協力なしに、アングラなクラブなどで日本やアジアの状況を話す機会を持てた。

3.11以降の政治的なコンセプチュアルアートが人気であった。コンセプチュアルアートはイギリスが発達しているが、これを紹介すると、イギリスの専門家との間で、日本のコンセプチュアルアートはアクティビスト的であり、事件に対して社会的なアクションをしているだけではないかという議論があった。

女性についてのトピックも人気があった。戦後の現代ア

トで著名な日本人アーティストについても、「オルタナティブ」として、これまであまりまとめて語られなかった「もうひとつの歴史」として紹介した。海外で最もよく知られていたのはやはり草間彌生とオノ・ヨーコだったが、これまであまり語られていなかった現代アーティストらについて話していく過程で、関心が高まり、日本の現代アートの特性と特徴があぶりだされたように思う。日本の現代アートの特徴はポップさ、パフォーマンス性（時間芸術）、アートだけではなくデザインや空間の横断性にあり、プリミティブかつ情動的な感情をパーセプションで表していく強さも特徴である。

オルタナティブ・コンセプチュアリズムとして、海外からアートとみなされている日本の高いレベルのデザインを紹介した。日本では従来とは違う独特のクロスディシプリナリーがあり、ファッション・アート・建築が水平にあってお互いに豊かに交差しており、ハイ・アートがヒエラルキーを持っているヨーロッパとは全く違う特徴があるということを話した。

コラボレーションのプロセス、会話のプロセス、人とのように関わり、相手の意見を捉えてクリエイションにつなげていくかということが日本のクリエイターの特徴であるため、これを紹介することで、高い関心が得られた。日本にはクリエイティブな建築が多いが、これは日本の建築家がクリエイティビティにおいて、建築に限らず、1つの空間モデルをいろいろな形で見せているためだと紹介し、高い関心を得た。日本で行われている建築家・市民・キュレーターのコラボレーションの話も深く耳を傾けてもらうことができた。

また、日本の美術館、展覧会でものを見せる際にどういうやり方があるのかということについてワークショップを行った。

話をした後、それで終わりではなく、その後いろいろなことが展開していくというポスト交流使が大事であり、その成果として、帰国後に東京都現代美術館で「新たな系譜学をもとめて - 跳躍／痕跡／身体」展を開催した。そのなかで、



同じく文化交流使としてイスラエルなどで活動した森山未来が「インバル・ピント&アブシャロム・ボラック・ダンスカンパニー」の公演を行った。

コンクルージョンとして、伝統的なものを最も新しいデジタルテクノロジーでマッピングしたらどうなるのかなど、伝統と現代技術のコラボレーションを見てみたいという関心が高かった。今後、今回プレゼンテーションしたヨーロッパの国々で実物を見てもらえたらと思う。

中谷（司会） 国によって温度差はあったか。

長谷川 全然違う。特に美術館制度が整備されている国とそうでない国では温度差がかなりある。

中谷（司会） キュレーターが文化交流使となり、体系化された美術の歴史を踏まえたお話をしたり、見せたりするのは非常に大事だ。

長谷川 アーティストは自分を言葉で表現し、きちんと話すことが求められる。作家がきちんと説明できないのなら、キュレーターが文脈をつけてあげることが大事だ。良いものがたくさんあるのに紹介されていないというのが現状だ。



中谷氏によるインタビューに応じる長谷川氏



会場からの質問に答える出演者たち

最後に

林田 中東や東南アジアの技術系，芸術系の大学で活動した際，日本のデザインやアニメを，日本の大学において英語が使える環境下で勉強したいが，そういう場所はあるかとよく聞かれた。日本では理系の大学であれば英語で勉強できる環境があるが，芸術やデザインの分野ではほとんどない。海外の人で，日本独自の技術やデザインを学びたいのに英語で学べる場所がないから行けない，という人はとてもたくさんいた。従ってそのような機関を作れば，海外からさらにたくさんの人が勉強しに来ると思う。そのような計画を立てていただけののなら，私もぜひお手伝いしたい。

衛藤 言葉で論理的に話していく努力を私たち表現者は怠っていた。自分の力ではできないので，いろいろな方と協力しながら，理論で分かっただけのように努めるのがこれからのポスト交流使としての役目かと思う。

長谷川 キュレーターは日本の文化を言説化したり，文脈を作ったり，きちんとプロデュースして伝えることが必要であり，そのためには人間の力と資金が要る。日本がグローバル化を考えるのなら，海外の文脈で日本文化がどのように見えているかを共有することが交流のゴールとなる。

活動報告

レナード 衛藤

和太鼓奏者

活動期間 平成 25 年 8 月 8 日～平成 26 年 7 月 23 日

活動国 スイス、フランス、イタリア、チュニジア、ポルトガル、インド、オランダ、ドイツ、ハンガリー

Leonard Eto

Taiko player

Period of the activities: From August 8, 2013 to July 23, 2014

Countries visited: Switzerland, France, Italy, Tunisia, Portugal, India, the Netherlands, Germany and Hungary

351日間の旅を終えて

私は文化交流使として、351 日間 9 か国で活動してきました。訪れた国はスイス、フランス、イタリア、ポルトガル、オランダ、ドイツ、ハンガリー、チュニジア、インドです。

文化交流使のお話をいただいて自分らしい活動の在り方を考えた時に真っ先に浮かんだことは、異なる背景の表現者たちと時間をかけて向き合い、創作を進めていきたいということでした。その過程を通じて、お互いの文化や創作の違いを学んでいけたらと思いました。

そして、私はその活動の中心に据えたのが、和太鼓とダンスの創作でした。日本やアメリカにおいてもダンスとの創作は行ってきましたが、ヨーロッパに来てまず直面したことは、多様な国や民族のダンサーが集まってカンパニーが構成されていること。ある程度は覚悟していましたが、英語、フランス語、イタリア語が飛び交っています。

そのような環境下で具体的にどのようなテーマで創作を進めていくか。私は、太鼓と踊りは体感しながら進めていくことが自然だという思いがありましたので、とてもシンプルなストーリーを考えて提案しました。

それは、「太鼓を TAMAGO に見立て、そこから叩き出されるリズムによって生まれる新しい生命体＝ CREATURE。生まれたばかりの生命体は自らの肉体に鼓動を感じ、呼吸を感じ、肌や髪に触れ、ひとつひとつの関節の動きを知る。やがて、立ち上がり、歩き出し始めてから生命体は踊りという表現を獲得していく」といったものでした。

幸いダンサーや振付家にはこのアイデアが好評で、民族性や宗教観、歴史といったものに左右されずに自由にイメージを描けたようです。フランスのマルセイユ国立バレエ団を始め、イタリアやドイツのカンパニー、ポルトガルやインドのソリストと創作を重ねてきましたが、基本のストーリーは概ね変えずに臨むことができました。

当然のことながら、それぞれの振付家やダンサーによって表現される生命体は大きく異なり、音楽的なアプローチもどんどん変えていきました。リズムの進行を書き留めたスコアも用意していましたが、ダンスの振りが決まってくると、ダンサーの動きがスコアそのものになっていき、私にとっては「動くスコア」でした。

もちろん、ミュージシャンとの出会いや再会もたくさんありました。アムステルダム旧教会 (Oude Kerk) では、パイプオルガンとの共演。この時もダンスの創作に用いた音楽的ストーリーを「天と

地の出会い」にアレンジし、スコアも使用せずに即興で演奏しました。

こういった活動を進めていく中で作品の完成度を高めていくことはもちろんですが、なかなか意思疎通がうまくいかない、もどかしい時お互いを理解しようとコミュニケーションを取り続けた日々。そういった共演者や舞台スタッフと過ごしている時間そのものが何よりも創造的だと感じるようになっていきました。

文化交流使として、日本の文化を魅力的に紹介する使命はもちろんですが、個々のレベルで擦り合わせやコミュニケーションを積み重ねていくことが、結果として「日本大好き率」を高めていくのではないかと思いました。そのためには個の価値をもっともっと磨いて高めていかななくては痛感しました。

その一方で旅のルートを作り、フライトや機材輸送の見積もりを取って、精算して報告といった事務仕事も並行してやらねばならなかったのがかなり大変でした。しかし、文化交流使として過ごした日々は、これまで 50 か国以上で公演してきたような時間の過ごし方とは異なり、「叩くこと、踊ること」といった表現の本質を見つめ直す貴重な時間でした。

レナード 衛藤 プロフィール

1963 年米国ニューヨーク生まれ。1984 年から1992 年まで和太鼓集団「鼓童」に参加し、その後ソロ活動開始。これまで 50 か国以上を超える国々で演奏活動を行う。海外アーティストとの共演多数。和太鼓とドラムスとタップダンスで構成された“Blendrums ブレンドラムス”プロジェクトなど創作活動にも取り組んでいる。作曲した楽曲は“JFK”、“LION KING”などの映画やCMに数多く使用されている。



2014 年 ミラノ・シアトロ・デッラルテ、スボレート・フェスティバルなどでスザンナ・ペルトラミ・カンパニーとの創作・共演
Compagnia Susanna Beltrami / Triennale Teatro dell'Art (Milano), Spoleto Festival



半年くらい経過してからは、ダンスカンパニーが公演を企画したり、その国のエージェントが作品をフェスティバルにブッキングして下さったおかげで発表の場が格段に増え、目まぐるしい展開で旅をしていました。大太鼓を含む 200kg の機材を 2 セット持ち込みましたが、まさにフル回転。

ヨーロッパを旅しながら自分の視点がどんどん変わる中、私自身もあらゆる視点にさらされました。ダンス・フェスティバルやアート・フェスティバルに参加できたことで、音楽としての太鼓を知っていただく機会を多く作れたことはとても良かったですし、私も公演の度に新鮮な気持ちでステージに立つことができました。なかなかこのような経験はできるものではないと思います。

21 歳の時から始まった私の音楽の旅人生ですが、その経験を活かしきれたこと。そして、新たな展開をも切り開く機会をいただけたこと。本当に感謝しています。インターネットの普及によって音楽の在り方が大きく変わり始めた今、自分の活動を見つめ直し、その基本となるコミュニケーションを素晴らしい環境下で学ぶことができた 351 日間の旅だったと思います。個の力はとても小さなものですが、その展開力で日本の文化の発信力を高めていけたらと思います。



2014 年 4 月 アウデ・ケルクにてパイプオルガンとの共演
Oude Kerk in Amsterdam



2014 年 1 月 インド・ムンバイにてダンサー (コリーナ・シャクティ) との創作
Collaborate with Colleen Shakti in Mumbai



2014 年パリ日本文化会館、マルセイユ・フェスティバル、ユリダンス・フェスティバルなどで国立マルセイユバレエ団との創作・共演
Ballet National de Marseille / Maison de la Culture du Japon a Paris, Marseille Festival, JULI DANS Festival



2013 年 8 月 スイスの山とのコラボレーション
Collaborate with the Mountains in Switzerland

On finishing my 351 day journey.

For 351 days, I was engaged in a mission as a Japan Cultural Envoy visiting nine countries. These nine countries were Switzerland, France, Italy, Portugal, the Netherlands, Germany, Hungary, Tunisia, and India.

When I was offered the role of Japan Cultural Envoy, the first thought that occurred to me was that I should take time to interact with artists from different backgrounds. Through such a process, I was hoping to learn about each other's cultures and differences between our creative works.

Therefore, I decided to focus my activities on original Japanese drum and dance pieces. I had produced collaborative works with dancers in Japan and the U.S. before. But on coming to Europe, I was faced with companies made up of dancers from various countries with a diverse range of ethnicities. I had prepared myself to a certain extent, but there I was surrounded by people speaking English, French, and Italian.

In such an environment, what specific theme could I use to produce a work? My suggestion in the end was very simple. As I believed that for drum and dance, it would be natural to proceed while feeling.

My suggestion was this: “The sounds of O-taiko which can be called the symbol of all Japanese drums, are the beating sounds of life. In this work, O-taiko has been associated to an egg, the origin of life. Beating the egg creates a rhythm, which evolves into a new CREATURE. This newly-born creature feels the pulse and breathing of its own body, touches its own skin and hair, and learns movements of each of its joints. Soon, the creature stands and begins to walk. And then it begins to acquire a form of expression—dance.”

Fortunately, this idea was warmly received by the dancers and choreographers. They seemed to be able to form images freely, without any influence from ethnicity, religious outlook, or history. This basic story has remained almost unchanged, even through a succession of creative works produced with various companies from France, Italy, and Germany—including the Ballet National de Marseille in France—as well as soloists from

Portugal and India.

Naturally, the “creatures” as expressed by the choreographers and dancers varied greatly from one collaboration to the next, so my musical approach also kept changing. I prepared scores in which I wrote down the progression of the rhythm. But as the choreographed sequences were gradually fixed, the movements of the dancers themselves became the musical score.

In addition to these experiences, I was able to meet or reunite with various musicians. At the Oude Kerk in Amsterdam, I performed with a pipe organist. We performed “Encounter of Heaven and Earth,” based on a musical story I had used in interpretive dance. Just like other pieces, we improvised without a musical score.

As I experienced these performances, I naturally strove to raise the standard of my work and never gave up working to maintain communication with my partners—even when communication was anything but smooth and I became frustrated. And then I started to realize that the time that I spent with my co-performers and the stage crew was creative in and of itself.

Beyond my mission of providing an attractive introduction to Japanese culture as a Japan Cultural Envoy, what would eventually increase the number of Japan fans among foreigners was the sense of creative negotiation and communication among individuals—this was my feeling. To achieve this, I felt keenly that the individual values of each person must undergo repeated polishing.

At the same time, it was rather hard to handle paperwork, such as planning my route, making estimates for flights and transporting my equipment, processing expenses, and preparing reports. However, the time I spent as a Japan Cultural Envoy passed differently from my previous experiences performing in

Leonard Eto Profile

Leonard Eto was born in New York, U.S.A. in 1963. He was a member of Kodo, a wadaiko (Japanese drum) performance group, from 1984 to 1992. Since then, he has been active as a soloist. He has performed in more than 50 countries, many times with overseas artists. He has been engaged also in creative activities such as the “Blendrums” project that involves wadaiko, drums and tap dance. The musical pieces he composed are used in many movies such as: “JFK” and “THE LION KING” as well as TV commercials.

森山 開次

ダンサー・振付家

活動期間　平成 25 年 10 月 18 日～12 月 3 日，平成 26 年 1 月 4 日～19 日
活動国　インドネシア，ベトナム，シンガポール

Kaiji Moriyama

Dancer and Choreographer

Period of the activities: From October 18 to December 3, 2013 and from January 4 to 19, 2014
Countries visited: Indonesia, Vietnam and Singapore

文化交流使の記

はじめに

文化交流使とは、一体どのような活動をしたら良いのか。最初にお話をいただいたときは、名前の大きさから正直不安があった。国と国の交流。異文化間コミュニケーション。その責務はとても重要なものだからだ。日本の伝統文化に携わる方が多く派遣されている中、コンテンポラリーダンスを生業とする私に何ができるだろう。

今回私が平成 25 年度文化交流使の活動国としたのは、インドネシア、ベトナム、シンガポールの 3 か国。活動内容は、現地アーティストとの共同創作と発表、ダンスのデモンストレーション、ダンスワークショップなどで、身体表現を通じた現代日本の文化発信と、お互いの国の文化に対する理解を目的とした。

ほぼ白紙の状態から日々リサーチと模索を重ねながらも、過去文化交流使として活動された諸先輩方のアドバイスを、背中を押してくれた多くの方々の厚いご支援のおかげで、日本文化を愛する一芸術家として、胸をはって日本を発つにいったのである。

交流のはじまり

最初に訪問したインドネシアのバリ島では、元気な子どもたちとの出会いからはじまった。滞在先はウブドのプングセカン村。あるガムラングループリーダーの、留守中のお宅をお借りしたのだ。夜に到着し、まわりの風景を見ずして最初の夜を迎えた。あの夜の不安さ。サラウンドで聞こえる大音量の虫の声、犬がけたたましく吠えている…　突然、天井から、トッケートツケー!と鳴く謎の声。インドネシアに生息する体長 20 センチ前後のヤモリ科の生物“トッケイ”，その無数



森山開次（ダンサー・振付家）によるパフォーマンス「LIVE BONE」（バリ）

の音が響く家。とても騒がしい初夜だった。

翌朝、朝日とともに美しい音色で目が覚める。窓から外をのぞくと、夜の印象とは全く違う世界が目の前に広がっていた。神々の住む島。神殿から聞こえてくるような音色。なんて美しいガムラン。若者たちが演奏の練習をしていたのだった。南国の草木に囲まれたバリ様式の家、ダイニングも半分外で閉塞感のないつくり。虫や動物が自由に行き来する。虫の声が凄いわけだ。庭のスタジオでは、頻繁にガムランの演奏や踊りの練習風景を見ることができた。伝統芸能がまだなお人々の生活の中に息づいているこの村は、画家、舞踊家、ガムランの演奏者がたくさん生活しており、歩いているとあちらこちらでガムランの美しい音色が聞こえてくる。私が訪れたこの時期は、ちょうどガルンガンという日本のお盆のような祭事の前で、皆その準備に追われていた。ベンジョールという、竹やヤシの葉で作られた長い飾り物が立ち並ぶ通り。舗装の悪い道が多く、ベンジョールに気をとられ、見上げながら歩いているとつまずきそうだ。バイクと車が土埃を舞い上げ、狭い道をクラクションを鳴らしながら通りすぎてゆく。バリに来了実感が湧いてくる。まだぎこちない私の体。さあ、何からしたらいいのか。

最初の活動を予定していた、バリガムラン奏者であり作曲家のデワ・アリット氏のお宅の前。緊張していた。と、そんな時、ガムランの音が彼の庭から聞こえてきた。吸い寄せられるように足を運んでみると、バリの男の子数人が演奏をしていた。ガルンガンの時期には、バリで信奉されている、日本の獅子舞のような聖獣パロンと共に、人々がガムランを演奏しながら村を練り歩く姿を見ることができる。彼らはその練習をしていたのだった。長髪で金髪の日本人男の突然の登場に興味を示しながらも、彼らの演奏は止まらない。一人の子がにかっと笑いながら楽器を私に差し出した。シンプルなりズムを教わる。そこに複雑なりズムを掛け合わせてくる。太鼓のリーダーらしき子が、合図をだしリズムを変化させると、一斉に皆リズムを変える。私は夢中で演奏した。私の必死で辿々しい演奏に大声で笑う子どもたち。褐色の肌に白い菌と瞳が印象的だ。なんて楽しそうに演奏していることか。延々とつづく演奏とガムランの響きに甲高い笑い声。気づけば、私の緊張は完全に解けていた。私の文化交流使の最初の活動は、バリの子どもたちとのガムラン演奏だった。私は日本でもどこでも子どもたちに助けられている。こうして私の本格的な活動は始まったのだった。

バリの月の下で

デワ・アリット氏は、ガムラングループ　ガムラン・サルカットを主宰し、バリガムラン奏者、作曲家として、伝統を継承しながらも新しい創作に挑戦し続け、バリガムラン界をリードする若手音楽家だ。年齢も近く、彼の信念や葛藤に共感することが多くあるのに驚いた。私達は今回の交流で共同で作品を創作することを一つの目的に掲げていた。テーマは「羽衣」。日本でもなじみの羽衣伝説をモチーフとしたのだ。このテーマを選んだのは、私が能の『羽衣』に強い興味があったことも理由の一つだったが、羽衣の伝説は日本のみならずアジア各地に点在しており、インドネシアにも類似した伝説が残っていた。それぞれに共通点と違いがあり、共同創作をするのにとっても面白いテーマだと思ったからだ。

この創作の稽古はとても印象深い思い出となった。稽古場はほぼ野外のスタジオ。日が落ちてから、風が吹き虫の音が響く中、月を見上げながら稽古をした。部屋の中、鏡の前で踊ることが当たり前になってしまった私達現代のダンサーには最高の環境だ。身体感覚が目醒す。エネルギーの流れを感じ、自然の一部となる。土や草の匂い。風の軌跡。彼のガムランの旋律と融合する瞬間、離れる瞬間。月との距離。この稽古に多くの人は立ち会っていなかったが、月が私達二人の姿を映してくれていた。そして時にはその月について語り合い、お互いの文化の話をし、子どもたちを愛するすばらしい芸術家だった。バリの月は眩しいほど。日本で見る月と同じ月のはずなのに、異なる感覚を不思議と憶えた。

「羽衣」の天女が住むのも月の都だ。月は、日本人だけでなく、多くの人にとって神秘的なものかと思うが、バリの人々にとってその存在はとても大きな意味を持っている。人々の生活に密接に関わる月の暦。満月にはさまざまな祭事がバリ中で行われる。ひとつの月を見上げ、作品の創作ができたこの体験は、かけがえのない時間だった。

異なる文化の中に身を投じると、はじめは違いを強く感じるが、生活を共にするうち、深い所に共通した祈りがあることに気づく。違った感性を持つ芸術家同士、創作の過程で共通点を発見することもあれば、違いを発見することもある。違いを感じたときは、創作の大きなヒントを得るチャンスだ。異文化をもった芸術家同士のコラボレーションは、簡単に掛け合わせるだけであれば、なんとでもできてしまうかもしれない。ただ、しっかりと向き合い、一つの世界観をもった作



品を創作するとなれば、そう簡単には行かない。それぞれのセンス、信念があるので、どこかで壁や摩擦が生じることもある。相手の意見を受け入れることもあれば、自分の意見を通そうとするときもある。その過程に大きな意義が存在する。そこで知ること、は、相手の心とともに、自分自身の心を見ることにつながる。日本の文化とは何だろうか。私とは何か。

バリ滞在中、アリットさんにさまざまな場所を案内いただき、多くの祭事や芸能を見学、体験することができた。地元の人々と小さな交流を積み重ねたその日々があったからこそ、今回のコラボレーションは、形だけではない純真な月への祈りを共有した作品となったと思っている。こうして完成した創作舞踊作品「HAGOROMO」は、帰国後の平成 26 年 2 月に、アリットさんを招へいし、観世流能楽師・津村禮次郎さんとともに、東京・新国立劇場「アーキタンツ 2014」公演内で発表することができた。交流の成果を多くの方々に観ていただくことができとても嬉しかった。

そのほかバリ島では数回踊りを披露する機会を得た。その一つに、ウブドで開催された「ジャパンフェスティバル」があった。赤鬼をテーマにした「AKAONI」の共同創作を、別のガムラングループ、ワヤンベベル・スダマニと挑戦したのだ。この作品では、バリのベテラン伝統舞踊家ニ・ワヤン・セカリアニ氏（Ni Wayan Sekariani／通称：イブ・セカール）とのコラボレーションも実現し、バリの伝統的な世界観に思い切り飛び込ませていただいた。ここでは、地元の子どもたちからお年寄りまで、幅広い世代の多くの方々が観劇くださった。バリでは音楽や踊りは神への捧げものとされている。祭事の中でガムラン演奏、様々な舞踊、演劇が行われる。それらを観るのはバリの人々にとって日常的なことで、子どもからお年寄りまで祈りとともに観賞する。最も原始的な演者と観客の関係がそこにはある。この環境は、日本の舞台環境と大きな違いがあり、はっとさせられた。なぜ踊るのか。踊りを見るときは何か。劇場とは何かを問われた思いがした。

さまざまな音が響く神の住む島バリ。その音は、私の体に共鳴し、多くのインスピレーションを与えてくれたのだった。

ベトナムの同志達

その後に渡ったベトナム。ここでは、とても嬉しい再会があった。

ベトナムでは、ハノイとホーチミンの 2 都市で活動した。はじめに訪れたハノイでは、地元のドアン・ティ・ディエム小学校を訪問し、ダンスのワークショップとパフォーマンス。さらに、プロのダンサーを目指す学生が通うベトナムダンスカレッジにてダンスワークショップを行った。そしてホーチミンでは、ベトナムーのコンテンポラリーダンスカンパニー　Arabesque Dance が主催するホーチミン初のインターナショナルダンスフェスティバルに、ゲスト出演し、ホーチミンオペラハウスでソロ作品を発表した。実はこのダンスカンパニーの主宰、グエン・タン・ロク氏は、14 年前文化庁の留学生として日本に留学中、私のダンスクラスを受講してくれたダンサーだったのだ。それがベトナムに帰国後、ホー

チミン初の民間ダンスカンパニーを立ち上げ、素晴らしいダンサー達と共にベトナムーのカンパニーに成長させていた。その彼が私をフェスティバルに招へいしてくれたのだ。

今、ベトナムのダンスカルチャーでは、コンテンポラリーダンスが少しずつ盛んになり始めたばかりというが、ロク氏は急激に発展する経済や文化の中で、ベトナム人のルーツをテーマにした作品を創作しており、本来のベトナムらしさとは何かを問う作品を、いくつか鑑賞した。お互いの作品を見合うことで、それぞれのアーティストが感じていること、考えていることを知る事ができた。またワークショップを通じ、ダンスメソッドの交換も行い、とても密な交流が出来たと思う。ベトナムで多くの身体表現に挑戦をしている同志に出会えたのは嬉しいことだった。

ロク氏と Arabesque 所属の女性ダンサーとはそのほかに共同創作も行い、12 月京都で行われた文化庁主催による「東アジア共生会議 2013」にて発表のため一時的に業務帰国をした。彼らとは、両国間だけでなく、東アジアの共生、そして都市においてのアート役割とは何かを共に考えることができた。ベトナムのダンサー達の稽古環境は決してよくないが、それをもろともしないエネルギーがあった。環境が整えばいい作品が作れるわけではないことを学んだ。コンテンポラリーダンスとは何か。オリジナリティーとは何か。自分らしさとは。アジアとは。ここでも問いかけられたのだった。

彼らと活動を共にし、彼らの踊りから感じたのは、優しさやあたたかさ。発展し続ける混沌とした街の中でも残る、土のぬくもりと蓮のような純真。ベトナムのダンスカルチャーをこれからも見届けたいと願っている。

「LIVE BONE」東南アジアツアー

その後、再び日本を発ち、平成 26 年 1 月に、自身の作品「LIVE BONE」のデモンストレーションツアーを行った。この作品は、内臓や骨といった体のパーツをモチーフとし、ユーモラスでロックテイストあふれる音楽とアーティストィックなコスチューム、全体的にポップでスタイリッシュな作風で、コスチュームアーティスト・ひびのこづえ氏と音楽家・川瀬浩介氏とともに、日本で長い時間をかけ育ててきたものだ。日本ですでに 10 都市以上で上演し、子どもからお年寄りまで皆が楽しめる作品として好評をいただいていたが、アジアでどのように受け入れられるか、まったく未知数であった。今回はソロのデモンストレーションとして、3 都市でワークショップと合わせ上演した。日本でも“どこでもできるパフォーマンス”として美術館などさまざまな場所で発表しているが、インドネシアはバリ島・インドネシア国立芸術大学のバリ様式の劇場、ジャカルタ TIM 劇場の吹き抜きのロビー、シンガポールのラサール芸術大学の近未来的な建物に囲まれた中庭。いずれも多くの方に囲んでいただき、皆さんとふ

森山 開次　プロフィール

1973 年神奈川県生まれ。2001 年エディンバラフェスティバルにて「今年最も才能あるダンサーの一人」と評された後、演出・振付・出演をつとめるダンス作品の発表を開始。2007 年ヴェネチアビエンナーレ招へい。2012 年発表『曼荼羅の宇宙』にて芸術選奨文部科学大臣新人賞ほか 3 賞を受賞。代表作に「KATANA」「弱法師」「LIVE BONE」など。

れあいながら踊った。舞踊の海外公演というと年配の観客も多いが、たくさん的小朋友も、学生そして若い世代の前で踊ることができたのも嬉しいことだった。どの都市でも、現在の日本を感じられるパフォーマンスとして非常に喜ばれ、お客さまと至近距離で一体感の生まれた素晴らしい時間だった。このパフォーマンスと合わせて行ったワークショップでは、言葉の壁があっても体で表現し共有できることを体感した。特に子どもたちは、瞬時に壁を乗り越える。大人の私は逆に必死だった。子どもたちと体で動き伝えることの楽しさを再確認しあえたと思う。これから更に進む国際化社会の中で、子どもたちとの交流はととても大切になってくるだろう。「LIVE BONE」のような、子どもたちにも目を向けたダンス作品を精力的に創作・上演できるよう、これからも努力したいと思う。

こうして、私の約 3 か月におよぶ活動期間は無事終了した。異文化の違いの中で一つの時間を共有するのはかけがえのないことだ。文化が違えば様々な壁が存在するのは確かだが、それをお互いに理解し、尊重し合えると肌で感じることができた。身体表現を通じた文化交流の可能性は無限にある。皆、体をもち、誰もが身体表現者であるのだから。当然、個性があり、違いがある。一人一人がちがうこと。文化が違うこと。それを知ること、そこからはじまる。そして、異なる文化に接した時に知ること、は、自分自身の国の文化であり、自分自身の心だった。それを再確認することもまた、文化交流の素晴らしさだと知った。

ここでは書き表せないほどの体験をした。感じたことは、確実にこの体に刻まれている。それはこれから先、きっと自然に何かの形で現れるだろう。それがとても楽しみだ。この体験を生かし、これからも精進し身体表現の道を邁進していきたい。そして、この活動で生まれた多くの絆を大切にし、さらに発展させた文化交流ができたらと願っている。

なお今回の活動に際し、多くの方の厚いご協力をいただいた。各国の受け入れ先の皆様、日本で支援下さった皆様に深く感謝している。大きな責務ではあったが、文化の交流に一番大切なのは、大義名分の形だけの交流ではなく、人と人同士の心の交流をまず大事にすることだと感じた。交流は人との出会いからはじまる。この交流で本当に多くの人に出会い、ふれあうことができ、決して生涯忘れることの無い旅となった。ご尽力をいただいたすべての方に、この場をお借りし心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

A record of my activities as a Japan Cultural Envoy

Prologue

What am I expected to do as a Japan Cultural Envoy? It was the first question that came to my mind when I was first approached about the appointment to the position. Honestly, I was not sure whether I could live up to such a distinguished title and accomplish its important missions, such as cultural exchange between countries and cross-cultural communication. Many of my predecessors had been engaged in some type of work related to traditional Japanese art and culture prior to their appointments. Naturally, I could not help but ask myself how I, a contemporary dancer, could contribute if I were to accept the offer.

After I decided to take up the challenge, I chose to visit Indonesia, Vietnam, and Singapore as a Japan Cultural Envoy for FY2013. The purpose of my visit was to introduce Japanese modern culture through physical expression and to deepen mutual understanding of each other's cultures with the local people. With such objectives, I collaborated with local artists to create and perform dance pieces, organized dance demonstrations and dance workshops during my assignment.

In preparation for my visit, I had to start my research from scratch. During the course of my research, I received valuable advice from many of my predecessors who had worked as Japan Cultural Envoys in the past, as well as warm support from many people who gave me constant encouragement throughout this journey. It was thanks to everyone's support and encouragement that I was finally ready for departure as an artist with confidence and with a deep love for my own culture.

Beginning of the cultural exchange

The first place I visited was Bali, Indonesia, and my visit started with my meeting with the happy and lively children of Bali. I stayed at Pengosekan Village in Ubud, where I was able to stay at the home of the leader of a gamelan group while he was away. As I arrived at night, I spent the first night without being able to see what it looked like around the house. I still remember how uneasy I felt that night. The sounds of insects echoing at full volume were surrounding the house. I had never heard dogs barking so loudly... And suddenly, there was this mysterious voice crying "tokay! tokay!" from the ceiling of my room. Later I found out that it was a house lizard called "tokay gecko," which inhabits Indonesia and is about 20-cm long. The house was filled with the sounds of an infinite number of tokay geckos. It was such a lively first night in Bali.

The next morning, I woke up to the morning sunshine and a very beautiful sound. As I looked out the window, I saw a completely new world, totally different from

the impression I got the previous night. It was truly the island of gods, and that amazingly beautiful sound I heard was that of gamelan young people practicing; it sounded just like the tones one would hear coming from a sanctuary. The Balinese-style house was surrounded by tropical trees and plants, and I noticed that half of the dining room was in open air, giving it a sense of spaciousness. Insects and small animals were freely moving around the house. It was no wonder the night was filled with the sounds of insects. In the studio set up in the courtyard of the house, I often watched the gamelan practices dance performances. In Pengosekan village, traditional performing arts still form an important part of people's lives. Many painters, dancers and gamelan performers live there; as I strolled around the village, I always heard the beautiful sounds of gamelan here and there. The time of my visit coincided with the preparation time for a festival called Galungan, which is like the obon festival in Japan. Everybody seemed to be very busy preparing for the event. The streets were filled with penjor, a lengthy decoration made of bamboo and palm leaves. Many of the streets were not well-paved, so I often almost stumbled as I kept looking up to admire penjor. Motor bikes and cars passed by on the narrow streets, honking their horns and swirling up dust behind them. Slowly, but surely, I started to realize that I was actually in Bali, though my body was still feeling stiff from the long trip. And I was still wondering what I was supposed to do there.

I was standing in front of the house of Dewa Alit, a Balinese gamelan musician and composer, where I planned to have my first activity in Bali. I was nervous. Then in that very moment, I heard the sound of gamelan coming from Dewa Alit's courtyard. I was drawn into the garden, where I found a few Balinese boys practicing their performance. During the Galungan season, gamelan groups roam around town performing—much like shishimai, a Japanese-style lion dance—together with a holy beast the local people believe in called Barron. The boys in the courtyard were practicing their performance for Galungan. They looked surprised and curious at the sudden appearance of a Japanese man with long dyed blonde hair, but it did not interrupt their practice. One of the boys handed over his instrument to me with a big smile on his face. He taught me how to play a simple rhythm, to which the rest of the group proceed to add more complex rhythm. When another young fellow, who looked like the leader of the drum section, gave a cue, everyone followed and changed the rhythm all at once. I was totally absorbed into playing my part. They were making fun of my clumsy and terrible performance, and I still remember their chocolate-colored skin and white teeth. They sure looked joyful when they played the music. The practice went on forever with the sound of

gamelan mixed with the high-pitched laughter of young boys. I suddenly realized that, by that time, I was no longer feeling nervous. This was the first activity I had as a Japan Cultural Envoy, playing gamelan with the children of Bali. I realize that children are the ones that always help me, no matter where I am, in or outside Japan. So this was how my journey as a Japan Cultural Envoy began.

Under the Balinese moon

Dewa Alit, a leading young Balinese gamelan musician and composer, leads a gamelan group called Gamelan Salukat. He has been taking on the very important task of carrying on the musical tradition while continuously endeavoring to create new music. He and I are about the same age and, through our conversations, I found out how much I could relate to his philosophy and the inner conflicts he was facing as an artist. One of my objectives for this visit was to create a dance piece with local artists. The theme I chose for this joint project was "hagoromo," based on a well-known folktale in Japan about the feather robe of celestial maiden. The reason I picked this theme was not only that I had a strong interest in a Noh performance entitled "Hagoromo," it was also because I learned that the hagoromo folktale was not unique to Japan, but similar folklores also exist in other Asian countries, including Indonesia. Since the tales in each country had something in common, as well as differences, I thought it would be an interesting theme for a joint creation.

The rehearsal for the piece became an unforgettable memory. One of the biggest surprises was that the rehearsal studio was virtually in the open air. We started rehearsing after the sunset, and we practiced listening to the sounds of the wind and insects and looking up at the beautiful moon. I thought this place was perfect and I could not have asked for a better rehearsal studio than this one. I realized how much we, dancers of today, had gotten accustomed to practicing in front of a mirror inside a closed room. Dancing outdoors woke up all senses of the body. I felt the energy flowing into my body, and my body became a part of the nature. I smelt the soil and the grass. I felt the direction of the wind. In one moment, my body moved as one with Dewa Alit's gamelan music, and in the next, it parted from his melody. I was dancing while feeling the distance from the moon. Not many people participated in the rehearsal; yet, the moon was always there reflecting the two of us. Dewa Alit and I had some chances to talk about many topics: the moon, our cultures and the future of all the children. He is a great artist who also loves children. The Balinese moon was so dazzlingly beautiful that it gave me a different sensation, even though I knew it was the same moon I was used to see in Japan.

The celestial maiden in the hagoromo



森山開次（ダンサー・振付家）によるパフォーマンス「LIVE BONE」（シンガポール）（撮影：ジャパン・クリエイティブ・センター）
"LIVE BONE" (Singapore) (Photo by Japan Creative Centre)

tale lives in the city of the moon. The Japanese are not the only one to notice something mysterious in the moon. It also has a very important meaning for the people in Bali. They use the lunar calendar, which is closely connected to people's lives. On the day of the full moon, many festivals are held all over Bali. It was such an invaluable experience to jointly create a piece with local artists, looking up at the same moon together.

When we first throw ourselves into a different culture, the difference is always what strikes us at the beginning. But as we spend more time together, we start to realize that we actually have a common form of prayer that is deeply rooted within ourselves. We are artists, and we all have different sensitivity. We might discover common features during the process of creation or sometimes find differences. When we feel there is a difference, it is a chance to find a great clue for creation. Collaboration between artists with different cultural backgrounds can be easy if we are to simply mix the two cultures. But it is not that simple if we are to seriously face each other's cultures and create a piece that has one single worldview. Since each one of us has our own taste and philosophy, we cannot avoid the walls that come up or the friction that can develop between us. We may accept the other's opinions or sometimes try to push through our ideas. The significance lies in that very process. What we learn from there will help us understand the other person's mind, as well as our own selves. It helped me think about what Japanese culture really was. It made me think about who I really was.

While I was in Bali, Mr. Alit took me to many places to see and experience rituals and performing arts. It was as a result of the collection of these small daily exchanges with the local people that we were able to produce a genuine, not superficial, prayer for the moon through this collaboration. After I returned to Japan in February 2014, I invited Mr. Alit to present the jointly created dance performance "HAGOROMO" with the participation of Mr. Tsumura Reijiro, a Kanze School Noh actor, as part of "ARCHITANZ 2014" at the New National Theatre in Tokyo. I was extremely happy that we were able to present the results of the experience I had in Bali in front of such a large audience.

I also had several other opportunities to perform in Bali. One of such opportunities was



at the Japan Festival held in Ubud. I performed a joint creation called "AKAONI," the red demon, in collaboration with another gamelan group called Wayang Beber Cudamani. In this piece, we were able to collaborate with a Balinese veteran traditional dancer, Ni Wayan Sekariani (aka: Ibu Sekar), which let me dive into the traditional worldview of Bali. People of many generations, from children through to the elderly, came to see our performance. In Bali, music and dance are considered to be an offering to the gods. Therefore, gamelan, dance and plays are usually performed during religious festivals. It is part of daily life for the people in Bali to watch those performances; everyone, from children to elders, watch them together as a form of prayer. This is the most primitive type of relationship between a performer and the audience. I was startled to notice the environment there was totally different from the theatrical environment in Japan. I felt as if I was being asked to go back to the fundamental questions: Why do I dance? What does it mean for people to watch a dance? What is theater?

Bali is an island of gods where so many different sounds echo through. Those sounds resonated in my body and gave me a great deal of inspiration.

My fellow dancers in Vietnam

The next stop was Vietnam, where I had a very pleasant reunion.

While in Vietnam, I visited Hanoi and Ho Chi Minh City. In Hanoi, I visited the local Doan Thi Diem Primary School, where I gave a dance workshop and delivered a dance performance. I gave another dance workshop at Vietnam Dance College, where aspiring dancers learn dancing. In Ho Chi Minh City, I participated as a guest dancer in the city's first international dance festival, organized by Vietnam's best contemporary dance company, Arabesque Dance, and performed a solo piece at the Opera House in Ho Chi Minh City. As a matter of fact, the president of the company, Nguyen Tan Loc, took my dance class when he came to Japan 14 years ago as an international student sponsored by the Agency for Cultural Affairs. After he returned home, he founded the first private dance company in Ho Chi Minh City and led it to become the best dance company in Vietnam with fantastic dancers. It was Mr. Loc who invited me to the festival.

In the current dance culture in Vietnam,



the contemporary dance has just started to slowly gain popularity. I watched several dance pieces that Mr. Loc had created on the theme of the roots of the Vietnamese people with the backdrop of the rapidly developing economy and culture. All of these performances were asking the audience to rethink about the originality of "Vietnameseness." By watching each other's performance, we could learn each other's thoughts and ideas. I think we had some very intensive exchanges, including the sharing of our dance methods through the workshop. It was very exciting to see fellow dancers in Vietnam continue to push forward and experiment with different styles of physical expression.

Moreover, I also did a joint production with Mr. Loc and a female dancer of Arabesque. I temporarily returned to Japan in December 2013 to perform the piece at the "East Asia 'Kyousei' Forum 2013" in Kyoto, organized by the Agency for Cultural Affairs. During our stay in Japan, I was able to discuss with them not only the coexistence between our nations, but also the coexistence among nations in East Asia, as well as the role of art in urban cities. I cannot say that Vietnam has the best training environment for dancers, but the dancers I met in Vietnam were all equally energetic and made nothing of their condition. This taught me a good environment is not necessarily the requirement for creating a good piece. At the end of my stay in Vietnam, I was once again asking myself a lot of questions: What is contemporary dance? What does originality mean? What does it mean to express individuality? What is Asia?

What I felt while collaborating with the Vietnamese dancers and from their performance was their gentleness and warmth—a warmth like that of the earth and a pureness like that of a lotus flower that continues to hang in the air of this chaotic, continuously expanding city of Ho Chi Minh. It is my strong hope to keep following up the development of Vietnamese dance culture.

"LIVE BONE" Tour in Southeast Asia

After the performance in Tokyo, I left Japan once again and took off on a tour to demonstrate a work of mine called LIVE BONE in January 2014. I had dedicated a significant amount of time to developing this pop and stylish piece in Japan, in collaboration with two renowned Japanese



森山開次（ダンサー・振付家）によるパフォーマンス「HAGOROMO」 左：デワ・アリット氏との稽古（バリ） 右：「ARCHITTANZ 2014 2月公演」内（東京）© 瀬戸 秀美
"HAGOROMO" Left: Rehearsal with Dewa Alit in Bali Right: ARCHITTANZ 2014 February in Tokyo (photo by Seto Hidemi ©)



artists: a costume artist, Ms. Kodue Hibino and a music composer, Kohske Kawase. As the theme of the piece was body parts, such as internal organs and bones, Mr. Kawase came up with humorous, rock-style music, and Ms. Hibino designed very artistic costumes. I had performed this piece in more than 10 cities in Japan and had received favorable reviews saying that the performance was enjoyed by audiences of all generations from children to elders. However, it was still unknown to me how it was going to be received in other Asian countries. We performed in three cities in Southeast Asia as a solo demonstration combined with a workshop. Calling this performance “dokodemo dekiru performance (a performance that can be given anywhere),” we have presented it at all types of facilities, including museums, so we decided to do the same on this tour. In Indonesia, we performed in a Bali-style theater at the Indonesia Institute of the Arts Denpasar, in a vaulted ceiling lobby at the Jakarta TIM theater (the Jakarta Arts Centre), and in a courtyard surrounded by near-futuristic buildings at LASALLE College of the Arts in Singapore. A good number of audiences came to see our performance at all locations, which enabled us to perform while interacting with them. Many of the audiences who attend Butohperformance of overseas dance companies tend to be of an older generation, but this time, there were a lot of children and students in the audience. So it was especially exciting to perform in front of them. In all the cities where we performed, our performance was very well received as the audience could feel what Japan currently is like through the performance. I really had a great time as I felt a sense of oneness with the audience being at a very close distance. In the workshop held in conjunction with the performance, I had a first-hand experience that we can actually express and share our feelings using our body despite the language barrier we

have. Children, especially, can overcome such a barrier in a second. I was struggling a lot more than them. I think we were able to reconfirm with the children that it is fun to use our body to express our emotions. I am sure interacting with children from around the world will become much more important as the world becomes increasingly globalized. I will strive to create and perform dance pieces like LIVE BONE even more actively—pieces that put more focus on children.

My three-month assignment period ended successfully. Nothing can be more valuable than sharing the same time in a different culture. Various barriers do exist between different cultures, but I was able to have first-hand experiences that once we accepted that fact, we were able to learn to respect the differences. There is limitless possibility for cultural exchange through physical expression, because everyone has a body and can use their body to express themselves. It is needless to say that everybody is different and has his or her own personality. Everything starts when we accept the fact that everyone is different; every culture is different. It is the culture of our homeland and our own soul that we will be able to discover when we come into contact with a different culture. I learned that is another wonderful aspect of cultural exchange.

I experienced so many things during my visits that I do not have enough space here to share with you. What I felt during those

experiences is deeply engraved in my body, and I am sure that what I learned from those experiences will come forward naturally in one way or another. I cannot wait for that moment to come. Based on these experiences, I will continue to strive in the area of physical expression. It is my great hope to nurture and develop the many friendships that were born out of this valuable experience.

During my assignment, I received a great amount of support from many people. I am grateful to the people in the host countries as well as those who supported me all throughout the journey from Japan. It was certainly a great responsibility, but I learned that the most important thing for cultural exchange is the interaction at the personal level, instead of a formalistic exchange for a noble cause. Cultural exchanges always begin with meeting new people. I had a chance to meet many wonderful individuals throughout my journey and to have heart-to-heart communication with them. It made this journey an unforgettable memory that will remain with me for the rest of my life. Last, but not least, I would like to take this opportunity to extend my sincere appreciation to all the people who made this journey possible. Thank you very much.

Kaiji Moriyama Profile

Kaiji Moriyama was born in Kanagawa Prefecture in 1973. After being hailed as “one of the most talented dancers at this year’s Fringe” at the 2001 Edinburgh Fringe Festival, he started releasing dance pieces in which he serves as director, choreographer and performer. In 2007, he was invited to the Venice Biennale. In 2012, He won the Art Encouragement Prize for New Artists awarded by the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology and three other awards for his work: “THE UNIVERSE OF MANDALA.” His main pieces include “KATANA,” “YOROBOSHI” and “LIVE BONE.”

林田 宏之

CG アーティスト

活動期間 平成 26 年 11 月 1 日～12 月 14 日
活動国 クウェート、ヨルダン、レバノン、サウジアラビア、バーレーン、ベトナム、タイ

Hiroyuki Hayashida

CG artist

Period of the activities: From November 1 to December 14, 2014
Countries visited: Kuwait, Jordan, Lebanon, Saudi Arabia, Bahrain, Vietnam and Thailand

熱望される，日本文化を英語で学べる環境

若者に人気の日本のアニメとテレビゲーム

これまで文化交流使といえば、茶道、書道、俳句、能、和太鼓といった日本の伝統的な文化に携わっている方々が大半を占めていたと思われます。そういった中で、私は自分の職業であるコンピュータグラフィックスを軸に、アニメ作品、テレビゲーム、デジタルメディアを用いた作品、そしていわゆる「オタク文化」と呼ばれる、とても「新しい」日本の文化について訪問先の国々でレクチャーおよびワークショップをおこないました。

今回私は中東のクウェート、ヨルダン、レバノン、サウジアラビア、バーレーン、東南アジアのベトナムおよびタイ、計 7 か国を約 1 か月半かけて訪問しました。それぞれの国や施設によってワークショップ、レクチャーの内容は異なりますが、具体的には下記のようなことをおこないました。

《ワークショップ》

- ハイエンドな 3DCG ソフトウェアを使って、自分で考えたキャラクター、アニメーションなどを作成する。
- 同じくハイエンドな 3DCG ソフトウェアを使って、古典絵画を参考にライティング(照明)のやり方を探る。
- グラフィックデザイン用のソフトウェアを用い、ロゴマークなどのデザインをする。

《レクチャー》

- 日本のいわゆる「オタク文化」と呼ばれているものの紹介。テレビアニメの歴史、コミックマーケット、コスプレ、萌えキャラなど。そしてそれらが社会に与えている影響や、アニメーションを作るための最新技術などを紹介。



クウェート大学建築学部でおこなったCGワークショップの様子
A CG workshop at Kuwait University's College of Architecture

- 日本の新旧アニメ、特撮映画などが世界のエンターテインメント文化に与えた影響について解説。
- CG を使った日本の人気テレビコマーシャルがどのように作られているかを解説。
- 現在のオタク文化と古典文化のつながりについて解説。

主に中東では、一部を除いて日本や欧米諸国のようにエンターテインメントにおける CG 技術が発達しておらず、それを教える学校もあまりないようです。テレビで流れる CM に使われている CG の多くは欧米で制作されているようでした。したがってワークショップでは CG の制作を初めて経験するという人がほとんどで、みなソフトウェアの操作に苦労していました。しかし普段から映画やインターネットなどで CG の映像を楽しんでいることもあり、このソフトを使えばあのような映像ができるんだという興味から、苦労しながらも非常に楽しんでやってもらうことができました。

各国をまわりながら現地の人と話などを聞いているうちにわかったのは、今の 10 代から 20 代の若い人たちにとって、日本と聞いて思い浮かべるのはもはや富士山や桜、空手などではなく、アニメとテレビゲームだということです。日本から遠く離れた中東の地でも、驚いたことに多くの人が日本のアニメやゲームについてとてもよく知っています。これは、彼らが子供の頃からテレビで日本のアニメが放映されており、多くの人がそれを見ながら育ったことによる部分が大きいようです。もちろん、インターネットによって日本発信の映像作品が気軽に見られるようになったことも影響しているでしょう。「オタク文化」と呼ばれるものが今の若い外国人にとって日本文化への入り口になっているのです。

訪問したそれぞれの国で日本大使館の主催によりレクチャーやワークショップをさせていただきましたが、そのほとんどで、これまでに開催したどのイベントよりも多くの集客があったとの言葉をいただきました。それだけ、今回私がレクチャーさせていただいた内容について各国の若者が関心があるということなのでしょう。

日本語の壁

中東各国の公用語はアラビア語です。私はアラビア語を話すことも聞きとることも全くできないので、コミュニケーションについてやや不安がありました。しかし実際に現地に行ってみると、大きな都市に於いてはどこに行ってもアラビア語と英語が併記されており、ほとんどの人が英語を話すことができるため、心配は杞憂に終わりました。レクチャーやワークショップをおこなった会場の多くは大学で、主に美術や建築、デジタルメディアを専攻する学生が対象でした。その学生たちも英語を話し、東南アジアにおいてはタイで訪問した大学は英語で授業ができることを売りにしており、グローバルな人材を育てることにとても積極的です。そういった中で、多くの大学で聞かれたのは「英語で日本文化を勉強することはできないのか?」という言葉でした。

どこの国に行っても、日本の文化に興味を持つ学生はたくさんいます。そして彼らは日本に留学して、日本のアニメーション、デザインや美術、文化について学びたいと思っています。しかしそこに「日本語」という大きな壁が立ちはだかります。理系の分野に於いては日本でも英語で授業を受けられる環境は多いですが、こと美術、デザイン、アニメーションといった分野に於いては、英語でそれらを勉強できる大学というのは皆無に近いのではないのでしょうか。私の母校である東京藝術大学も、まず日本語が理解できることが入学するための条件となっています。したがって現在この分野で中東などから留学してきている学生は独学で日本語を習得し、それから日本の大学に入るということをやっています。

日本の優れた文化を学びたいという意思があるにも関わらず、言葉の壁でそれが叶わないというのは、日本にとっても大きな損失ではないでしょうか。少子化によって多くの大学が経営で苦しんでいる今、英語で学べる環境を早急に整え、このような学生を受け入れられるようにすることは、日本の文化を広めるという点では意義のあることだと考えます。



クウェートのガルフ大学で開催された地元のゲームコミュニティによるコスプレ大会
A cosplay competition at Gulf University for Science and Technology in Kuwait, organized by a local gamers' community



レバノンのサン・ジョセフ大学日本研究センターでおこなったレクチャーでの記念撮影
Commemorative photo of a lecture given at the Japan Academic Center at Saint Joseph University in Lebanon



タイのプリンス・オブ・ソンクラウ大学デジタルメディア学科でおこなったCGワークショップの様子
A CG workshop held in the Digital Media program at Prince of Songkla University International College, Thailand

Expectation for English-Learning Environment on Japanese Culture

Japanese Anime and Video Games are Popular among Young People

Up until now, the majority of Japan Cultural Envoys have been involved with traditional arts such as tea ceremony, calligraphy, haiku, Noh Theater, and taiko drums. In the midst of this, I have used my background in computer graphics as a starting point to carry out lectures and workshops on anime works, video games, and digital media products, as well as the modern Japanese “otaku culture” movement, at various countries I’ve visited.

As a Japan Cultural Envoy, I visited Kuwait, Jordan, Lebanon, Saudi Arabia, and Bahrain in the Middle East, as well as Vietnam and Thailand in Southeast Asia, for a total of 7 countries in a period of a month and a half. The content of the workshops and lectures were varied, and depends on countries and facilities, but the general outline was as follows.

<Workshops>

- Using high-end 3DCG software, participants create characters and animation based on their own ideas.
- Explore how to handle lighting on classical paintings by using high-end 3DCG software.
- Design a personal logo mark by using graphic design software.

<Lecture>

- Introduce Japan’s “otaku culture,” including the history of TV anime, the Comic Market, cosplay, and cute moe style characters. Also discuss the effects of this culture on Japanese society, and introduce the latest technology used for making animation.
- Discuss how old /new Japanese anime and special effects films have had influenced on the global entertainment industry.
- Discuss how popular Japanese TV commercials that use CG are made.
- Discuss the connections between modern “otaku culture” and classical Japanese culture.

Although there were some exceptions, mostly in the Middle East, the types of CG technology used in the entertainment industry were not well developed as in Japan and Western countries. And there were few schools available for students who want to learn. Many of the TV commercials on the air that use CG effects seemed to be made in the Western countries. Almost all of the participants in

workshops had never created CG before, and had struggling operating the software. However, they all had seen CG video before in films and internet videos, and were interested in software that could be used to create these kinds of works. Even though they had some trouble working out the operations, in the end they all really enjoyed the experience.

As I traveled around the countries and had conversations with locals, I learned that when young people today in their teens and twenties think about Japan, what comes to their mind is not Mt. Fuji, cherry blossoms, or karate, but rather Japanese anime and games. Even though the Middle East is quite distant from Japan, surprisingly large number of people know quite a lot about Japanese anime and games. One of the main reasons for this is that Japanese anime has been shown on TV since they were kids, and many of them grew up watching it. Of course, Internet also made it easier to access Japanese TV shows/animes/films than before. For young foreign people today, “otaku culture” is becoming a gateway to Japanese culture as a whole.

When I carried out my lectures and workshops hosted by the Japanese embassies of the countries I visited, almost all of them told me that attendance was greater than previous events. Perhaps this shows that young people in these countries have a stronger interest in otaku culture than the topics covered before.

Overcoming the Language Barrier

The official language in the Middle East is Arabic. I can neither speak nor comprehend Arabic whatsoever, so I was worried about how I could communicate with people. But when I actually arrived in these countries, English and Arabic were written side by side in the major cities. And almost everyone I met could speak English, so I realized I had nothing to worry about after all.

Most of the lectures and workshops were carried out at universities, mainly targeting

students in the fine arts, architecture, and digital media majors. The students could also speak in English.

Also at the university I visited in Thailand was offering many classes in English, which has become their appealing point. The university staff were focused on developing students with a global perspective. A lot of the students at these universities asked me, “Is it impossible to study Japanese culture in English?”

No matter which country I went to, there were lots of students interested in Japanese culture. These students want to study in Japan, and to learn about Japan’s animation, design, art, and culture. But there is a challenge to overcome before they could do this: Japanese language.

In the sciences fields, there are a number of facilities where students can study in Japan while still doing their coursework in English, but there are hardly any universities where students can study fields like arts, design, and animation with English-language courses. My alma mater is Tokyo University of the Arts, and understanding Japanese is one of the prerequisites for admission there too. What this means is that students from abroad such as Middle East and others, first need to study and learn Japanese on their own, and then enroll in a Japanese university.

Even if students wish to learn about Japan’s rich culture, they cannot do so without first overcoming the language barrier. This is a huge loss for Japan as well. Due to the declining birth rates, many universities are struggling to manage their administrations. If these universities could create an environment, where students can study Japanese culture in English and welcome the foreign students who are interested in doing so, it would have a significant effect on the spread of Japanese culture.

Hiroyuki Hayashida Profile

Hiroyuki Hayashida was born in Fukuoka Prefecture. He graduated from Tokyo University of the Arts, Faculty of Fine Arts, Department of Design. He has been working as CG artist/director, contributing his works to many fields: CM, movies, games, music videos and others. Besides, he held own galleries in Ginza and Aoyama publishing his original works. Also, he wrote articles for magazine called “CGWORLD” and other CG technical books. He also gave lectures at the colleges and company such as “Autodesk.”

中澤 弥子

食文化研究者、長野県短期大学教授

活動期間 平成 26 年 8 月 10 日～10 月 13 日
活動国 フランス、ドイツ、ポーランド、ハンガリー、イタリア、スロバキア、イギリス

Hiroko Nakazawa

Food Culture Researcher and Professor, Nagano Prefectural College

Period of the activities: From August 10 to October 13, 2014
Countries visited: France, Germany, Poland, Hungary, Italy, Slovakia and the United Kingdom

日本の食文化を介したヨーロッパでの文化交流

私は、「食文化」の分野で初めて文化交流使として派遣の機会を頂戴しまして、8月中旬から約2か月間ヨーロッパ7か国に参りました。活動に際し、ユネスコで無形文化遺産として「和食：日本人の伝統的な食文化」が登録されたことを踏まえ、自然を尊重する日本の食文化のすばらしさを伝えたいと思い、また、日本食を楽しく調理しおいしく食べていただく体験によって、日本の文化への関心を深めていただければと願い準備致しました。

関係各位のご協力を得て、活動として日本の食文化に関する講演会や、千葉県 の郷土料理「太巻き祭り寿司」のワークショップや、味噌汁、肉ジャガ、もりそばなどの試食会を訪問国のご要望に合わせて行うことができました。日本の食品会社のご支援を得て、味噌、海苔、信州ソバ、寿司用粉末酢などを日本から事前に各国に送付しました。現地では、食材の買い出しや料理の下ごしらえなど、関係の皆様は快くご協力いただきました。皆様のご支援に感謝しながら、心を込めて調理しました。ヨーロッパの水は硬水なので、だしがうまくとれるかなど心配しましたが、いずれの試食会でもおいしく召し上がっていただきました。特に、バラの花の模様の太巻き祭り寿司は、簡単に作れて見た目も美しく好評でした。

講演では、質疑応答で多岐にわたるたくさんの質問が出され、日本食への関心の高い様子がうかがわれました。アンケートの結果などから、おいしく、見た目もよく、健康的である点で、日本食が高い評価を得ているように思われました。講演の中で訪問国の食文化の特徴や優れた点についても感想を述べさせていただき、楽しい時間を共有できました。日本の食品会社から参加者に日本食をお土産にご提供いただき、喜んでいただきました。これらの経験から、日本の食文化をテーマにした文化交流活動は、話題も豊富にあり関係を良好にするのに適していると実感いたしました。

その他、各国の学校給食、伝統料理や日本食のレストラン、食品売り場などを訪問し、食に関わ

る専門家と情報交換する機会を得ました。新しい知見や日本と異なる視点、日本食普及の状況など、短期間ではありましたが多くのことを学び、訪問国とのネットワークを構築することができました。

10月に活動を終え、現在は、今回の文化交流使の活動について講演会や文章などにして、なるべく皆様にお伝えするようにしております。今後は、調査研究フィールドを国外にも広げるとともに、伝統的な日本の食文化の魅力について紹介する活動を、国内外で継続して行いたいと考えております。現状を考えると、クリスマスにサンタクロースが来ることは知っているけれど、正月に年神様が来ることを意識している人がどの程度いるかなど、伝え

られないで忘れ去られようとしている食に関わる文化がたくさんあると思います。

最後になりますが、私を文化交流使としてご指名下さり、計画の段階から活動中もいろいろお世話いただきました文化庁に心よりお礼を申し上げます。他では得られない貴重な経験を頂戴することができたのは、文化交流使事業のおかげと存じます。また、文化庁文化交流使事務局（日本コンベンションサービス株式会社）をはじめ、外務省、日本大使館、国際交流基金、食品会社、大学など、多くの関係の皆様は、多大なるご尽力を賜りました。皆様に、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

中澤弥子 平成26年度文化庁文化交流使活動（講演会・ワークショップ・実演・試食会）の概要				
活動日	国・都市	内容	会場	参加人数
8月20日	フランス/ゼンベル	試食会	有機ワイン醸造農家	12人
8月24日	ドイツ/フランクフルト	試食会	有機アップルワイン醸造所	12人
9月1日	ドイツ/ベルリン	講演会・ワークショップ	在ドイツ日本国大使館多目的ホール	36人
9月10日	ポーランド/ワルシャワ	講演会・ワークショップ	民族学博物館	20人
9月10日	ポーランド/ワルシャワ	講演会・試食会	民族学博物館	180人
9月16日	ハンガリー/ブダペスト	講演会・実演・試食会	シェフパレード（レストラン）	40人
9月20日	イタリア/ピエモンテ州	講演会・ワークショップ・試食会	食科学大学	38人
9月24日	イタリア/ローマ	講演会	ローマ日本文化会館	275人
9月30日	フランス/パリ	講演会	パリ日本文化会館	106人
10月2日	スロバキア/ブラチスラバ	講演会・実演・試食会	ルジノウ文化センター	100人
10月3日	スロバキア/ブラチスラバ	講演会・ワークショップ・試食会	調理専門学校	40人
10月6日	イギリス/ダラム	講演会・試食会	ダラム大学ビジネススクール	40人

中澤 弥子 プロフィール
熊本県生まれ。食文化研究者。長野県を中心とした地域の郷土食や農山村の食生活の研究をするとともに、食育活動にも積極的に取り組んでいる。料理の基本である包丁研ぎから日本の食材をいかした様々な調理方法の伝授や食事作法まで、料理・食に関する実習を数多く実施している。



Cultural exchange in Europe through Japanese food culture

I was the first to be dispatched as a Japan Cultural Envoy in the area of “food culture.” I visited 7 countries in Europe for about 2 months, starting from mid August 2014. Based on the designation by UNESCO of Washoku (traditional dietary cultures of the Japanese) as an Intangible Cultural Heritage, I made preparations for the activities, hoping to convey the beauty of Japanese food culture that respects nature. I was also hoping to help participants to deepen the interest in Japanese culture through the experience of cooking and enjoying Japanese food.

Thanks to the cooperation from people involved, I was able to engage in activities such as giving lectures on Japanese food culture, holding workshops on “futomaki matsuri sushi (thick festive sushi roll) which is a local specialty of Chiba Prefecture, and parties to taste misoshiru (miso soup), nikujaga (braised beef and potatoes), morisoba (chilled buckwheat noodles), and others, as requested by each country I visited. With the support from Japanese food companies, miso, nori (dried laver seaweed), Shinshu soba (buckwheat noodles from Nagano Prefecture), powdered vinegar for sushi, etc. were sent in advance from Japan to the respective countries. After I arrived to the countries, again I received many supports, for such as purchasing cooking ingredients and making preparations for cooking. I cooked with care and attention and with appreciation of these support. I had been concerned about whether I would be able to properly make dashi (stock), as water is hard in Europe, however despite my worry people enjoyed the dishes in every tasting party. Especially the futomaki matsuri sushi with the design of a rose proved to be very popular, as it was easy to make and beautiful to see.

At the lectures, a number and a variety of questions were asked in the Q & A session, which suggested the high interest in Japanese food. The results of the questionnaire survey, etc. showed that Japanese food is highly evaluated because of its good taste, attractive appearance and healthfulness. While at the lectures, I commented on the features and positive aspects of the food culture of the respective countries I visited and successfully shared a pleasant time. The participants were happy to bring home the souvenir of Japanese food provided by Japanese food companies. These experiences made me realize that cultural exchange activities with the theme of Japanese food culture offer an abundance of topics and are suitable for improving the relations between Japan and other countries.

In addition to above workshops, I had opportunities to visit schools for school lunch as well as traditional and Japanese food restaurants and food markets, to exchange opinions with food experts in the respective countries. Although it was not a long period of time, I learned a lot, including new knowledge, viewpoints different from those of Japanese



イタリア ピエモンテ州ポレンツォの小学校で子ども達と交流
Session with children in an elementary school in Pollenzo, Piemonte, Italy

people, and the current state of the spread of Japanese food, and at the same time I was able to build a network with the countries I visited.

I completed the activities in October. Now, I am trying to introduce my activities as a Japan Cultural Envoy through giving lectures and publishing papers as much as possible. In the future, I will expand the field of research and survey to overseas and continue the activities to present the appeal of traditional Japanese food culture both inside and outside Japan. When we take a look at the current situation, there are many cultural traditions that are not passed down and being forgotten, for example, I wonder how many people there know that Santa Clause visits houses on Christmas Eve, but aware of that Toshigami-

sama (God of the New Year) visits houses on New Year's day.

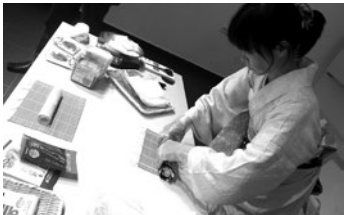
Last but not least, I would like to heartily thank the Agency for Cultural Affairs for appointing me as a Japan Cultural Envoy and for helping me in various ways at the stage of planning and during the activities. I think that it is thanks to the Japan Cultural Envoy program that I was given a chance to have this one-of-a-kind experience. I would also like to thank most sincerely the people involved such as members of the Secretariat for the Japan Cultural Envoy (Japan Convention Services, Inc.), Ministry of Foreign Affairs, Japanese Embassy, Japan Foundation, food companies, universities and others for their great efforts, help and support. I appreciate very much.

Overview of Hiroko Nakazawa’s activities as Japan Cultural Envoy of the Agency for Cultural Affairs for FY2014 (Lectures, workshops, demonstrations, tasting parties)				
Day of the activities	Country/City	Contents	Venue	Number of participants
August 20	France/Zellenberg	Tasting party	Organic winery and farm	12
August 24	Germany/Frankfurt	Tasting party	Organic apple winery	12
September 1	Germany/Berlin	Lecture meeting/Workshop	Multi-purpose hall at the Japanese Embassy in Germany	36
September 10	Poland/Warsaw	Lecture meeting/Workshop	Museum of Ethnology	20
September 10	Poland/Warsaw	Lecture meeting/Tasting party	Museum of Ethnology	180
September 16	Hungary/Budapest	Lecture meeting/Demonstration/Tasting party	Chef Parade (restaurant)	40
September 20	Italy/Piemonte	Lecture meeting/ Workshop/Tasting party	The University of Gastronomic Sciences	38
September 24	Italy/Rome	Lecture meeting	Institute of Japanese Culture in Rome	275
September 30	France/Paris	Lecture meeting	Japan Cultural Institute in Paris	106
October 2	Slovakia/Bratislava	Lecture meeting/Demonstration/Tasting party	CULTUS - Ruzinov Culture Center	100
October 3	Slovakia/Bratislava	Lecture meeting/Workshop/Tasting party	School of culinary arts	40
October 6	The U.K./Durham	Lecture meeting/Tasting party	Durham University Business School	40

Hiroko Nakazawa Profile
Hiroko Nakazawa was born in Kumamoto Prefecture. She has been researching on Food Culture, mainly on local foods and food cultures in villages in Nagano prefecture. Also, she has been working enthusiastically on Food Education. She has been holding seminars such as: teaching how to sharp kitchen knives, cooking methods for using Japanese ingredients and table manners, in which relating cooking and foods.



パリ文化会館での講演
Lecture at the Japan Cultural Institute in Paris, France



ワルシャワでの太巻き祭り寿司の実演
Demonstration of futomaki matsuri sushi in Warsaw, Poland



ワルシャワでのバラの花模様の太巻き祭り寿司のワークショップ
Workshop of futomaki matsuri sushi with the design of a rose in Warsaw, Poland



スロバキア ブラチスラバでの調理実習
Cooking practice in Bratislava, Slovakia

若宮 隆志

「彦十蒔絵」代表

活動期間 平成 26 年 11 月 2 日～12 月 3 日
活動国 イギリス、フランス、中国

Takashi Wakamiya

Producer of HIKOJU MAKIE

Period of the activities: From November 2 to December 3, 2014
Countries visited: The United Kingdom, France and China

漆と日本文化

今年度、文化交流使としての指名を頂き、11 月 2 日～12 月 3 日までイギリス、フランス、中国の 3 か国 6 都市の大学や美術館、ギャラリーなどで漆と日本文化についての講演やワークショップ、デモンストレーション、作品展示、情報交換などを行って参りました。

講演では、6000 年以上前の櫛や正倉院の厨子、中尊寺金色堂、金閣寺などの信仰の対象となる建築や仏像、武具や鉄製品、食器や家具など調度品をスライドで紹介することで、漆が実用性や装飾性などの役割を担い日本人の生活と密接にかかわりながら縄文時代から発展し今日に至ることや、鎖国の時代でありながら海外からの強い需要に輸出を止めることができずにたくさんの漆器が海を渡ったことなど、それほどの歴史と文化を持つ漆器が生活環境の変化などにより危機に直面している現状を知って頂くことで、漆器に関心を持って頂きたいと話しました。

作品展示では実際に作品を触って頂き、漆ならではの質感を感じて頂くことや、単に道具としてだけではなく色や形や絵柄に物語や意味があり、人間が本質的にもっている家族や隣人への思いやり、おもてなしの心がこめられていることを知って頂く機会とし、日本で数千年もの歴史を持つ漆器はわが国の総合文化であり象徴でもあることを訴えました。

ロンドンでは毎年 11 月の初めの週は Asian Art in London の時期で美術館やオークションハウス、ギャラリーの多くがアジアアート一色になります。そのため世界中からアジアのアートに関心があるコレクターや美術関係者、アーティストなどが集まります。

今年も Asian Art in London の企画としてギャラリーで作品の展示と講演を行いました。

私の講演の翌日には Bonhams でオークションが開催され、柴田是真の漆芸額 鉢の木蒔絵に 1 億 5 千万円以上の値が付き会場は異様な熱気となりました。漆芸作品がこれほどの価格で競り落とされる記念すべき現場に立ち会い、漆芸の可能性を感じるとともに自分の仕事を再認識する良い機会となりました。しかし日本ではこのような状況を知る人はほとんどいないでしょう。それはとても残念なことです。

マルセイユで通訳をしてくださいました翻訳家の田中晴子さんは、源氏物語の翻訳をされていたお陰で源氏物語を題材とした彦十蒔絵の作品説明を存分に話すことができました。人間の内面を表

現する意匠をマルセイユやエクス^{とうぐん}の学生さんに伝えることができたのは彼女の力だと感謝しています。エクスは印象派の画家のセザンヌの生まれた地でもあり、絵画に関心がある方が多く漆芸作品を絵画のような視点でみて頂けたと思います。

パリの最終日、フランス外務・国際開発大臣ローラン・ファビウス様 (Laurent Fabius) と大臣公邸にて接見する機会を得ました。私の今回の目的や文化交流使の活動について説明をさせて頂き、作品をご覧頂きました。かつてマリー・アントワネットがたくさんの漆の箱を集めていたことや、今でも多くの漆器がフランスの美術館に保管されていることを話しました。このことから将来的に蒔絵とフランスの関係は非常に重要なものであることをお伝えしました。大臣からもフランスと日本の文化交流を期待しているので、頑張って欲しいと励ましのお言葉を頂きました。

北京大学では、輪島塗の現状を踏まえ今後どのように解決策を見出すかということを話しました。講演の最後に北京大学の藤軍教授から参加した生徒さんに、「北京大学の学生は 5 万人、輪島市の人口 3 万人よりもはるかに多く、私達が経済的協力をして、輪島で作られた素晴らしい漆器を一点ずつ購入する事で、日本の工芸を救えるのでは

ないか」と提案がありました。藤軍教授は次回輪島にお越し頂ける予定です。

この度の活動のお陰で輪島塗や漆芸の作業や技術、特殊な道具や材料についてご紹介することができ、いまだに輪島では本物にこだわり漆芸品を制作している職人が多くいる事を知って頂く事が出来ました。作品の背景にある日本の伝統や文化、歴史、精神性に触れ、日本そのものへの理解や関心を深める良い機会になったと思います。今回知り合った皆様の反応が「輪島に行ってみた」というものでした。輪島という地域を実際に訪問することで、漆器を通して日本文化に触れてみたいと感じて頂いたことはとてもうれしいことです。このような反応があったのは輪島から同行した中国語、日本語、英語通訳の朱澤代表の高楨蓮さんが輪島や漆器を理解したうえで通訳をして頂いたことで、単に漆器の講演で終わらせるのではなく輪島での受け入れを含めた継続的な交流へ導いて頂けたと感じています。国境を超えて漆器を通して人間としての深い共鳴が得られ相互理解につながると感じます。今後も今回の活動を踏まえ海外での啓蒙活動を行いたいと考えています。

若宮 隆志 プロフィール

1964 年石川県生まれ。漆芸家として作品発表を行う傍ら、塗師や蒔絵師といった一つの職分にとどまらず、伝統的な意匠や文様の継承を考えながら新しい作品を企画し、それにふさわしい職人を組織する「彦十蒔絵」のプロデューサーとしても活動している。漆器の市場開拓、海外発表なども積極的に展開している。



スコットランド・アートクラブレクチャー前のランチ会
Luncheon before the lecture for Scottish Arts Club, in Edinburgh, the United Kingdom



パリの工芸家と交流、情報交換
Mingling and sharing information with Parisian Artisans, in Paris, France



フランス外務国際開発省ローラン・ファビウス外務大臣接見 両国間の交流について激励を頂きました
Meeting with French Minister of Foreign Affairs and International Development, Mr. Laurent Fabius. Minister Fabius speaks enthusiastically of Franco-Japanese relations, in Paris, France



中国北京大学でのレクチャー風景
Scene from the lecture at Peking University in China, in Beijing, China

Urushi (Japanese lacquer) and Japanese Culture

I was appointed as a Japan Cultural Envoy for this fiscal year and visited 6 cities in the 3 countries of the U.K., France, and China between November 2 and December 3, 2014. During that period, I had given lectures, held workshops, done demonstrations, exchanged opinions on urushi and Japanese culture and exhibited urushi works in art museums and galleries.

In the lectures, I used slides to show a comb made more than 6000 years ago, zushi (miniature shrine) kept in Shosoin (treasure warehouse), Chusonji (temple) Konjikido (hall), Kinkakuji (temple), and other buildings and statues of Buddha that are objects for religious worship, armors and iron tools, and furnishings such as tableware and furniture. I explained how urushi has developed from the Jomon Period (14000–300 BC) to now, playing practical and decorative roles and being closely related to the life of Japanese people, and further explained how great many pieces of urushi ware were taken out of Japan even during the period of sakoku (national isolation policy), as it was impossible to stop the export of urushi ware due to the strong demand from overseas. I explained to the audience that I would like them to get interested in urushi ware by learning about the current situation in which urushi ware with such a long history and the fact that the culture is facing a crisis due to changes in living environments.

The exhibitions of urushi works were opportunities for the visitors to actually touch the pieces and feel the unique texture of urushi in order to learn that urushi ware was not just a tool; its color, shape and design have meanings and stories, and furthermore, they are infused with inherently-human love, caring and hospitality for families and neighbors. I emphasized that urushi ware with a history of several thousand years is a comprehensive culture as well as a symbol of Japanese culture.

In the first week of November each year, many of the art museums, auction houses, and galleries in London uniformly feature Asian Art, as it is the time for the “Asian Art in London” trade fair, which attracts artists and collectors interested in Asian art and people involved in art from all over the world.

This year as well, as a project of the “Asian Art in London,” I had works exhibited and gave a lecture in a gallery.

On the day after my lecture, an auction was held at Bonhams where “Panel with Design of Farmhouse in the Snow at Sano” by Shibata Zeshin was sold for more than 150 million yen, which caused immense excitement. I witnessed a memorable scene of a piece of urushi artwork sold at such a high price. It was a good opportunity for me to be mindful of the good possibilities for urushi art and rediscover the meaning of my job. It is regrettable, however, that there are few people in Japan who know about the situation.

Ms. Haruko Tanaka helped me in Marseille as an interpreter. She is actually a translator and had been involved in the translation of the Tale of Genji. So, I was able to thoroughly explain the pieces that feature the Tale of Genji produced by Hikoju Makie, a makie production team. I am grateful to her, as I believe that her skills made it possible for the students in Marseille and Aix-en-Provence to learn the design that depicts the inner feelings of human beings. Partly because Aix-en-Provence is where Paul Cézanne, an Impressionist painter, was born, there were many people who were interested in art, and I believe that they appreciated the pieces of urushi artwork just like they appreciate paintings.

On the last day in Paris, I had a chance to meet with Mr. Laurent Fabius, French Minister of Foreign Affairs and International Development, at his official residence. I explained to him the purpose of my visit and the Japan Cultural Envoy program, and showed him some of the urushi works. I told him how Marie Antoinette collected many urushi boxes and many pieces of urushi ware are kept in French art museums today. I further explained to him that these facts suggest the great importance of the relations between makie and France now and in the future. Mr. Fabius encouraged me, saying that he hopes to see further cultural exchanges between France and Japan.

Takashi Wakamiya Profile

Takashi Wakamiya was born in Ishikawa Prefecture in 1964. While delivering his works as a lacquer artist, he works not only as a lacquer/gold lacquer master, but also as a producer of a group “HIKOJU MAKIE”: a group of craftsmen which plans a new type of works considering traditional design and inheritance of patterns. Also, he has been working enthusiastically to expand the markets of lacquer paintings and overseas publication.

平野 啓子

語り部・かたりすと

活動期間 平成 26 年 11 月 14 日～12 月 15 日
活動国 ドイツ、トルコ

Keiko Hirano

KATARIBE=catalyst (story teller)

Period of the activities: From November 14 to December 15, 2014
Countries visited: Germany and Turkey

海外に向けて「語り」の扉が大きく開かれた！

はじめに

まずは、文化庁文化交流使として、ドイツ・トルコの各地に、日本文化である伝統的な「語り」を紹介できましたこと、誠に嬉しく、心より感謝申し上げます。以下、報告です。

目的

ドイツ及びトルコの大学や日本語教育機関等において、日本文学の音声表現や指導、地域に伝わる物語を伝え、日本の伝統である「語り」や後に登場する「朗読」文化の紹介をする。

日ごろ私の行っている次の仕事をドイツ・トルコで行う。
●日本文学を声で伝える「語り」「朗読」の世界を、実演で紹介することやワークショップ・講座などで、解説や指導すること。
●昔から言い伝えられている伝承を自ら作品にして「語り」で継承すること。

ミッションについて

「訪問地域」

ドイツ：ベルリン・デュッセルドルフ・ケルン
トルコ：ヤロヴァ・イスタンブール・アンカラ・カイセリで実演，実技指導，講義，情報交換，その他（取材・視察等）
計三十回以上

「公演」

会場
《ドイツ》
ベルリン日独センター，ハインリッヒ・ハイネ・デュッセルドルフ大学，ケルン日本文化会館
《トルコ》
土日基金文化センター，ボアジチ大学講堂，エルジェス大学講堂，イスタンブール旧総領事館事務所，ヤロヴァの公民館

内容

日本文学の語り
《ドイツ》
「竹取物語」「走れメロス（太宰治作）」「しだれ桜（瀬戸内寂聴作）」「春はあけぼの（清少納言作）」ほか
（通訳，翻訳の字幕，事前のあらすじ説明等で補足。ベルリンでは，ドイツ人ストーリーテラー，バーバラ・ヘルフリッツェさんと共演の企画となり，同じ作品を，段落ごとに，日本語とドイツ語の翻訳とを交互に伝えて，輪唱のように一

つの作品にして上演。）
※ベルリンでは，ベルリン東京友好都市提携 20 周年記念公演として開催。
《トルコ》
「竹取物語」「藪の中（芥川龍之介作）」「しだれ桜（瀬戸内寂聴作）」ほか
（通訳，翻訳の字幕，事前のあらすじ説明等で補足。ボアジチ大学では，それらを一切使わず，トルコの詩人と共演し，同じ作品を，段落ごとに，日本語とトルコ語の翻訳とを交互に伝えて，輪唱のように一つの作品にして上演。）
※ 2014 年は，日本トルコ国交樹立 90 年に当たっていた。
※ボアジチ大学は，創立 150 年記念公演として開催。

富士山や桜の花見にまつわる話
《ドイツ・トルコ》
（富士山では，「竹取物語」「富嶽百景（太宰治作）」「聖徳太子飛翔伝説」など，桜の花見では，「しだれ桜（瀬戸内寂聴作）」，唱歌「さくらさくら」歌詞朗読，花見の由来など）
（※パワーポイントを使った公演では，日本画や写真とともに紹介。使用日本画：公益財団法人日本美術院同人・日本画家 高橋天山「羽衣」「なよ竹のかぐや姫」「うたたねの」，歴史画家 小堀鞆音「清少納言」個人蔵，「聖徳太子馭神馬到富嶽図」個人蔵，「聖徳太子十六歳尊像」佐野市郷土博物館，ほか）

相手国に関わる作品
《ドイツ》
ドイツ詩人 シラー，ハイネの詩
「走れメロス」（※シラーの詩「人質」とギリシャ古伝説に基づく作品）
《トルコ》
「エルトゥールル号物語」トルコ語訳付き（※日本とトルコの友好関係に結びついた話を，平野啓子が自身の取材に基づき脚本にした作品。協力：串本町）
「稲むらの火」（※ラフカディオ・ハーン原作，中井常蔵作。トルコは地震が多く，防災関係で 2 国の交流も行われていることから上演。）
使用曲
トルコ使節艦エルトグルル号追悼歌，ほか。
篠笛 望月美沙輔

〔講義・指導〕
会場
《ドイツーベルリン日独センター》
ドイツ人社会人 1 人「かぐや姫」朗読 マンツーマン指導
日本語教室 2 クラス
4 人「笠地蔵」
3 人「日本の良さを日本語で意見発表」
《トルコーアンカラ大学》
トルコ学生 200 人（個別指導 20 人）
「走れメロス」「初恋（詩）（島崎藤村作）」
「竹取物語」「雨ニモ負ケズ（宮沢賢治作）」
「春はあけぼのー手話語りー」等

〔講演〕
会場
《トルコー日本国大使館》
演題
「伝わる話し方」

〔情報交換〕
会場
《ドイツ》
在ドイツ日本国大使公邸，在デュッセルドルフ日本国総領事公邸
《トルコ》
土日基金文化センター，アンカラ大学，ボアジチ大学，カイセリ，ヤロヴァ，在トルコ日本国大使公邸，在イスタンブール総領事公邸

内容
日本語で伝える「語り」の世界について，語りの力とは，語りにふさわしい言い回しや文章表現，暗唱の文化と朗読の文化とその作品など。

〔その他〕
ドイツのストーリーテラーの語りの会やトルコの学校の授業などを視察，取材。
（使用衣装：主に和服）
マスコミ：放送・新聞掲載など
テレビ：TRT（トルコ国営放送），NHK ニュースおはよう日本，NHK あさイチ
新聞：ミリエト紙，ヒュリエト紙などトルコの新聞 6 紙，産経新聞
雑誌：ISSUE（トルコ）



主な成果

《ドイツ・トルコ》

・聞き手の全員が，物語の「語り」を聴くのが初めてだったが，ドイツ・トルコとも，「語り」「朗読」「一人芝居」の違いを一瞬のうちに聞き手が理解した。
・初めて「語り」に触れた外国人から，「語り」の世界に驚きと称賛の声をいただき，強い関心を持ってもらうことができた。
・すべての受け入れ先の主催者より，「大成功だった！」との言葉をいただいた。
・外国人が初めて触れる日本文学の中に，外国人が感動する作品が多数あることがわかり，「語り」が日本文学へ誘う役割を果たせることが分かった。

・日本語とドイツ語，日本語とトルコ語の音色の違いを聞き手が体感。「日本語は音楽的だ」との感想多し。
・語り上演におけるジェスチャーの役割と適度な間合いを確認できた。
・語り上演における輪唱，逐次通訳，同時通訳，翻訳の字幕，それぞれの効果の度合いを確認できた。文章の段落ごとにそれぞれの自国語で交互に伝える輪唱のような共演をする際，作品に宿る日本人の感性を共有する作業から入り，融和した一つの作品としての音声表現ができた。
・交流会で会の終了時間を越えても足りないほどの意見交換が活発に行われた。
・丹念な音声表現指導，活発な質疑応答や交流会等を通して，日本語の特徴を具体的に浮き彫りにできた。

・ドイツ・トルコそれぞれの国に対しての，現時点におけるもっとも伝わりやすい「語り」の手法を発見することができ，披露できた。
《ドイツ》
・語りを生業とするドイツ人女性とお会いでき，プロどうしの情報交換ができた。その人と，同じ作品を日本語とドイツ語で共演。
・ドイツ国内にも語りの存在することをドイツ人が認識。後継者が何人もいることも確認。
・予定時間を超える活発な質疑応答。専門領域に踏み込む質問多数。
・在ドイツ連邦共和国中根 猛特命全権大使主催の会で語りでの文化交流についての情報交換。

・ハインリッヒ・ハイネ・デュッセルドルフ大学公演に，在デュッセルドルフ嶋崎郁日本国総領事がご来場，ご挨拶・ご観覧。総領事主催の会でドイツ人を囲み語りに関する情報交換。
《トルコ》
・トルコの詩人による翻訳で，同じ作品を日本語とトルコ語で詩人と共演。
・平野の指導に基づく竹取物語冒頭の暗誦を，トルコのアンカラ大学の学生が舞台で行い，他大学の学生の「語り」への意欲を掻き立てた。エルジェス大学で，日本文学の暗誦を授業に取り入れる検討を始めた。
・トルコの詩人に，日本文学の一部を音声表現指導。公演時にその詩人が日本語で上演。
・エルトゥールル号物語（取材・構成・脚本

平野啓子）の脚本が，トルコ語に翻訳され（アンカラ大学協力），アンカラ，カイセリ公演での配布プログラムに全文掲載された。土日基金文化センターのサドックラル理事長が観覧し，パーフェクトの言葉をいただく。エルドアン大統領・チェリキ文化観光大臣より祝電をいただき読み上げられた。
・ヤロヴァでは，県知事より冒頭ご挨拶あり，最後までご観覧。
・天皇誕生日祝賀レセプションに招待され，スピーチの機会をいただき，会場で日本の心についての情報交換を活発に行った。
・在トルコ共和国横井裕日本国大使主催により，トルコ人を含む大使館職員への講演で講師を務めた。日頃，気づかないことに気づかせられて大変勉強になり役にたった，という言葉の皆様からいただいた。
・ボアジチ大学公演に，在イスタンブール福田啓二日本国総領事がご来場，ご挨拶・ご観覧。総領事主催の会でトルコ人を囲み語りに関する情報交換。

まとめ

関係者の皆様の限りない優しさと思いやり，そして，行き届いた会場設営のおかげで，すべてのミッションがスムーズに運びました。おかげさまで，終始大変温かく和やかな雰囲気の中で，イベントが開催され，私が，企図していたことのすべてを，実現できたと思っています。終演後のお客様の反応を見るたびに，また，主催者から，大成功でした！と喜びのお声をお聴きするたびに，胸が熱くなる思いでした。
「語り」の国際交流は，長年私が国際交流として夢見ていたことで，これまでその実現のために，様々な努力をしてきました。かつて，韓国と中国で，現地の方々を対象に日本語の「語り」公演をし，「語り」が国境を超える瞬間を体験しました。今回のドイツ・トルコへの派遣に先立ち，ケルン日本文化会館（清田とき子館長）を訪問して打ち合わせをするなど，事前の準備を

平野 啓子 プロフィール
<p>静岡県生まれ。名作・名文を暗唱する語り芸術家として舞台やテレビで活躍中。特に舞台では古典から現代まで名作の語りを総合芸術として光や音響，季節の風物を生かし独自の世界を切り開き，空間エンターテインメントを創造。国内外で公演，日本の文化や日本語の美しさを紹介するなど，新境地を開き高い評価を得ている。文化庁芸術祭大賞ほか多数受賞。語りのプロチーム，カタリザーの会主宰。</p>



ドイツのストーリーテラーと共演。日本語×ドイツ語翻訳の輪唱で一つの作品に。 ©2014 ベルリン日独センター
Performing with a German storyteller. Performed a single katarì together in a circular canon of Japanese and German. ©2014 Japanese-German Center Berlin

Japanese “Katari”: Booming Interest Overseas!

First of all, I am truly grateful to have had the opportunity to introduce the traditional Japanese art of “katari” (storytelling) to people in Germany and Turkey as a Japan Cultural Envoy of the Japanese Agency for Cultural Affairs. I would like to report on the experience below.

Purpose

To explain about the vocal expression techniques by using Japanese literature, provide guidance to students, discuss some regional stories, and introduce the traditional storytelling arts of “katari” and its successor “rodoku” (recitation) at universities and Japanese language learning facilities in Germany and Turkey.

To carry out my usual works in both countries: Germany and Turkey.

- Introduce the world of vocal storytelling arts for Japanese literature (“katari” and “rodoku”) through performances, and provide commentary and guidance through workshops and lectures.
- Transmit the tradition of ancient stories by performing “katari” storytelling.

About the Missions

Areas Visited:
Germany: Berlin, Dusseldorf, Cologne
Turkey: Yalova, Istanbul, Ankara, Kayseri

Performances, skill coaching, lectures, information exchange, and other events (interviews, observation, etc.)
Total: More than 30 missions

Performances:
Venues
[Germany]
Japanese-German Center Berlin, Heinrich Heine University Düsseldorf, Japanische Kulturinstitut Köln (The Japan Cultural Institute in Cologne)

[Turkey]
Turkish Japanese Foundation Culture Center, Boğaziçi University, Erciyes University, Former Office, Consulate-General of Japan in Istanbul, Community Center in Yalova

Contents
Japanese Literature “katari” Storytelling [Germany]
“Taketorimonogatari” (The Tale of the Bamboo-Cutter), “Hashire Merosu” (Run, Melos, Run) by Osamu Dazai, “Shidarezakura” (Weeping Cherry Tree) by Jakuchou Setouchi, “Haru wa Akebono” (In Spring, It Is the Dawn) by Sei-Shōnagon, and others (Supplemented with interpretation, translated subtitles, prior explanation of the stories, etc. In Berlin, one event was collaborated with German storyteller Barbara Höllfritsch, and we took turns telling the story paragraph by paragraph in the original Japanese and the translated German, performing in a circular canon fashion.)
*In Berlin, the event was held to commemorate the 20th anniversary of Tokyo and Berlin friendship city affiliation.

[Turkey]
“Taketorimonogatari” (The Tale of the Bamboo-Cutter), “Yabu no Naka” (In A Grove) by Ryuunosuke Akutagawa, “Shidarezakura” (Weeping Cherry Tree) by Jakuchou Setouchi, and others. (Supplemented with interpretation, translated subtitles, prior explanation of the stories, etc. Yet, at Boğaziçi University, none of these were used. Instead, a Turkish poet and I collaborated and took turns storytelling paragraph by paragraph, alternating between the original Japanese and translated Turkish and performing in a circular canon fashion.)
*2014 was the 90th anniversary of the establishment of a diplomatic relationship between Turkey and Japan.
*The event at Boğaziçi University was held to commemorate the 150th anniversary of its founding.

Stories Concerning Mt. Fuji and Cherry Blossoming Viewing Parties
[Germany & Turkey]
“Taketorimonogatari,” “Fugakuhyakkei” (A Hundred Views of Mt. Fuji) by Osamu Dazai, and the “Shōtoku-Taishi hisho-densetsu” (The Legend of Prince Shotoku’s Flight), among others, and their relationships with Mt. Fuji. “Shidarezakura” by Jakuchou Setouchi, and the song “Sakura Sakura” (Cherry Blossoms, Cherry Blossoms), which I performed in rodoku, are related to cherry blossom viewing. Also explained the origins of the custom of viewing parties, etc.
(*At performances using Power Point, the stories were introduced in combination with Japanese paintings and photos. Paintings used: Nihon Bijutsuin (The Japan Art Institute) member Tenzan Takahashi’s “Hagoromo” (Robe of Feathers), “Nayotake no Kaguyahime” (Supple Bamboo Princess, Kaguya), and “Utataneno” (Nap), as well as the historical painter Tomoto Kobori’s “Sei-Shōnagon” and “Shōtoku-Taishi Shimme ni notte Fugaku wo noboru no Zu” (Image of Prince Shōtoku Arriving at Mt. Fuji Riding His Sacred Horse) from private collections, and “Shōtoku-Taishi 16 sai Sonzō” (Portrait of the Nobel Prince Shōtoku at 16) from the Sano City Folk Museum, among others.)

Works Related to the Host Country
[Germany]
German Poet, Friedrich von Schiller, Heinrich Heine
“Hashire Merosu” (*The story is based on Schiller’s poem “The Hostage” and ancient Greek traditions.)

[Turkey]
“Erutürurugō Monogatari” (The story of-THE ERTUĞRUL FRIGATE DISASTER) includes a Turkish translation. (This is a story based on the favorable relationship between Turkey and Japan, with a script I wrote based on data I collected personally. With cooperation from the town of Kushimoto.)
“Inamuranohi” (Fire in the Rice Village)

(*Written by Lafcadio Hearn / Tsunezō Nakai. Performed due to the common concern on earthquakes in both Turkey and Japan, and the relationship between two countries’ disaster risk prevention.)

Music used
Torukoshisetsukan Erutogururugōtsuitōka (Mourning the Turkish Envoy Ship Ertuğrul), and others.
Japanese transverse bamboo flute: Misaho Mochizuki

Lectures & Coaching:
Venues
[Germany - Japanese-German Center Berlin]
German adults: 1. “Kaguyahime” (Princess Kaguya) rodoku. One-on-one coaching.
Japanese classes: 2 classes, “Kasajizō” (Hats for Jizo) 4 students
“Expression Opinions about Japan’s Good Points in Japanese” 3 students
[Turkey –Ankara University]
Turkish students: 200 (individual coaching: 20 students)
“Hashire Merosu,” “Hatsukoi” (First Love) a poem by Touson Shimazaki, “Taketorimonogatari,” “Amenimomakezu” (Be not Defeated by the Rain) by Kenji Miyazawa, “Haru wa Akebono –katari of sign language–,” etc.

Lectures:
Venues
Turkey - Embassy of Japan in Turkey
Lecture title: “Getting your message across”

Information Exchange:
Venues
Turkish Japanese Foundation Culture Center, Ankara University, Boğaziçi University, Kayseri, Yalova, Japanese Ambassador’s Residence in Germany, Consulate-General of Japan’s Residence in Dusseldorf, Japanese Ambassador’s Residence in Turkey, Consulate-General of Japan’s Residence in Istanbul.

Content
Discussion of the world of Japanese “katari”. The power of “katari”, appropriate phrasing, composition, and expressions, as well as the oral traditions of “ansho” (recitation from memory) and “rodoku,” works from these traditions, and other topics.

Other:
Observation and data collection at German storytellers’ “katari” gatherings, school lessons in Turkey, and other events.
(Clothes worn: mainly traditional Japanese clothing)
Mass Media: Broadcasts, Newspaper Articles, etc.
TV: TRT (Turkey’s national broadcasting channel), “NHK News Ohayo-Nippon,” “Asaichi”
Newspapers: 6 major Turkish newspapers, including Milliyet and Hürriyet, as well as the Sankei Shimbun (Japanese newspaper)
Magazine: ISSUE (Turkey)



早替えて着物からドレスへ。トルコで、「竹取物語」の後、「エルトゥール号物語」の語り。
A quick change from a kimono to a dress. In Turkey, katari performance “Erutürurugō Monogatari” after the “Taketorimonogatari.”

Major Results

[Germany & Turkey]
● Although none of the audience members had ever heard “katari” storytelling before, in both Germany and Turkey, they all were immediately able to understand the differences between “katari,” “rodoku,” and “hitori shibai” (a one-man play).
● Foreigners experiencing “katari” for the first time responded with surprise, praise, and a strong interest in the world of “katari”.
● I heard from the sponsors of the events at all locations that they were “a great success!”
● The audience were not familiar with Japanese literature, but were nonetheless moved by a number of the stories presented. This showed that “katari” can have a role in inspiring interest in Japanese literature.
● The audience experienced the differences in tone and color between the Japanese language and the German and Turkish languages. Many of them felt “Japanese has a musical sound in itself.”
● Confirmed the role of gestures in “katari” performance, as well as the appropriate moderate frequency of their use.
● Confirmed the relative effectiveness of circular canon, consecutive interpretation, simultaneous interpretation, and translated subtitles for use with “katari” performance. When performing with a circular canon style with two performers each using their own native language paragraph by paragraph, we started by sharing the Japanese sensibilities inherent in each piece, and were able to present the works as one harmonious vocal expression.
● Participants were full of ideas to share, so that even after the allotted time for exchange meetings had ended, they still had more to say.
● Through the diligence of students accepting my vocal expression guidance, as well as the lively question and answer sessions and exchange meetings, the characteristics of the Japanese language were thrown into sharp

relief.
● Discovered the “katari” methods which was most effective for storytelling in each country while staying, and was able to use them in my performances.

[Germany]
● Met a German woman who makes a living as a storyteller, and was able to share information with her as a fellow professional. Performed the same story together with her in Japanese and German.
● German people are now aware of the existence of folktales and storytelling within their country. Also realized that there are many successors carrying on these traditions.
● Participants were active during question and answer sessions and these sessions exceeded the allotted time. Many of their questions entered into specialized subject matter and fields of study.
● Participated in information exchange through “katari” at an event organized by Mr. Takeshi Nakane, Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary to the Federal Republic of Germany from Japan.
● At the Heinrich Heine University Düsseldorf performance, resident of Dusseldorf and Japanese Consul General Mr. Kaoru Shimazaki was in attendance, and watched the performance after giving some opening remarks. At an event sponsored by the consul general, participated in information exchange related to “katari” with German participants all around me.

[Turkey]
● Performed a piece in Japanese and Turkish, together with a Turkish poet who drafted the translation.
● Turkish students at Ankara University performed “ansho” as of the opening sections of “Taketorimonogatari” on stage with my guidance and coaching, inspiring an interest in



トルコの詩人と共演。日本語×トルコ語訳の輪唱による日本文学の語り。
Performing with a Turkish poet. Performed a Japanese literature katari together in a circular canon of Japanese and Turkish.



ドイツの大学授業で、名作の実演とワークショップ。通訳付きで、富士山や桜の語りも。
A performance of a famous piece followed by a workshop at a German university. Also discussed Mt. Fuji and cherry blossom katari stories with the help of an interpreter.



ドイツ・ケルンで。富士山の伝説を日本画と。通訳さんとともに。
Cologne, Germany. Introducing the legends of Mt. Fuji in combination with Japanese painting, with help of an interpreter.



ドイツ・ベルリンで。ドイツのストーリーテラー、ヘルフリッヒェさんと日本文学を日本語とドイツ語訳で輪唱。
Berlin, Germany. Performing Japanese literature in Japanese and German in a cyclical canon style with Barbara Höllfrisch, a German storyteller.

“katari” in students from other universities. At Erciyes University, staff began considering the addition of Japanese literature ansho to classes.

● Gave vocal expression guidance to a Turkish poet for a portion from Japanese literature. The poet then used Japanese in a public performance.

● The script for Erutürurugō Monogatari (research, construction, script: Keiko Hirano) was translated into Turkish (with cooperation from Ankara University), and the script was then printed in its entirety in the program notes for performances in Ankara and Kayseri. Mr. Sadiklar, chairman at the Turkish-Japanese Foundation Culture Center, saw this, and told me it was perfect. Congratulatory telegrams were also issued to me by both President Erdoğan and Minister of Culture and Tourism Ömer Çelik, and these were then read aloud.

● In Yalova, the prefectural governor gave opening remarks for the performance, and watched until the end after his speech.

● Was invited to an Emperor’s Birthday Reception and given the opportunity to make a speech. At the venue, had an engaging exchange with the other guests about the spirit of the Japanese people.

● Served as a lecturer at a course for employees of the embassy (including Turkish employees) sponsored by Mr. Yutaka Yokoi, Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary to the Republic of Turkey from Japan. Heard from participants that the session was useful, helped them to realize things they usually ignore, and that they learned a lot from taking part in it.

● At the Boğaziçi University performance, resident of Istanbul and Japanese Consul General Mr. Keiji Fukuda was in attendance, and watched the performance after giving some opening remarks. At an event sponsored by the consul general, participated in information exchange related to “katari” with Turkish participants.

Conclusions

Thank you very much for kindness and consideration of all the event staff, and the thorough and attentive construction of the venues, those surely helped all my missions to proceed smoothly. As a result, the atmosphere

at all the events was warm and harmonious from beginning to end, and I was able to do absolutely everything I planned to. Every time I saw the audience’s reactions after a performance, and heard the event organizers excitedly tell me that it was a great success, I felt an overwhelming sense of satisfaction and happiness.

International exchange through “katari” is something I have dreamed of doing for many years, and I have put a great deal of effort into various things along the way to make it happen. In the past, when I traveled to China and Korea and performed “katari” in Japanese for the local people, I truly got a sense that I was overcoming geographical boundaries through the art. Before traveling to Germany and Turkey for this trip, I visited The Japan Cultural Institute in Cologne and had a meeting with the director, Tokiko Kiyota, and I feel that this meeting and the preparations prior to departure contributed to the success of my trip.

This time, I really felt a sense of responsibility to the art of “katari” when I led a long question and answer session and had to respond to foreigners asking me questions related to specialized subjects and fields of study.

The Japanese Agency for Cultural Affairs has watched over my progress as an expert in the field of “katari”, and I have now been appointed as a Japan Cultural Envoy and representative for Japan’s katari culture. There were many initial obstacles to using “katari” as a means for international exchange, and I am deeply grateful to the Agency for opening the door and giving me the opportunity to do so. On my dispatch mission this time, the Japanese Agency for Cultural Affairs, International Affairs Division had the foresight

to share information with the Ministry of Foreign Affairs, and in this way all related staff were able to pool their resources and make this trip a great success. I would like to give my heartfelt thanks to everyone whom involved with.

I am also grateful to all the regions, institutions, organizations and people who cooperated during my visits to both countries: the Japanese-German Center Berlin, Heinrich Heine University Düsseldorf, the Japan Cultural Institute in Cologne, Boğaziçi University, JICA, Yalova Prefecture, Yalova City, the Turkish-Japanese Foundation Culture Center, Ankara University, Erciyes University, the Japanese Agency for Cultural Affairs, the Ministry of Foreign Affairs, the Japan Foundation, the Embassy of Japan in Germany, the Consulate General of Japan in Dusseldorf, the Embassy of Japan in Turkey, the Consulate General of Japan in Istanbul, the Embassy of Germany in Japan, the Embassy of Turkey in Japan, staff at the Cultural Envoy Executive Office of the Japanese Agency for Cultural Affairs, and everyone else involved who made this trip possible. Especially regarding Berlin, Mr. Haruo Nishihara, former president of Waseda University, and Mr. Kōichiro Agata, professor at Waseda University and trustee of the Japanese-German Center Berlin, offered advice starting from the planning stages, and they were both kind enough to provide me with guidance.

I received a tremendous number of “wonderful souvenirs” from both Germany and Turkey, and I am hoping to introduce some of them to the audience at performances and other events within Japan. A performance after I return is currently in the planning stages.

I hope to continue using “katari” as a means for international exchange in the future.

Keiko Hirano Profile

Keiko Hirano was born in Shizuoka Prefecture. She has been active both on stage and TV as a storyteller/artist who recites great stories and passages. Especially on stage, she has opened up a unique world and created space entertainment, presenting the reciting of great stories from classics to contemporary pieces as a comprehensive art with a positive use of light, sound, and seasonal features. She has performed both domestically and abroad, showcasing the beauty of Japanese culture and language and opening new frontiers, and is highly evaluated for these activities. She won many awards, including the National Arts Festival Grand Prize from the Agency for Cultural Affairs and is head of the “Cataryzer no Kai,” a team of professional storytellers.

長谷川 祐子

キュレーター（学芸員）、大学教授

活動期間 平成 26 年 3 月 12 日～7 月 14 日
活動国 アラブ首長国連邦, ドイツ, モロッコ, フランス, アメリカ合衆国, モナコ公国, アルメニア, グルジア, スウェーデン, ベルギー, イギリス, イタリア, 中国, チェコ, ハンガリー, スイス, ロシア, ポルトガル

Yuko Hasegawa

Chief Curator of the Museum of Contemporary Art, Tokyo and Professor of Tama Art University in Tokyo

Period of the activities: From March 12 to July 14, 2014
Countries visited: United Arab Emirates, Germany, Morocco, France, the United States, Principality of Monaco, Armenia, Georgia, Sweden, Belgium, the United Kingdom, Italy, China, Czech Republic, Hungary, Switzerland, Russia and Portugal

文化交流使活動報告

1) 日本研究, 日本への関心とアートへの関心の温度差

 昨年の 3 月半ばから 7 月の初めまで文化交流使の任を得て、ヨーロッパで事業を行なった。ヨーロッパはアジアやアラブなどの調査を行った際、作家の多くがヨーロッパで支援を受けて活動発表していること、そしてアジア研究, 日本研究の大学, 研究機関とネットワークをつくりたいと考えたためである。今回交流使として、キュレーター／クリティックは初めてということで、小規模でも展覧会を実施、あわせてレクチャーあるいはワークショップ事業の内容とした。

 日本のアート, 建築, デザイン, 文化状況を紹介することとなるため、トピックをいくつか作り、それをすでにネットワークのあった美術館や大学に提案した。

2) 講演内容

 前年から送った 10 の講演のトピックのプロポーザルに対して関心を示した機関、文化施設からスケジュールを割り当てていくという方法をとった。約 4 か月の期間を通して、18か国, 約27か所のインスティテューションで講演を、モスクワの V-A-C やロンドンの RCA のキュレトリアルコースで 2 回のキュレーターワークショップを行った。またフランスでは菅本志雄の小個展を開催した。

1) 日本研究, 日本への関心とアートへの関心の温度差

 最初はフランスのストラスブール近くのコルマールにある日本文化研究施設 CEEJA(アルザス・欧州日本学研究所) から始まった。CEEJA は展示室として Corps de Garde（警護用の家）という 16 世紀

にたてられた小さな建物をもっており、CEEJA の主催「もの」派の代表的作家である菅本志雄の小さな展覧会を企画した。展示室は写真のように小さいながら美しいプロポジションの場所で、作家と話し合い、青いポリカーボネイトの板を白い紙と交差させるように床においていき、一方の壁にポリ板をたてかけた作品「状為論」と、やはり 70 年代の屋外で様々な状況に介入をおこなった「野展」の記録を写真作品としたものを展示した。もの派は 1960 年代の国際化のリアクションとして内的な独自性の検証に回帰しようとした 70 年代の動向であり、「具体」に続いて国際的なマーケットブームとなりつつある。しかしものを主体とし、独特の状況をその場でたちあげていくインスタレーションは間接情報では最も伝わりにくいものの一つである。CEEJA では 2015 年 3 月に「間」をテーマとしたシンポジウムを開催予定であり、菅のものと、ものそのものの関係をみせる方法とリンクがあった。小さな町ゆえに観客の反応はつかみにくかったが、展覧会そのものは確かな存在感をもちえていたと思う。バーゼルから近いこともあり、アートフェアの際に訪れた来館者もあった。

 CEEJA は年に一度大きなシンポジウムを開催する他は、小さな講演やワークショップを行なっている。ヨーロッパにおける日本文化研究所のネットワークをいくつか紹介してもらったが、俳句や文学、そしてサブカルチャーや芸能に関心があっても、近現代アートとなると難しく、結果的に美術館や大学の美術史やキュレイトリアルスタデイのネットワークの方が有効であった。つまりここで感じたのはヨーロッパから《日本の文化》

をみたとき、その中で近現代アートの占める位置の小ささだった。ストラスブール大学で学生 150 人に対して講演を行ったとき、大半の学生の関心は日本のポップカルチャー、マンガやアニメ, 映画, 音楽, デザインなどであり、1990 年以降のアートというテーマで、領域横断的な作家やポップカルチャーと関係する作家を選んで講演を行った。日本の文化の特異性, 幼児性や未来性への関心が高く、それらを自分たちにはない「クールなもの」ととらえる好奇心がそこにあった。日本文化は peculiar といわれる。過剰や増殖, ハイブリディティ, ポストヒューマン的な奥行きのかなと輝かしい未来的な表面性のような（しかも形としては洗練されている）、ヨーロッパの深みにはないものが「あこがれられる」。

 アートはモノや身体という具体的でローカルな要素を大きく背負っている。そのために日本の現代アートについて語るとき、その「視覚化」「物質化」した産物を講演という形式で画像だけでみせながら聴衆に伝える事は容易ではない。それを補うのが文脈化を通してということとなる。

3) 日本のキュレーターに期待されていること

 ヨーロッパは言説, ロジック, 文脈の地である。一般人でも議論, 互いの意見をかわす事で交渉, 交換, 止揚が起こっていく。そのことを意識してたてたトピックのうち、最も希望が多かったのは、「3.11 の後の政治社会的アートの動向」というテーマである。津波のイメージも含め、エネルギー問題や一般に政治的な関心の薄い日本人作家にどのような意識変化が起っているのかが関心の対象であった。構成としては、写真作家の畠山直哉, 志賀理江子といった被災地に関係のある写真作品に実際にアクティビスト的に現地で介入的なアクションを行った Chim↑Pom や竹内公太の指差し作業員の例。

 より間接的なステイトメントとして他者の体験を共有することを複数のコラボレーションのプロジェクトの記録でみせた田中功起や建築家の試み、震災関係だけでなく、Rhizomatiks にも言及し、状況や情報を解釈, 抽象化, 視覚化することへの関心の高まりを動向として説明した。興味深かったのは、これは responding または activist 的行為であってコンセプチュアルアートではない、という意見があったことである。文脈やロジックがない、一人の質問者が例として河原温やハンス・ハアーのような作家はいないのか? と聞いた。筆者はこれに対して、「ソフトコンセプチャリズム」という用語で応酬したが、社会に対するステ



イトメントとアートとしての様式の両方を厳しく検証される欧州において、これらの日本作家をどのように文脈づけていくかは課題として残された。

 オルターナティブなコンセプチャルアートの系譜として日本の女性作家をトピックとした、反芸術的な態度とパフォーマンス、その個性的なライフスタイルゆえの主張の強さとして草間彌生, オノ・ヨーコ, シャーマンのなスピリチュアリズムを拝見とした森万里子, 内藤礼, サブカルチャーや都市文化との関係で東芋、やなぎみわ、そして社会性とメディアの活用において、Chim↑Pom のエリイ, スブツニ子！、最後に妹島和世と川久保玲を挙げた。ここでも独自性と、従来の価値観への批評性を要素としてコンセプチャルの系譜を新たに作りだそうと試みた。

 ほか日本の建築, 伊東豊雄, 坂茂, SANAA, アトリエ・ワン, 石上純也, 藤本壮介といったプログラム建築の新しい流れを、最近の震災関係のバブリックプロジェクトもあわせて、リサーチを主体としたソーシャル、コンセプチュアルなコンテキストとして講演した。これについてはポルトガルの Serralves Museum of Contemporary Art やローマで建築系の学生が多く参加し、日本の建築に関する関心の高さを示したが、彼らの関心はキュレーターやクライアントが建築家とどのように建築プログラムをつくったのかというコラボレーションの部分であった。

Japan Cultural Envoy Activities Report

1) Difference in Interest in Japanese Culture and Research, compared to Interest in Art

 From middle of March to beginning of July last year, I served as a Japan Cultural Envoy, and visited Europe to carry out my project. The reasons I chose Europe this time are that when I conducted surveys in Asia and the Middle East, many artists told me that they had received support from Europe for their activities, and also I wanted to build a network of schools and research institutions, which have Asia and Japan study programs. This was the first time that the Japan Agency for Cultural Affairs sent a curator/critic as a Japan Cultural Envoy, so what I implemented were small-scale exhibitions combined with lectures or workshops.

 I thought up some topics for introducing Japanese art, architecture, design, and current culture, and suggested to art museums and colleges that were already part of network.

 I planned schedule considering the result from institutions on survey, which regards to topics on lecture I sent in advance last year. During 4 months, I gave lectures at approximately 27 institutions in 18 different countries, and carried out two curator workshops at Moscow's V-A-C and London's RCA curatorial course. I also held a small exhibition of Kishio Suga's works in France.

1) Difference in Interest in Japanese Culture and Research, compared to Interest in Art

 The first place I visited was CEEJA (Centre

特に筆者が総合的なコンセプトからかかわった金沢 21 世紀美術館や、シャルジャビエンナーレの、公園やオアシス、屋外映画館などのバブリックプロジェクトはリサーチ段階も含めてのプロセスに質問が集まった。ブタペストで新たな美術館建設を検討している関係者グループへの講義では、バブリックとプライベートの境界のつくりかたに関心があつまった。

2) 日本研究, 日本への関心とアートへの関心の温度差

 ヨーロッパは言説, ロジック, 文脈の地である。一般人でも議論, 互いの意見をかわす事で交渉, 交換, 止揚が起こっていく。そのことを意識してたてたトピックのうち、最も希望が多かったのは、「3.11 の後の政治社会的アートの動向」というテーマである。津波のイメージも含め、エネルギー問題や一般に政治的な関心の薄い日本人作家にどのような意識変化が起っているのかが関心の対象であった。構成としては、写真作家の畠山直哉, 志賀理江子といった被災地に関係のある写真作品に実際にアクティビスト的に現地で介入的なアクションを行った Chim↑Pom や竹内公太の指差し作業員の例。

3) 日本のキュレーターに期待されていること

 ヨーロッパは言説, ロジック, 文脈の地である。一般人でも議論, 互いの意見をかわす事で交渉, 交換, 止揚が起こっていく。そのことを意識してたてたトピックのうち、最も希望が多かったのは、「3.11 の後の政治社会的アートの動向」というテーマである。津波のイメージも含め、エネルギー問題や一般に政治的な関心の薄い日本人作家にどのような意識変化が起っているのかが関心の対象であった。構成としては、写真作家の畠山直哉, 志賀理江子といった被災地に関係のある写真作品に実際にアクティビスト的に現地で介入的なアクションを行った Chim↑Pom や竹内公太の指差し作業員の例。

長谷川 祐子 プロフィール

京都大学卒、東京藝術大学大学院修了。金沢 21 世紀美術館学芸課長及び芸術監督を経て、2006 年より東京都現代美術館チーフ・キュレーター、多摩美術大学芸術学科教授、2011 年より、犬島家プロジェクトアーティスティック・ディレクターを務める。海外で第 11 回シャルジャ・ビエンナーレキュレーター（2013 年）、アート・バーゼル香港 2012, 2013, 2014 エンカウンター部門キュレーターなどを歴任。主な著書に、『「なぜ？」から始める現代アート』（NHK 出版新書）、『キュレーション 知と感性を揺さぶる力』（集英社）がある。

4) 日本研究, 日本への関心とアートへの関心の温度差

 Européen d'Études Japonaises d'Alsace), a Japanese culture research facility located in Colmar, near Strasbourg, France. There is a small exhibition space built in the 16th century called “Corps de Garde (bodyguards’ house)” that is part of the CEEJA facility, and I planned a small exhibition of work by Kishio Suga, one of the representative artists of the Mono-ha artistic movement. As shown in the pictures, the space was small, but beautifully proportioned. So after discussing with the artist, I placed a blue polycarbonate board on the floor intersecting with white paper, and stood another polycarbonate board against the opposite wall to recreate “Situated Underlying Existence,” and also exhibited a photographic record of the various outdoor interventions and “Fieldwork” that he did in the 1970s. Mono-ha was a 70s mental inspection and originality movement that was a reaction to the internationalization that was favored in the 60s, and following on the “Gutai” group, it is currently experiencing a boom in the international market. However, when setting up an installation to recreate a unique situation centered around objects using only secondhand information at an off-site location, it’s very difficult to get an idea what it is. In March 2015, CEEJA will hold the symposium which focuses on “Ma (space in-between),” so there was a link on method for showing pieces and the Mr. Suga’s objects. The hosted town itself was small and it was hard to capture the reactions, yet I felt it grabbed local’s attention. Since the exhibition was close to Basel, there

 また、制度が確立したロンドンの RCA では、非西欧圏からきた学生が半数以上だったが、そこで異なったインフラや文化状況の中でどのような方法が可能かをいくつかのケーススタディで説明した。海外での国際展の経験のある日本の美術館キュレーターとして相対的比較的な方法の提案や実践の経験が彼らには興味深い内容のようだった。

 アートへの尊敬, 関心の高さ、そして政治, 社会, ライフの中にアートがあたりまえに存在しているヨーロッパでは、いわゆる美術館の観客層でない人びとでも芸術の意義を共有している。その中でどのような言説, 展示というプレゼンテーションが有効か、考えるよい機会となった。

5) 日本研究, 日本への関心とアートへの関心の温度差

6) 日本研究, 日本への関心とアートへの関心の温度差

7) 日本研究, 日本への関心とアートへの関心の温度差

8) 日本研究, 日本への関心とアートへの関心の温度差

9) 日本研究, 日本への関心とアートへの関心の温度差



菅本志雄「Situating Underlying Existence」展 展示風景 《界律》1974/2006 撮影：佐藤 敏
Kishio Suga "Situating Underlying Existence" exhibition Exhibition of "Space - Order" 1974 / 2006 Photo: Tsuyoshi Sato

and concrete elements of body and object. As a result, when I discussed Japanese modern art, explaining the visualization and materialization to audience using only pictures was not easy. I tried to “contextualize” to help understanding.

2) Lecture Contents

Europe is a place founded on discourse, logic and context. Even general public can carry out negotiation, exchange, and sublation through discussion. Keeping this in mind, I chose “Political and Social Art After the 3/11 Earthquake,” Which was one of the popular topics. In general, Japanese artists have little interest in politics. So what was interesting was how the consciousness of Japanese artists has changed, including issues such as the image of tsunamis and energy problems. As lecture’s structure, I covered works by photographers like Naoya Hatakeyama and Lieko Shiga which have a connection to the disaster area, as well as examples of artists carrying out intervention and activist activities in the area such as Chim↑Pom and Kota Takeuchi, and specifically the example of Takeuchi’s “Finger-pointing Worker.”

I explained how Koki Tanaka and other architects attempted to use an indirect statement to show shared experiences of other people through the records of multiple collaborative projects, and referenced not only the earthquake, but also Rhizomatiks, and how there was a trend toward increasing interest in interpretation, abstraction, and visualization of situations and information. What was interesting to me was opinion from the audience, which pointed out that this was more a case of responding and carrying out activist-type work, and not really conceptual art. There was no context or logic, and one person asked me, “aren’t there any artists like On Kawara or Hans Haacke?” I answered with bringing up the term “soft conceptualism,” however, in Europe both social statements and the form of art are always discussed precisely. As a result, I felt that how Japanese artists give context to these things need to be discussed further more.

As an alternative to the genealogy of conceptual art, I brought up the topic of Japanese female artists, and how they behave

and perform in an anti-art manner, with strong focus on their individual lifestyles. I introduced Yayoi Kusama and Yoko Ono in this group, and went on to the shamanistic spiritualism of Mariko Mori and Rei Naito, the subculture and city culture relationships of the works of Tabaimo and MiwaYanagi, and the activities of Ellie from Chim↑Pom and Sputniko! in the social and media realms, closing with discussion of Kazuyo Sejima and Rei Kawakubo. Again, all these artists were branching out in conceptual art, attempting to take it in a new direction with their originality and criticism of traditional values as major elements.

Also, in the field of architecture, the new program architecture movement is being led by Japanese architects such as Toyo Ito, Shigeru Ban, SANAA, Atelier Bow-Wow, Junya Ishigami, and Sou Fujimoto. Together with recent earthquake-related public projects, I discussed this movement focusing on research into its social and conceptual context. Many architecture students participated at both the Serralves Museum of Contemporary Art and in Rome, and although they showed interest in Japanese architecture, what interested them was the collaborative element of how the curator and client worked with the architect to create the architecture program. I was especially involved with both the 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa and the Sharjah Art Foundation's Biennale (featuring public projects such as a park, oasis, and outdoor cinema theater), taking part from the comprehensive concept planning on, and there were a large number of questions related to the construction process, including the research stages. Once I gave a lecture to group whom considering construction of a new

art museum in Budapest, participants were interested in how to create a boundary between public and private.

3) Expectations for the Japanese curators

As for the curator workshops, the first was held in Moscow. In Moscow, private organizations hold intensive lectures because the systems at universities are insufficient. And I discussed the differences between exhibition management at museums and at large-scale exhibits like the biennale, and got some questions from students. They seemed to be interested in new form which institute can take, including how it differs from Western-style museums, and starting from how to create the location.

Also at the RCA in London, with its established systems, more than half of the students came from outside of Western Europe. I explained methods which were possible in differing infrastructure and cultural conditions through case studies. It seemed more interested to them on introducing my comparative methods and experiences that I gained through international exhibition as Japanese museum curator.

In Europe, respect for arts, high level of interest seemed to be more common in public. Besides, there is essence of art even in politics, society and daily life. Even people who seem not to interest in going to museums have understood the significance of art. This experience had given me great opportunity to consider what kind of explanations, exhibitions, and other presentations are effective under this circumstance.

Yuko Hasegawa Profile

After graduated from Kyoto University, Yuko Hasegawa completed her Master’s degree at the Graduate School of Fine Arts, Tokyo University of the Arts. She served as Chief Curator and Artistic Director at the 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa. Since 2006, she has been Chief Curator of the Museum of Contemporary Art, Tokyo and Professor of Art Science, Faculty of Art and Design, Tama Art University. She has been Artistic Director of the Inujima Art House Project since 2011. She has held prominent positions overseas, including Curator for the 11th Sharjah Biennial (2013) and Curator for the Encounters section of Art Basel Hong Kong 2012, 2013 and 2014. Also, she published books: “Why? Introducing Contemporary Art (Naze Kara Hajimeru Gendai Āto)” (NHK Publishing, Inc. Shinsho) and “Curation: Power to Shake Intelligence and Emotion (Curation: Chi to Kansei o Yusaburu Chikara)” (Shueisha Inc.).



菅木志雄「Situating Underlying Existence」展 展示風景 〈状為論〉1977/2014
撮影：佐藤 毅
Kishio Suga, "Situating Underlying Existence" exhibition
Exhibition of "Theory of Emerging Situation" 1977/2014 Photo: Tsuyoshi Sato



講演風景 Serralves Museum of Contemporary Art (ポルトガル, ポルトー)にて
Lecture in Serralves Museum of Contemporary Art (Porto, Portugal)



講演風景 The Club (アルメニア, エレバン)にて
Lecture in The Club (Yerevan, Armenia)

森山 未来

俳優・ダンサー

活動期間 平成 25 年 10 月 21 日～平成 26 年 10 月 20 日
活動国 イスラエル、ベルギー、イギリス、スウェーデン、ドイツ、ロシア

Mirai Moriyama

Actor and dancer

Period of the activities: From October 21, 2013 to October 20, 2014
Countries visited: Israel, Belgium, the United Kingdom, Sweden, Germany, Russia

中東と極東の狭間で

僕は文化交流使として1年という期間を、主に中東はイスラエルで過ごしていました。2013年に日本で製作されたミュージカル「100万回生きたねこ」という作品で、演出、振付、美術としてイスラエルの芸術監督インバル・ピント氏、アヴシャロム・ボラック氏と関わったことが、今回イスラエルはテルアビブを拠点とする彼らのダンスカンパニーにお邪魔するきっかけとなりました。

イスラエルと聞いてまず思い浮かべるのは紛争、危険地帯というところでしょうか。日本からするとあまり馴染みのない国ではあると思います。事実、僕が滞在していた1年間の間にガザ地区からイスラエルに向かってミサイルが打ち込まれ、戦争に突入し、毎日サイレンの音と共に稽古場へ赴き、舞台公演に臨んでいた時期もありました。ただ、そういった複雑な政治状況を抱えてはいますが、この国の芸術表現は荒々しくともオープンで活気に満ちたものだったと感じています。片や日本の芸術文化というものを日本人として日本の外から客観的、或いは主観的に見た時に、それは長い歳月をかけて構築され、細分化され、熟成された、繊細かつ美しい文化なのだと改めて再確認させられました。イスラエルには親日家が非常に多く、日本文化をいかに愛しているかを高い熱量で伝えてくる人々にはよく出会いました。逆に彼らから自分自身の国の文化を教わることもあったくらいです。

ところで、よく言われる話ですが、日本という国は「アイデンティティ」という言葉を正確に和訳された単語を持っていません。

- アイデンティティ【identity】
- 自己が環境や時間の変化にかかわらず、連続する同一のものであること。主体性。自己同一性。「一の喪失」
 - 本人にまちがいないこと。また、身分証明。

辞書を引くときこういった説明があるにはありますが、「あなたに自己同一性はあるのか」と聞かれても僕にはあまりピンと来ません。イスラエルでは様々なアイデンティティが入り乱れています。一時は世界中へと離散したありとあらゆる国の人達が「ユダヤ人」「ユダヤ教」という概念だけで再集結したことによってこの国は成り立っているの、民族としてはばらばらで様々な文化が混然としています。さらには現在「イスラエル」と呼ばれる地に元々住んでいたイスラム教やキリスト教の人達もいます。そして、西の地中海を除けば、国の境目は言ってみれ

ば、ただ地面に線を引いてあるのみ。その線をまたぐとエジプトがあり、ヨルダンがあり、シリアがあり、レバノンがある（あるいはパレスチナも）。そして、このうち二つの国とは国交が断絶しています。これ程までも複雑な状況下にある、建国から70年にも満たないこの国の人達が「私達はイスラエル人だ!」と叫び続けていると今すぐにでも押し潰されてしまうような精神状態であろうことは、僕にはちょっと想像を絶するものがあります。ですが、こういった問題はイスラエルだけのものではありません。大半の「海外」の国が多かれ少なかれ、こういった歴史を必ず抱えています。あくまでヨーロッパ側から見ると「極東」と呼ばれる日本。時には中国や朝鮮半島との交流はあったにしても、それでも長い間独自の発展を遂げて来た島国にとって、他の国、他の民族とのそれ程までの比較、反発を迫られる必要は長い間なかったのではないのでしょうか。誰かと比べる必要がない以上、「私達は日本人だ!」と誰かに主張する理由もありません。

では例えば、日本の文化とはどういったものなのか、という問いがあったとします。しかしそれは日本にしか住んだことがない人達からすると、あまりに無意識にそこに寄り添っているものなので、この問いに答えることは少し難しいのではないだろうかと思うのです。僕にもまだうまく答えることはできな

森山 未来 プロフィール

5歳からジャズダンス、6歳からタップダンス、8歳からクラシックバレエとヒップホップを始める。1999年「ボーイズ・タイム」（パルコ劇場他）で本格的に舞台デビュー。その後、多数の舞台経験を重ね、映画・舞台・テレビとジャンルを問わず幅広く活躍を続けている。近作に映画「苦役列車」、「人類資金」、舞台「100万回生きたねこ」、「PLUTO」、テレビ「モテキ」、「贖罪」、「夫婦善哉」など。



インバル・ピント & アヴシャロム・ボラックダンスカンパニーとの創作「WALLFLOWER」の公演写真。イスラエルはテルアビブミュージアムにて。Official photo from WALLFLOWER, a stage act by Inbal Pinto & Avshalom Pollak Dance Company at the Tel Aviv Museum of Art in Israel



いかも知れません。ですが、この1年でイスラエル、ベルギー、イギリス、ドイツ、スウェーデンと、様々な国で文化交流使として活動してきたことによって、自分の中で日本というものの美しさや独特さ、あるいは醜さをまた別の角度から認識できたことは確かだと感じています。グローバルであることが全てだとは思いません。閉鎖的であったからこそ、言うなれば今もなお閉鎖的だからこそ、唯一無二な日本文化というものがあるのだと強く思うのです。美しいところ醜いところあって当然、それでも家族さながら自分の国と向き合っていくしか仕様がいないのではないのでしょうか。改めて、自分がそんな日本人であることに喜びを噛み締めつつ、尚且つより豊かな芸術表現を求めて、時には日本に同意し、時には異議を唱えつつ、文化交流使としての活動報告をこれから一生継続していこうと思う次第です。

最後に、僕を文化交流使に推薦していただいた文化庁の方々に、そして誰よりも、僕を快く受け入れてくれたインバル・ピント氏とアヴシャロム・ボラック氏に心から感謝の意を申し上げます。

活動中の出演歴 (2013 ～ 2014 年)
「DUST」公演、「OYSTER」公演、「WALLFLOWER」公演 (以上 インバル・ピント & アヴシャロム・ボラックダンスカンパニー)、「Judas, Christ with Soy」公演、「HIBI」公演、「談ス」公演



イスラエル人ダンサー、エラ・ホチルドとの創作「Judas,Christ with Soy」の公演写真。イスラエルはスーザンデラルセンターにて。Official photo from Judas, Christ with Soy, a stage act with an Israeli dancer Ella Rothschild at Suzanne Dellal Centre in Israel

Between Two “East” Worlds

I spent one year in the Middle East, mainly in Israel, as a Japan Cultural Envoy. In 2013, I had the opportunity to be involved with artistic directors Inbal Pinto and Avshalom Pollak in the musical “The Cat That Lived a Million Times” that was produced in Japan that year. They worked on the production, choreography, and art direction of the stage. This bought me joining their Tel Aviv-based dance company in Israel.

People in Japan may not be so familiar with Israel. The first image that comes to mind about Israel would be: dangerous place of international conflicts. In fact, during my one-year stay, missiles were fired from the Gaza Strip into Israel, and war broke out. There was even a period when I heard the sound of sirens every day when I was going to the hall to rehearse or perform. However, despite the country being in the midst of such a complicated political situation, I felt that their artistic expression was very straight forward, open-minded, and full of life. On the other hand, when looking at Japanese art culture objectively and subjectively as a Japanese from outside of Japan, I recognized anew that it is a sensitive and beautiful culture that has been built, subdivided, and that has ripened over the course of a long history. There are a lot of Japanophilia in Israel, and I often met many, who enthusiastically told me how they love Japanese culture. I sometimes even learned about my own culture from them.

By the way, people often say that there is no accurate translation of the word “identity” in Japanese. If you look it up in a Japanese dictionary, you get explanation such as:

- Identity
- the state or fact of remaining the same one, as under varying aspects or conditions; subjectivity; a sense of self; often used in the context of “an identity crisis”
 - the state or fact of being the same one as described; an Identification

Even with definition appeared above, if someone asks me “do you have a sense of self?” it does not really come across clearly. In Israel, many different identities are jumbled. Since the country is consisted of people whom once dispersed all over the world and came



大植真太郎氏との創作「談ス」の稽古写真。スウェーデンはストックホルム、ダンススウェルスにて。Rehearsal photo from DAN-SU, a stage act with Shintaro Oue at Dansens Hus in Stockholm, Sweden

back and re-gathered under the concepts of “being Jewish” and “the religion of Judaism.” There are a vast number of races with different cultures. There are also Jews or Christians who had originally lived in the area that is now known as Israel. Moreover, except for the Mediterranean Sea in the west, the boundaries of the country can be described as lines simply drawn on the ground. Beyond those lines, there is Egypt, Jordan, Syria, and Lebanon (or also Palestine). Israel does not even have any diplomatic relations with two out of these countries (Lebanon and Syria). In a country with such a complicated situation and that was established less than seventy years, people may have to keep insisting that “we are Israelis!” to maintain their sanity. This is something beyond my comprehension. However, these sorts of issues do not only exist in Israel. Most of the countries around the world, which we tend to refer to as “abroad,” have always have had such kind of history in some extent. Especially for Europeans, Japan is a country in the “Far East.” Japan did have some ties with China and Korea in the past, but it is basically an island country that developed in its own way for a long period of time. For such a country, there may not have been a great necessity to compare themselves with or rebel against other countries and races throughout most of its history. Since there is no need to compare with others, there is no reason to exclaim to someone that “we are Japanese!”

Now, suppose that someone were to ask you what Japanese culture is like. For us, who have only lived in Japan and who have just live in the culture so naturally and unconsciously, it is a little difficult to answer this question. Even I may still not be able to answer it so well. Nevertheless, through my initiatives in various countries such as Israel,

Mirai Moriyama Profile

Mirai Moriyama began jazz dance at the age of five, tap dance at six, and classic ballet and street dance at eight. In 1999, he made a professional debut on the stage act BOYS TIME held in theaters such as PARCO Theater. Since then, he experienced various stages and has been active in a wide range of genres such as movies, the stage, and television. He recently appeared in the movies The Drudgery Train and The Human Trust, and the stage acts The Cat That Lived a Million Times and PLUTO, and the television series Love Strikes, Penance, and Meoto Zenzai.



河原田隆徳氏との創作 HIBI -crack / daily basis-」の本番写真。イスラエルはスーザンデラルセンターの屋外にて。Photo during a performance of HIBI - crack / daily basis -, a performance act with Takanori Kawaharada outside of Suzanne Dellal Centre in Israel

Belgium, Britain, Germany, and Sweden, as a Japan Cultural Envoy, I certainly feel that I was able to recognize the beauty, uniqueness, and ugliness of Japan from a whole new angle. I am not saying that being a global citizen is everything. What I am saying, and strongly believe, is that because we were isolated, and in some ways, we still are isolated, the culture of Japan is one of a kind. Of course, there are not only beautiful but also ugly aspects of Japanese culture, so just as you put up with your own family, you should be able to put up with your own country. And while I revel in the fact that I am Japanese, I will strive for a richer artistic expression, sometimes accepting Japan as it is, and other times rebelling against it, and continue reporting as a Japan Cultural Envoy for the rest of my life.

Lastly, I would like to express my sincere gratitude to the people in the Agency for Cultural Affairs who recommended me as a Japan Cultural Envoy, and above everyone else, I would like to thank Inbal Pinto and Avshalom Pollak who readily accepted and welcomed me.

Appeared in the following acts as Japan Cultural Envoy (2013-2014):

DUST, OYSTER and WALLFLOWER by Inbal Pinto & Avshalom Pollak Dance Company, Judas, Christ with Soy, HIBI, DAN-SU

林 英哲

太鼓奏者	
活動期間	平成 26 年 9 月 25 日～11 月 4 日
活動国	アメリカ合衆国, トリニダード・トバゴ, キューバ

Eitetsu Hayashi

Taiko player
Period of the activities: From September 25 to November 4, 2014
Countries visited: The United States, Trinidad and Tobago and Cuba

良質な日本文化を伝えたい ―― カリブ諸国とアメリカでの文化交流を終えて

成果

　ニューヨークでは、狭小劇場からメトロポリタン・オペラ大劇場までの多彩な演出や舞台表現の視察、また芸術家個々に会い芸術創作活動と生活の両立の実際、その中でもさまざまな方法で練習場所の確保や表現に立ち向かう事例（個人住宅のスタジオ改装，NPO法人化して古ビルをボランティア改装，など）や、舞台創作の現場（バジル・ツイスト氏演出「春の祭典」の工場跡での大規模リハーサル）などにも立ち会い、演出家本人と情報交換できたのは収穫だった。

　また太鼓ワークショップでは、ニューヨーク周辺には西海岸地域ほど熟練の太鼓指導者がいないため、一般太鼓愛好者やニューヨーク僧太鼓メンバーにとって、今回のワークショップが貴重な体験となったことがうかがえ、再訪を期待する声を多く聞いた。

　その後訪れたカリブ諸国のトリニダード・トバゴ、キューバは初めての訪問国で、劇場の舞台条件が思うようにならない面もあったが、スタッフ関係者は非常に協力的で「英哲風雲の会」四人を含む公演は大好評、一曲目からスタンディング・オベーションになるという熱狂ぶりだった。トリニダード芸術大学UTTでの講義演奏でも大学生が興奮して大いに興味を示し、質問攻めになるなど、好評裡に終えることが出来た。

　キューバでは二つの劇場で公演を行ったが、二回目の劇場では入りきらない観客のため、終演後すぐに観客を入れ替えて、もう一度演奏するという異例の公演になり、それほどまでに期待が高かったことを実感、日本キューバ友好 400 年記念事業としても大きな成果を上げることができた。

　再びアメリカに戻っての公演（バッファロー、ダブリン、サンフランシスコ）も大好評で、特にニューヨーク州立大学バッファロー校、スタンフォード大学、カリフォルニア州立大学サンフランシスコ校などのワークショップに参加した太鼓グループの大学生達は、日本人プロ演奏家（我々）から直接指導を受けた上に、舞台演出を伴ったプロの公演の様子を初めて見て、驚きと共に多大な刺激を受けたようだ。

　アメリカではスタンフォード大学、キャピタル大学（オハイオ州）で単位取得できる和太鼓授業を



© M.Tominaga

行っており、コーネル大学（ニューヨーク州）の和太鼓部「邪馬台 YAMATAI」も大学側が予算を組むほど熱心に取り組んでいるが、熟練の専門指導者がいるわけではなく、太鼓の歴史的背景を知る術も文献もない状態での取り組みだけに、それらの大学から駆けつけた学生達にとって今回のような授業が強く待ち望まれていたことがうかがえた。

――「和太鼓」と総称されるようになった現代日本の太鼓奏法は戦後、日本の伝統的芸能を基に現代的創意工夫や解釈を加えた新しい文化として創造され発展したもので、その後世界に伝播した分野――と解説し、その歴史的・文化史的背景や、打法の創作、作品誕生の背景など、彼らにとって知る機会のなかった話を、その過程を経験して来た当事者（林）から直接聞く、という講義も、驚きと共に有意義な経験になったようだ。同様の指導をしたサンノゼ太鼓共々、再来訪を希望する声が多かった。

　ダブリン太鼓、デビス中学校（オハイオ州）生徒などの小学生から高校生までの生徒達も熱心に取り組んでくれ、一般公演コンサートではサンフランシスコ芸術高校生徒も、八重奏室内楽と太鼓の現代作品「飛天遊」共演という難題に挑戦をしてくれ、またバッファロー・フィルハーモニー管弦楽団の首席ティンパニスト・マシュー・バセット氏との共演、カリフォルニア州立大学音楽学部教授ディー・スベンサー女史とのピアノ共演、米人尺八

一端を担っている者として、質の良い日本文化としての太鼓を直接届けるように努める責任も感じた。太鼓表現に限らず、良質の日本文化を求めるニーズは確実にある。

その他

　日本の太鼓は海外での聴衆の支持（人気）が高く、また太鼓演奏愛好者もアメリカ以外に、ヨーロッパ全土、オーストラリア、アジアなど広範に存在しており、日本の音楽文化としては異例の普及をしているが、その練習方法の多くは模倣から出発し、適切な指導を受けないままで、演奏技術も内容も質を問えないものが多い。

　日本国内でも事情は同様で、その簡単さ（スタートのしやすさ、一見、技術が単純そうに見えると）などが太鼓演奏の魅力として好まれる面もあるのだが、この分野のレベル向上のためには、経験と知識を備えた指導者の育成が不可欠と思わ

現地のニーズ

　今回は舞台公演と共に、大学での講義、太鼓部学生への指導を重点的に行ったこともあり、彼らが真摯に「正しい日本の太鼓の指導を受けたい」と欲しているニーズを強く感じた。

　例えば、海外で一般的になった寿司やラーメンなどの日本文化が、いつしか日本の味とは似て異なるものになる場合があるように、「自分達の太鼓も日本とは違うものをやっているのではないか」という危機意識のようなものが、一定レベル以上の太鼓愛好者達にあることが感じられた。

　ただそのニーズに応えられる適切な指導力のある経験者は、日本国内にもそうはおらず、もともと「正しい日本の太鼓」という統一基準的なものがなかったゆえに大衆的に発展して来た分野という事情もあり、海外の愛好家からの「正しさ」を求めるニーズに応える難しさも、実感した。

　ただ、レベルの高い演奏を見せると「それを学びたい」というニーズは当然湧きあがるわけで、今回の大学生や聴衆の反応を見ていると、今までこういうレベルの表現による太鼓演奏を見たことがなかった、という驚きを感じられ、この分野の



ポート・オブ・スペインの国立大学芸術学部での公開レクチャー&デモンストレーションの様子
 © 有限会社蓬 [ハル]
 Open lecture and demonstration at National Academy for the Performing Arts in Port-of-Spain
 ©HAL Co.,Ltd.

一端を担っている者として、質の良い日本文化としての太鼓を直接届けるように努める責任も感じた。太鼓表現に限らず、良質の日本文化を求めるニーズは確実にある。

その他

　日本の太鼓は海外での聴衆の支持（人気）が高く、また太鼓演奏愛好者もアメリカ以外に、ヨーロッパ全土、オーストラリア、アジアなど広範に存在しており、日本の音楽文化としては異例の普及をしているが、その練習方法の多くは模倣から出発し、適切な指導を受けないままで、演奏技術も内容も質を問えないものが多い。

　日本国内でも事情は同様で、その簡単さ（スタートのしやすさ、一見、技術が単純そうに見えると）などが太鼓演奏の魅力として好まれる面もあるのだが、この分野のレベル向上のためには、経験と知識を備えた指導者の育成が不可欠と思わ

Aspiration to communicate quality Japanese culture: After completing cultural exchanges in the Caribbean and America

Results

　In New York City, I inspected a wide array of directions and theatrical expressions at various venues, from small-sized theaters to the Metropolitan Opera. I also met with artists to witness how they balance their creation activities with daily life. In particular, actual cases of addressing issues such as securing locations to practice and striving for new expressions through various methods (modification of houses into studios, volunteer renovation of old buildings by incorporating NPOs, etc.) were very valuable to see. At the same time, visiting the actual site of a stage production (large-scale rehearsal of “The Rite of Spring” directed by Mr. Basil Twist at a former factory site) gave me a very useful experience to exchange information with the director in person.

　In relation to the Taiko Workshop, as expert taiko instructors are in short supply compared to the West Coast of the U.S., it appeared that for general taiko enthusiasts and members of Soh Daiko/Taiko in New York, this workshop was a precious experience, and I heard many comments hoping that we would visit them again in the future.

　Afterward, we travelled to the Caribbean to visit Trinidad and Tobago and Cuba for the first time. Though the stage conditions of the theaters did not quite meet our requirements, staff members were very cooperative, and the performances, including that from the four members of EITETSU FU-UN no KAI, were very successful. The audience were so excited that we received a standing ovation after the first song. During the performance at the University of Trinidad and Tobago (UTT), the

れる。

　また海外における「和太鼓」は、手作りや粗悪な太鼓で打たれていることも多く、適切な指導をしようにも、太鼓、台、撥などが充分でない状態で行わざるを得ないこともある。幸い今回の我々は道具類も持ち込みスタッフも同行するという恵まれた状況だったが、もし身ひとつで指導に行く場合は、そうした問題も考慮する必要があるう。

　現在、海外には日本人以外のプロ太鼓演奏家

林 英哲　プロフィール

「佐渡・鬼太鼓座」「鼓童」の創設に関わり、同座のトップ・プレイヤーとして数多くの世界ツアーをこなす一方で、主なレパトリ―曲を作編曲。11 年間のグループ活動の後、82 年、ソロ活動を開始。以後、太鼓独奏者として日本の伝統にはなかった大太鼓ソロ奏法の創造、多種多様な太鼓群を用いた独自奏法の創作など、前例のない太鼓ソリストという分野を開拓し、世界に向けて日本から発信する新しい音楽としてのオリジナルな太鼓表現を築きあげ、国境、ジャンルを越えて、今なお新たな創作活動に取り組んで、広く国内外で活躍中。97 年芸術選奨文部大臣賞、01 年日本文化芸術振興賞受賞、映画、演劇、CM、創作太鼓のための委嘱作品なども多く作曲、指導。CD、DVD、ビデオ多数。04 年より洗足学園音楽大学客員教授、09 年より筑波大学大学院非常勤講師、15 年 4 月より東京藝術大学客員教授。

students became very excited, showed a great deal of interest, and overwhelmed us with their barrage of questions. Overall our lecture was a big success.

　In Cuba, we performed at two theaters, but the show at the second theater was exceptional that the venue could not accommodate all the audience, thus we had to run the second performance immediately after replacing the audience from the first show. This made me realize how high level of expectation in our performance was. As an event in commemoration of the 400th Anniversary of Friendship between Japan and Cuba, it was a great success.

　The performances after returning to the U.S. (Buffalo, Dublin, and San Francisco) were again a huge success. University students of the taiko groups that participated in workshops at University at Buffalo, the State University of New York (SUNY-Buffalo), Stanford University, and the University of California, San Francisco (UCSF) received direct instructions from Japanese professional performers, and when watching a professional performance accompanied by a stage production, they appeared to be very surprised and stimulated.

　Stanford University and Capital University (Ohio State) has wadaiko (another name for taiko) classes to earn credits, while the “Cornell Taiko YAMATAI” wadaiko club of Cornell University (New York State) is so enthused with the instrument that they managed to receive a budget from the university. However, they did not have experienced specialist instructors, and as they had been working on performances

も多く、又「和太鼓」研究で学位を取得しようとする学生などもおり、今後もさらに海外でプロ指向の愛好者が増える可能性がある。

　そのような熱意を持った人々にとって「日本で学びたい」希求は高く、今後は、海外への派遣指導と共に、国内に設備共々、レベルの高い教育システムを創り、外国から専門的に学びに来たい人達のニーズに応えられるよう環境整備する必要があると思われる。



「日本・キューバ交流 400 周年記念」公演のカーテンコール風景 © 有限会社蓬 [ハル]
Curtain call at the performance in commemoration of the 400th Anniversary of Friendship between Japan and Cuba ©HAL Co., Ltd.

a joint performance by Mr. Josh Smith (an American shakuhachi player) and Mr. Shido Izukawa, gave a fresh surprise to audience, leading to the positive result of communicating an aspect of modern Japanese taiko.

Local needs

During my assignment period we focused on giving lectures at universities and instructions to students of taiko clubs in addition to doing stage performances, I really felt the need for “proper instruction in Japanese taiko.”

For example, as sushi, ramen, and other Japanese cultural features that have gained popularity overseas may become something similar yet different from Japanese original tastes over time, I could feel a sort of sense of anxiety along the lines that “we may be playing taiko in a way that is different from Japan” and I found this kind of concerns are common among taiko enthusiasts of a certain level of skill.

However, experienced players with an ability to provide proper instruction to meet these needs are not that many even in Japan, besides, as taiko is a field developed among people without a defining standard for “proper Japanese taiko” and this no existence of standard made the instrument to be wide spread, therefore I really felt the difficulty in responding to overseas enthusiasts’ needs for “what is right.”

However showing a high level performance, obviously increases needs for “learning.” Observing responses from the university students and audiences during the activities, I noticed their surprise to watch sophisticated performance As I play a part in this field of taiko, I felt a sense of responsibility to deliver taiko performance as a quality Japanese culture directly to people overseas.

For sure not only for taiko expressions, but also there are increasing needs for quality Japanese culture as a whole.

Other

Japanese taiko enjoys strong support from overseas audiences, and there are taiko performance enthusiasts in many areas of the world, such as Europe, Australia, and Asia, as well as the U.S. As a genre of Japanese music culture, taiko is exceptionally popular, but



「ダブリン太鼓 10 周年記念コンサート with 林英智&英哲風雲の会」公演後の様子 © 有限会社蓬 [ハル]
Following performance at the “Dublin Taiko Group 10-year Anniversary Concert Featuring Eitetsu Hayashi and EITETSU FU-UN no KAI ©HAL Co., Ltd.

instruments or tools, we need to take this kind of problem into consideration.

Currently, there are many non-Japanese professional taiko performers, as well as students working for their degree through wadaiko studies. Going forward, it is possible that a number of enthusiasts aspiring to become a profession will further increase in overseas.

For these enthusiasts, the desire to “study in Japan” is high, and it appears that we need not only to dispatch instructors overseas, but also focus on establishing an educational system of a high standard along with facilities in Japan, and improving the environment to meet the needs of people from abroad who want to come to Japan to study taiko professionally.

Eitetsu Hayashi Profile

Involved in the establishment of “Sado Ondekoza” and “Kodo,” Eitetsu Hayashi has toured the world many times as a top player in these troupes, while writing and arranging the main repertoires. After working on group activities for 11 years, he began solo activities in 1982. Since then, as a solo player, he has developed the unprecedented field of being a taiko soloist, creating odaiko (a larger version of taiko) solo execution not found in the Japanese tradition and establishing a unique style of rendition using various types of taiko. He has created original taiko expressions as new music transmitted from Japan to the world, and has been active in Japan and overseas, engaged in new creation activities across various borders and genres. He was awarded the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology’s Art Encouragement Prize in 1997 and the Award for Promotion of Traditional Culture in 2001. He has composed and instructed many commissioned works for films, plays, commercials, and original taiko works. He has also released many CDs, DVDs, and videos. He has been an appointed visiting professor of the Senzoku Gakuen Collage of Music since 2004, part-time lecturer at the Graduate School of University of Tsukuba since 2009, and visiting professor of the Tokyo University of the Art since April 2015.



スタンフォード大学のスタジオにて大太鼓マ스터クラスのワークショップを実施 © 有限会社蓬 [ハル]
Odaiko master class workshop at a studio at Stanford University ©HAL Co., Ltd.

事業概要・文化交流使一覧

◎ 編集について
・文化交流使による活動報告は、筆者本人の表現を尊重しており、公文書上の表記方法等とは異なる場合があります。

◎ Note
- We respect the right of Japan Cultural Envoys to express themselves individually in presenting these activity reports, so please be aware that the terminology used may not necessarily follow official guidelines.

文化交流使事業概要

文化庁では、芸術家、文化人等、文化に関わる方々を一定期間「文化交流使」に指名し、世界の人々の日本文化への理解の深化につながる活動や、外国の文化人とのネットワークの形成・強化に繋がる活動を展開しています。文化交流使は、諸外国に一定期間（1 か月～12 か月間）滞在し、それぞれの専門分野で講演、講習や実演、デモンストレーションなどを行います。平成 26 年度までに、伝統音楽や舞台芸術、生活文化やポップカルチャーといった多様な分野で活躍する芸術家、文化人等、延べ 115 人と 2 グループ（5 名）、26 組（団体）を 77 か国以上へ派遣しています。平成 25 年度および平成 26 年度は、下記の芸術家、文化人を「文化交流使」に指名しました。

《平成 25 年度》

○海外派遣型 土佐信道（明和電機社長、アーティスト）、平尾成志（盆栽師）、武田双雲（書道家）、レナード衛藤（和太鼓奏者）、森山開次（ダンサー・振付家）、挾土秀平（左官技能士）、森山未来（俳優・ダンサー）、長谷川祐子（キュレーター（学芸員）、大学教授）

○短期指名型 藝○座（伝統芸能〈日本舞踊〉）、チェルフィッチュ（演劇〈現代演劇〉）、小野雅楽会（伝統芸能〈雅楽〉）、株式会社わらび座（舞踏〈民族舞踊〉）、山海塾（舞踊〈舞踏〉）、声明の会・千年の聲（伝統芸能〈宗教音楽〉）

《平成 26 年度》

○海外派遣型 中澤弥子（食文化研究者、長野県短期大学教授）、林英哲（太鼓奏者）、林田宏之（CG アーティスト）、若宮隆志（「彦十蔭絵」代表）、平野啓子（語り部・かたりすと）、櫻井亜木子（琵琶演奏家）、岡田利規（演劇作家・小説家）、山井綱雄（金春流能楽師）

Overview

Since 2003, the Agency for Cultural Affairs has sent artists and other cultural figures abroad to serve as “Japan Cultural Envoys,” with a view to deepening the international community’s understanding towards Japanese culture, and to forming and strengthening networks with people around the world active in the cultural arena. The Envoys stay in one or more countries for a specified period (between one month and one year) where they conduct lectures, courses, demonstrations or other activities in their cultural fields. By the end of fiscal year 2014, a total of 115 individuals, 2 small groups (consisting of 5 people), and 26 larger groups specializing in various fields such as traditional music, performing arts, culture and lifestyle, and pop culture has been sent to more than 77 countries. The following artists and cultural specialists were appointed as Japan Cultural Envoys in FY2013 and FY2014.

FY2013

International Dispatch	Novmichi Tosa (President of Maywa Denki), Masashi Hirao (Bonsai Specialist), Souun Takeda (Kanji Artist), Leonard Eto (Taiko player), Kaiji Moriyama (Dancer and Choreographer), Syuhei Hasado (Japanese Plaster Craftsman), Mirai Moriyama (Actor and Dancer), Yuko Hasegawa (Chief Curator of the Museum of Contemporary Art, Tokyo and Professor of Tama Art University in Tokyo)
Short-term Appointment	Geimaruza (Traditional Japanese Dance), chelfitsch (Contemporary Theater), The Ono Gagaku Society of Tokyo (Traditional Music), Warabi-za (Japanese Folk Dance), Sankai Juku (Butoh), Shomyo no Kai “voices of Thousand Years”(Traditional Performing Arts <Religious music>)

FY2014

International Dispatch	Hiroko Nakazawa (Food Culture Researcher and Professor, Nagano Prefectural College), Eitetsu Hayashi (Taiko Drummer), Hiroyuki Hayashida (CG artist), Takashi Wakamiya (Producer of HIKOJU MAKIE), Keiko Hirano (KATARIBE=catalyst (story teller)), Akiko Sakurai (Biwa player), Toshiki Okada (Director / Writer / Novelist), Tsunao Yamai (Noh Actor in Komparu School)

文化庁文化交流使一覧

2015年3月現在

「文化交流使」には4つのカテゴリがあります。

- 海外派遣型 日本在住の芸術家、文化人等が諸外国に一定期間（1か月～12か月）滞在し、それぞれの専門分野で講演、講習や実演、デモンストレーションなどを行います。
- 短期指名型 国際芸術交流支援事業により海外で公演等を行う芸術団体等が、現地の学校等で実演会、演奏会等を行い、日本文化の普及活動を行いました。（平成20年度～平成25年度実施）
- 現地滞在者型 海外在住の芸術家、文化人がその滞在国で、それぞれの専門分野で講演、講習や実演デモンストレーション等を行いました。（平成15年度～平成21年度実施）
- 来日芸術家型 公演等で来日する諸外国の著名な芸術家、文化人が、日本滞在期間を利用して学校等を訪問し、実演、講演等を行いました。（平成15年度～平成19年度実施）

平成15年度（2003年）○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ―― 12名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
三浦 尚之 ^{なおゆき}	音楽プロデューサー	アメリカ	平成15年7月20日～9月1日
渡辺 洋一	和太鼓奏者	アメリカ	平成15年8月15日～9月6日
田中 千世子	映画評論家	ヨルダン、スロバキア、アイスランド、ハンガリー	平成15年8月15日～12月9日
小山内 美江子 ^{おさない}	脚本家	カンボジア	平成15年8月20日～9月24日
梅林 茂	作曲家	イタリア	平成15年8月27日～11月8日
国本 武春*	浪曲師	アメリカ	平成15年9月12日～平成16年8月10日
バロン吉元	漫画家	スウェーデン	平成15年9月22日～11月21日
三谷 温*	ピアニスト	クロアチア	平成15年9月27日～平成16年5月14日
笑福亭 鶴笑 ^{わくしやう} *	落語家	タイ、イギリス	平成15年12月1日～平成16年1月15日、平成16年3月30日～平成17年3月29日
小宮 孝泰*	俳優	イギリス	平成16年1月16日～5月11日
平野 啓一郎*	作家	フランス	平成16年2月28日～平成17年2月27日
四方田 犬彦*	映画評論家	イスラエル、セルビアモンテネグロ	平成16年3月15日～12月20日

〈現地滞在者型 ―― 4名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
高岡 美知子*	答礼人形研究家	アメリカ	平成16年3月1日～平成17年2月28日
松本 直み ^{なおみ} *	舞台照明研究家	フィリピン	平成16年3月1日～平成17年2月28日
ラーシュ・ヴァリエ*	詩人・スウェーデン議会国際課長	スウェーデン	平成16年3月1日～平成17年2月28日
ローチャン由理子*	画家	インド	平成16年3月1日～平成17年2月28日

〈来日芸術家型 ―― 5組〉

氏 名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
ソレダット	タンゴ・クインテット	ベルギー	平成15年10月15日	代々木高等学院
ケント・ナガノ	指揮者	アメリカ	平成15年10月30日	品川区立立会小学校
ルノー・カブソン	ヴァイオリニスト	フランス	平成16年1月7日	東村山老人ホーム
クリスティアン・アルミンク	新日本フィールハーモニー交響楽団音楽監督	オーストリア	平成16年1月14日	墨田区立両国中学校
ディビット・バイヤット	ホルン奏者	イギリス	平成16年3月15日	福岡市立舞鶴中学校

平成16年度（2004年）○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ―― 5名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
北村 昭斎 ^{しやうさい}	重要無形文化財「螺鈿」(各個認定)保持者	ドイツ	平成16年6月2日～7月10日
杉本 洋 ^{のぶし}	日本画家	カナダ	平成16年9月1日～11月30日
橋口 譲二*	写真家	ドイツ	平成16年12月13日～平成17年12月12日

ひらこ 井上 廣子*	造形作家	オーストリア	平成17年1月10日～平成18年1月9日	
宮田 まゆみ	笙演奏家	ギリシャ, イタリア, フランス, ドイツ, ルクセンブルク	平成17年2月1日～2月28日	
〈来日芸術家型 ―― 5組〉				
氏 名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
イシュトヴァーン・コロッシュ	オルガニスト	ハンガリー	平成16年6月12日	桜美林大学
エムバイヤ・プラス	金管五重奏	アメリカ	平成16年6月14日	神戸市立港島小学校
フランソワール・ルルー	オーボエ	フランス	平成16年10月5日	長崎市立山里小学校
カール・ライスター	クラリネット	ドイツ	平成16年10月19日	名古屋市立見付小学校
デニス・マトヴィエンコ	バレエダンサー	ウクライナ	平成17年3月3日	品川女子学院高等部

平成17年度（2005年）
○派遣順
＊印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ―― 5名〉				
氏 名	プロフィール	活動国	活動期間	
河村 晴久	能楽師	アメリカ	平成17年4月14日～5月25日	
村井 健	演劇評論家	ロシア	平成17年5月3日～6月9日	
神田 山陽*	講談師	イタリア	平成17年9月1日～平成18年8月31日	
平田 オリザ	劇作家・演出家	カナダ, アメリカ	平成18年1月3日～3月31日	
Ikuo 三橋*	演出家	フランス, ベルギー, モロッコ, マダガスカル	平成18年1月15日～12月14日	

〈現地滞在者型 ―― 2名〉				
氏 名	プロフィール	活動国	活動期間	
杉 葉子	女優	アメリカ	平成17年5月2日～10月31日	
ほんな 本名 徹次*	指揮者	ベトナム	平成17年11月17日～平成18年11月16日	

〈来日芸術家型 ―― 6組〉				
氏 名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
オクトバス4	コントラバス四重奏	イタリア	平成17年6月15日	東京国際学園高等部
アンヘル・コレーラ	バレエダンサー	スペイン	平成17年7月24日	六本木ヒルズ
ソレダッド	タンゴクインテット	ベルギー	平成17年7月25日	愛知県立明和高等学校
10人のミラクル・トランベッター TEN OF THE BEST	トランベット・アンサンブル	ドイツ	平成17年12月11日	秋田県立勝平養護学校
ラルス・フォークト	ピアニスト	ドイツ	平成18年2月6日	東京都立芝商業高等学校
日豪ジャズオーケストラ参加 オーストラリア・ミュージシャン	ジャズオーケストラ	オーストラリア	平成18年3月20日	広島県立尾道北高等学校

平成18年度（2006年）
○派遣順
＊印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ―― 9名〉				
氏 名	プロフィール	活動国	活動期間	
寺内 直子	神戸大学教授 日本の宮廷音楽・雅楽の研究及び演奏	アメリカ	平成18年8月28日～平成19年3月30日	
源田 悦夫	九州大学教授メディア芸術・情報デザイン	中国, 韓国	平成18年8月31日～10月25日	
川井 春香	華道家	スウェーデン, スペイン, イタリア, フランス	平成18年9月12日～12月15日	
勝美 巴湖*	日本舞踊家	イギリス	平成18年12月26日～平成19年7月15日	

坂手 洋二*	劇作家・演出家	アメリカ, フランス, ドイツ	平成19年2月5日～4月13日	
桂 小春團治	落語家	アメリカ	平成19年2月6日～3月10日	
とよざわ 豊澤 富助	人形浄瑠璃文楽	イギリス, ドイツ, スイス, イタリア	平成19年2月26日～3月28日	
寺井 栄*	能楽師（能楽観世流シテ方）	オーストラリア	平成19年3月5日～5月30日	
小林 千寿*	囲碁棋士	オーストリア, スイス, ドイツ, フランス	平成19年3月14日～平成20年3月13日	

〈現地滞在者型 ―― 1名〉				
氏 名／団体名	プロフィール	活動国	活動期間	
大坪 光泉*	華道家	中国	平成18年9月15日～平成19年9月14日	

〈来日芸術家型 ―― 9組〉				
氏 名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
アドリエル・ゴメス・マンスール	ピアニスト	アルゼンチン	平成18年4月24日	大分県日出町立日出小学校
オクトバス4	コントラバス四重奏	イタリア	平成18年6月20日	NPO楠の木学園（横浜）
ジョン・ナカマツ	ピアニスト	アメリカ	平成18年7月10日, 11日	新潟県立新潟盲学校, 新潟県立上越養護学校
ベーター・シュミードル	クラリネット奏者	オーストリア	平成18年7月14日	北海道立真駒内養護学校
エミリー・バイノン	フルート奏者	オランダ	平成18年7月22日	上飯老人福祉センター
ヴォルフガング・シュルツ	フルート奏者	オーストリア	平成18年8月26日	草津町立草津中学校
オーブリー・メロー	舞台演出家, オーストラリア国立演劇学校校長	オーストラリア	平成18年9月28日	東京都立富士高等学校
ツェンド・バットチョローン	モンゴル国立馬頭琴交響楽団芸術監督・指揮者	モンゴル	平成18年10月13日, 20日	相模原市立若松小学校, 板橋区立志村第四小学校
フランツ・リスト室内管弦楽団	管弦楽	ハンガリー	平成19年1月18日	北海道帯広養護学校

平成19年度（2007年）
○派遣順
＊印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ―― 9名〉				
氏 名	プロフィール	活動国	活動期間	
立松 和平	作家	中国	平成19年4月27日～5月26日	
三浦 友馨	華道家	中国	平成19年8月1日～9月28日	
なま ぼくねん 名嘉 睦稔	画家	韓国, フランス, スペイン	平成19年8月30日～11月13日	
本間 博*	将棋棋士	フランス, イギリス, ドイツ, スペイン, モナコ	平成19年8月30日～平成20年5月29日	
中村 享	盆栽作家	カナダ	平成19年9月5日～10月6日	
円田 秀樹*	囲碁棋士	ブラジル, 中南米諸国, アフリカ	平成19年10月2日～平成20年7月1日	
湯山 東	画家	フランス, チェコ, ドイツ	平成19年11月2日～12月19日	
桂 かい枝*	落語家	アメリカ	平成20年3月31日～10月1日	
橘 右門*	寄席文字書家	イギリス, ドイツ, ハンガリー	平成20年3月31日～平成21年2月16日	



〈来日芸術家型 ―― 7組〉				
氏名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
セルゲイ・ナカリヤコフ	トランベット奏者	フランス	平成19年4月17日	大分県日田市立桂林小学校
ファジル・サイ	ピアニスト	トルコ	平成19年7月11日	渋谷区立小学校
イアン・バウスフィールド	トロンボーン奏者	イギリス	平成19年7月14日	札幌市立札幌小学校
チェコ少年少女合唱団	合唱	チェコ	平成19年7月30日	北九州市立穴生中学校
アントニー・シビリ	ピアニスト	アメリカ	平成19年8月23日	群馬県立西邑楽高等学校
イングリット・フリッター	ピアニスト	イタリア	平成19年9月29日	滝乃川学園一橋大学
ニコラ・ルー・ツェヴィチ	チェロ奏者	クロアチア	平成20年3月18日, 19日	北海道音更高校中札内文化創造センター

平成20年度（2008年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型——8名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
島田 雅彦	作家	アメリカ、韓国	平成20年7月1日～平成21年3月31日
千 宗屋 ^{ちゅうけい}	茶道家	アメリカ、フランス、イタリア、イギリス、ドイツ、モナコ、メキシコ、ベルギー	平成20年7月31日～平成21年6月30日
梅若 猶彦 ^{うめわかし}	能楽師（シテ方）、静岡文化芸術大学教授	フィリピン	平成20年8月2日～9月8日
小林 千寿 ^{ちず}	囲碁棋士	フランス、オーストリア、ドイツ、スイス、イギリス	平成20年8月27日～平成21年3月26日
中川 衛 ^{えい}	重要無形文化財「彫金」（各個認定）保持者	アメリカ	平成20年9月8日～10月20日
常磐津 文字兵衛 ^{とこわす もじべゑ}	常磐津三味線奏者、作曲家	韓国	平成20年9月27日～10月27日
福田 栄香（千栄子改め） ^{えいか}	地歌箏曲演奏家	フィリピン、インドネシア、マレーシア	平成21年2月17日～3月16日
須田 賢司 ^{けんじ}	木工芸作家	ニュージーランド	平成21年3月22日～5月4日

〈現地滞在者型 — 2名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
 上野 宏秀山*	尺八奏者	シンガポール	平成21年2月1日～4月30日
 ブーイ 文子*	茶道家	タイ、インド	平成21年2月1日～4月30日

〈短期指名型 —— 5組〉

団体名	分野	在住国	活動期間	備考
財団法人日本伝統文化振興財団	狂言	インドネシア	平成20年9月3日, 5日	山本東次郎家, 狂言公演
舞踊集団菊の会	舞踊 (邦舞)	ブラジル	平成20年9月16日, 25日	
だいふく くらぶ (びいどろかい) 太神楽曲芸協会	太神楽曲芸	カンボジア	平成20年12月3日	
おんでこ ぎ 鬼太鼓座	和太鼓	ブラジル	平成20年12月16日	
大歌舞伎「NINAGAWA十二夜」 ロンドン公演実行委員会	歌舞伎	イギリス	平成21年3月26日	

平成21年度（2009年） ○派遣順

〈海外派遣型——10名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
有野 芳人 <small>よしと</small>	将棋棋士	中国	平成21年5月27日～8月9日
青木 紳一	囲碁棋士	オランダ, オーストリア, ドイツ, スロバキア	平成21年7月24日～12月27日
喜瀬 愼仁 <small>きせ しんじん</small>	三線奏者	フィリピン, 中国, フランス, ドイツ, イギリス	平成21年8月1日～平成22年1月31日
鶴賀 若狹掾 <small>つるが わかきりゆう</small>	重要無形文化財「新内節浄瑠璃」(各個認定) 保持者	イギリス, アイルランド, オランダ, ベルギー	平成21年9月14日～10月29日
竹本 千歳大夫 <small>たけもと ちとせ だゆう</small>	人形浄瑠璃文楽	チェコ, ドイツ, オーストリア	平成21年9月24日～10月24日
蜂谷 宗苙 <small>はちや そうりつ</small>	香道家元後継者	フランス, 中国, モナコ, イタリア, ドイツ, バーレーン, アメリカ, シンガポール, フィンランド	平成21年9月30日～平成22年3月24日
武関 翠篁 <small>たけせき さいこう</small>	竹工芸家	ドイツ	平成21年10月11日～11月17日
伊部 京子	和紙造形家	アメリカ, エジプト	平成21年11月3日～平成22年3月3日
久保 修 <small>くぼ しゅう</small>	切り絵画家	アメリカ	平成21年12月30日～平成22年3月26日
三橋 貴風 <small>きふふう</small>	尺八演奏家	韓国, ブラジル	平成22年2月5日～3月23日

〈現地滞在者型 — 1名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
さわさき たくま 澤崎 琢磨	和太鼓奏者	パラグアイ、ブラジル	平成21年8月1日～10月31日

〈短期指名型 —— 5組〉

団体名	分野	活動国	活動期間	備考
NPO法人和文化交流普及協会	伝統芸能（獅子舞, 津軽三味線, 和太鼓等）	ウルグアイ	平成21年9月7日, 8日	
落語会 猿楽會	狂言	オーストリア	平成21年10月13日	
社団法人落語芸術協会	落語	カンボジア	平成21年11月25日	
株式会社オフィスK2	和太鼓	ウズベキスタン	平成22年1月23日, 24日, 26日	和太鼓「婢弥鼓」
ミュージック・フロム・ジャパン 推進実行委員会	雅楽	アメリカ	平成22年2月22日	

平成22年度（2010年） ○派遣順 ＊印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型——12名〉

名	プロフィール	活動国	活動期間
黒 まどか	俳人	フランス, イギリス, ルーマニア, ベルギー	平成22年4月24日～平成23年3月25日
いわみ せいじ*	漫画家	シンガポール, マレーシア, 韓国, イギリス	平成22年8月4日～平成23年7月31日
藤間 万恵*	日本舞踊家	中国	平成22年9月4日～平成23年7月16日
佐々木 康人	華道	ベトナム, シンガポール, タイ, マレーシア	平成22年9月9日～11月14日
糺輪 敏泰	和太鼓奏者	メキシコ	平成22年9月20日～10月26日
笑福亭 銀瓶	落語家	韓国	平成22年9月30日～10月31日
山村 浩二	アニメーション作家	カナダ	平成22年11月12日～12月19日
安田 泰敏	囲碁棋士	オーストリア, スイス, フランス, ロシア, ヨルダン, イスラエル, モロッコ	平成22年11月15日～平成23年2月28日
野田 哲也	版画家	イスラエル, イギリス	平成22年12月3日～平成23年1月17日
山内 健司	俳優	フランス, スイス, ベルギー	平成23年1月7日～3月31日
澤田 勝成	津軽三味線	中国	平成23年2月20日～3月20日
津村 禮次郎*	能楽師	ロシア, ハンガリー	平成23年2月24日～4月9日

〈短期指名型——4組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
一般社団法人日本伝統芸術国際交流協会	沖縄舞踊	メキシコ	平成22年10月19日
財団法人日本余暇文化振興会	津軽三味線	メキシコ	平成22年10月23日
有限会社アトリエ・アサクラ	日本舞踊	韓国	平成22年10月28日、29日、11月1日、2日
金春流能ドイツ巡回公演実行委員会	能	ドイツ	平成23年1月20日、28日

平成23年度（2011年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型——6名・1グループ〉

氏名/グループ名	プロフィール	活動国	活動期間
真鍋 尚之*	雅楽演奏家、作曲家	ドイツ、フランス、オーストリア、スウェーデン、ロシア、ベルギー、オランダ、イタリア、スイス、ベラルーシ、チェコ、セルビア	平成23年5月14日～平成24年5月13日
時友 尚子	染色家	エストニア、ラトビア、リトアニア、フィンランド	平成23年10月26日～11月25日
薄田 東仙	書道家・刻字家	イスラエル	平成23年10月27日～12月4日
辰巳 満次郎*	能楽師	韓国	平成24年1月9日～4月19日
AUN (井上良平、井上公平、齋藤秀之)	和楽器奏者	タイ、ラオス、ベトナム、カンボジア	平成24年1月21日～2月25日
塩田 千春	現代美術家	オーストラリア	平成24年2月7日～3月7日
佐佐木 幸綱*	歌人	ドイツ、ポーランド、スイス、フランス、オランダ	平成24年3月8日～6月4日

〈短期指名型 ― 3組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
<small>こでん</small> 訃傳の会	人形浄瑠璃文楽（素浄瑠璃）	ドイツ	平成23年9月26日
ミュージック・フロム・ジャパン 推進実行委員会	雅楽	アメリカ	平成24年2月21日
特定非営利活動法人ACT.JT	伝統芸能・大衆芸能	アメリカ	平成24年3月26日～28日

平成24年度（2012年）○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 8名・1グループ〉

氏 名／グループ名	プロフィール	活動国	活動期間
<small>しんご じゅんき</small> 榎戸 二幸	生田流箏曲	ドイツ、オーストリア、イギリス	平成24年5月28日～8月31日
うるまでるび（うるま、でるび）*	アニメーション・アーティスト	アメリカ	平成24年9月2日～平成25年8月31日
<small>もとひこ</small> 茂山 宗彦*	大蔵流狂言師	チェコ、オーストリア、ルーマニア、リトアニア、ポーランド	平成24年10月3日～平成25年7月3日
矢崎 彦太郎	指揮者	アルジェリア	平成24年12月6日～平成25年3月16日
<small>ま ひ はら る げん</small> 海老原 露巖	墨アーティスト、書道家	イタリア	平成25年1月20日～2月23日
<small>よしかず</small> 藤本 吉利	和太鼓	中国	平成25年1月21日～2月21日
小島 千絵子	民俗舞踊	スペイン、ポルトガル、ベルギー、イギリス	平成25年 1 月21日～3月11日
<small>やまじ</small> 山路 みほ*	箏曲演奏家	ロシア、ドイツ、イタリア、スイス、スロベニア、オーストリア、スロバキア、フィンランド、ラトビア、ハンガリー	平成25年1月27日～6月30日
大澤 奈留美*	囲碁棋士	アメリカ、ブラジル	平成25年3月14日～5月13日

〈短期指名型 ― 3組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
<small>くろもりかぐら</small> 黒森神楽アメリカ公演実行委員会	伝統芸能・大衆芸能	アメリカ	平成24年10月31日
コンドルズ	舞踊	タイ	平成25年3月1日
公益財団法人せたがや文化財団	演劇	アメリカ	平成25年3月25日

平成25年度（2013年）○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 8名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
土佐 信道	明和電機社長、アーティスト	フランス	平成25年6月3日～7月11日
<small>まさし</small> 平尾 成志	盆栽師	リトアニア、イタリア、フランス、オランダ、アメリカ、メキシコ、オーストラリア、ドイツ、トルコ	平成25年6月11日～10月24日
<small>そうらん</small> 武田 双雲	書道家	ベトナム、インドネシア	平成25年7月31日～8月31日
レナード 衛藤*	和太鼓奏者	スイス、フランス、イタリア、チュニジア、ポルトガル、インド、オランダ、ドイツ、ハンガリー	平成25年8月8日～平成26年7月23日
森山 開次	ダンサー・振付家	インドネシア、ベトナム、シンガポール	平成25年10月18日～12月3日、平成26年1月4日～19日
<small>はろし</small> 挾土 秀平	左官技能士	アメリカ	平成25年10月19日～11月30日
森山 未来*	俳優・ダンサー	イスラエル、ベルギー、イギリス、スウェーデン、ドイツ、ロシア	平成25年10月21日～平成26年10月20日
長谷川 祐子*	キュレーター（学芸員）、大学教授	アラブ首長国連邦、ドイツ、モロッコ、フランス、アメリカ、モナコ、アルメニア、グルジア、スウェーデン、ベルギー、イギリス、イタリア、中国、チェコ、ハンガリー、スイス、ロシア、ポルトガル	平成26年3月12日～7月14日

〈短期指名型 ― 6組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
<small>げいまる ざ</small> 藝〇座	伝統芸能（日本舞踊）	スペイン	平成25年9月19日、26日
チェルフィッチュ	演劇（現代演劇）	ギリシア	平成25年11月1日～2日
小野雅楽会	伝統芸能（雅楽）	ロシア、ドイツ	平成25年11年12日、14日、18日
株式会社わらび座	舞踏（民族舞踊）	ベトナム	平成25年12月20日、28日
山海塾	舞踊（舞踏）	インド	平成26年1月15日～16日
声明の会・千年の聲	伝統芸能（宗教音楽）	アメリカ	平成26年3月7日

平成26年度（2014年）○派遣順

〈海外派遣型 ― 8名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
<small>ひろし</small> 中澤 弥子	食文化研究者、長野県短期大学教授	フランス、ドイツ、ポーランド、ハンガリー、イタリア、スロバキア、イギリス	平成26年8月10日～10月13日
林 英哲	太鼓奏者	アメリカ、トリニダード・トバゴ、キューバ	平成26年9月25日～11月4日
林田 宏之	CGアーティスト	クウェート、ヨルダン、レバノン、サウジアラビア、バーレーン、ベトナム、タイ	平成26年11月1日～12月14日
若宮 隆志	「彦十葎絵」代表	イギリス、フランス、中国	平成26年11月2日～12月3日
平野 啓子	語り部・かたりすと	ドイツ、トルコ	平成26年11月14日～12月15日
櫻井 亜木子	琵琶演奏家	エルサルバドル、ブラジル、アメリカ、イギリス、イタリア、スイス、アルバニア	平成27年1月7日～3月21日
岡田 利規	演劇作家・小説家	中国、韓国、タイ	平成27年1月12日～3月2日
山井 綱雄	<small>こんばるりお</small> 金春流能楽師	フランス、アメリカ、カナダ	平成27年2月1日～3月15日

文化庁文化交流使フォーラム 2015 - 第 12 回文化庁文化交流使活動報告会 -

主催：文化庁 共催：政策研究大学院大学（GRIPS）

Japan Cultural Envoy Forum 2015

Host: Agency for Cultural Affairs of Japanese Government Co-host: National Graduate Institute for Policy Studies